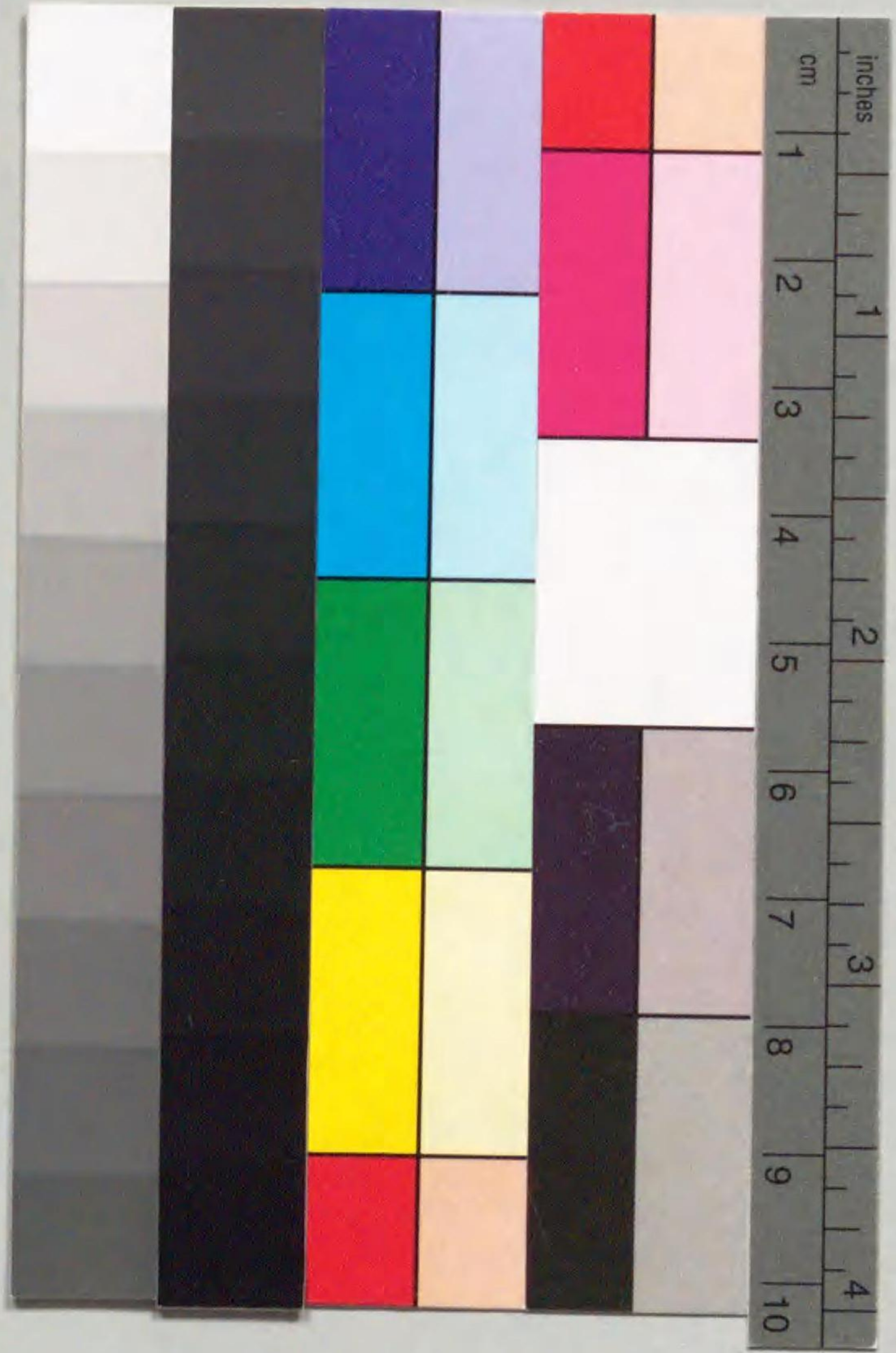


188.8
K0548
K

8.8
548
K

00289612



18
K



國譯禪學大成



第二十三卷

188.8
K0548
K



289612

國譯禪學大成第二十三卷凡例

一、本大成第二十三卷に収載する所の書は、大覺禪師坐禪論一卷と夢窓國師語錄三卷との二部四卷なり。

一、以上の書中、大覺禪師坐禪論は、鎌倉建長寺の開山、勅諭大覺禪師蘭溪道隆和尚の著にして、我が國、禪法流傳の最初に於ける撰述に係る。本書は一小冊子に過ぎずと雖も、參禪學道者のために、其の用心を説くこと頗る懇切にして、曹洞宗の道元禪師著の普勸坐禪儀に相對して、臨濟禪徒のために日用進修の警策として、實に貴重なる書なり。卷末には大覺禪師省行文、大慧禪師發願文及び中峯和尚の坐禪論の三篇を附して學者の參考に資せり。而して本書の舊版は殆んど存するものなく、纔かに徳川時代寛永二十年秋に刊行せられたるもの一種あるのみ。而も其の書すら坊間に傳ふること極めて稀なり。故に今次、國譯するに就いては、只だ此の寛永の刊本のみに依據せり。

一、夢窓國師語錄は具には『夢窓正覺心宗普濟國師語錄』といひ、京都天龍寺開山、夢窓國師疎石禪師一代の語要を収録したるものにして、上卷には京都南禪寺、鎌倉淨智寺、同建長寺、再住南禪寺、洛の天龍寺、再住天龍寺等の住山語録を載せ、下卷には陞座、

拈香、小佛事、佛祖贊、自贊、偈頌等を收め、附録一卷には西山夜話、臨川家訓、偈頌の拾遺、祭文、疏、法語、發願文等を収録せり。是れ國師在世中、門人等が編輯せる者にして、上下二卷は足利時代貞治四年、藤原徳叟居士が初めて之を印行せり。徳川時代に至りては、慶安三年、以上貞治本を基として附録一卷を添へて刊行せり。其の後、元祿十三年、之に拾遺、年譜などを加へて四卷本として開板せり。今次、國譯するに際しては、慶安の板本に據れり。

一、以上の中、大覺禪師坐禪論は臨濟風の坐禪を知るには好箇の指南車たるべく、夢窓國師語録は佛光、佛國の語録と共に、佛光派の面目を窺ふには、是れに過ぎたるものなく、且つ當時の史料としても亦貴重すべきものなり。

昭和五年九月

編者 黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十三卷

目次

國譯大覺禪師坐禪論解題	……………	一三
國譯大覺禪師坐禪論	……………	一四
大覺禪師坐禪論原文	……………	一一二
國譯夢窓國師語錄解題	……………	一五

國譯夢窓國師語錄序……………一一二

國譯夢窓國師語錄……………一一三〇

夢窓國師語錄原文……………一一一四

國譯大覺禪師坐禪論

解題

大覺禪師坐禪論一卷は、來朝僧たる鎌倉建長寺の開山、勅諭大覺禪師蘭溪道隆和尚の撰述にして、禪師が來朝後、參禪學道者のために、坐禪の目的、その方法及び用心などに就いて丁寧ていねいに説示せられたるものなり。猶ほ卷末に、大覺禪師の省行文、大慧禪師の發願文及び中峯和尚の坐禪論等を添へたるは、後年、本書の開板者が老婆心の餘りに出でたるものにして、之を彼此相對照せば、其の得る所も亦尠からざるべし。而して古來、坐禪に關して説示したる書は頗る多し。例へば長蘆宗の坐禪儀、佛心才の坐禪儀、宏智の坐禪箴、道元の坐禪箴及び普勸坐禪儀、瑩山の坐禪用心記などの如き是なり。就中、蘭溪の坐禪論は、いはゆる臨濟風の坐禪を論じたるものにして、凡て問答體に記し、而も其の所説悉く、參禪者乍入の參考としては甚だ便なるものなり。

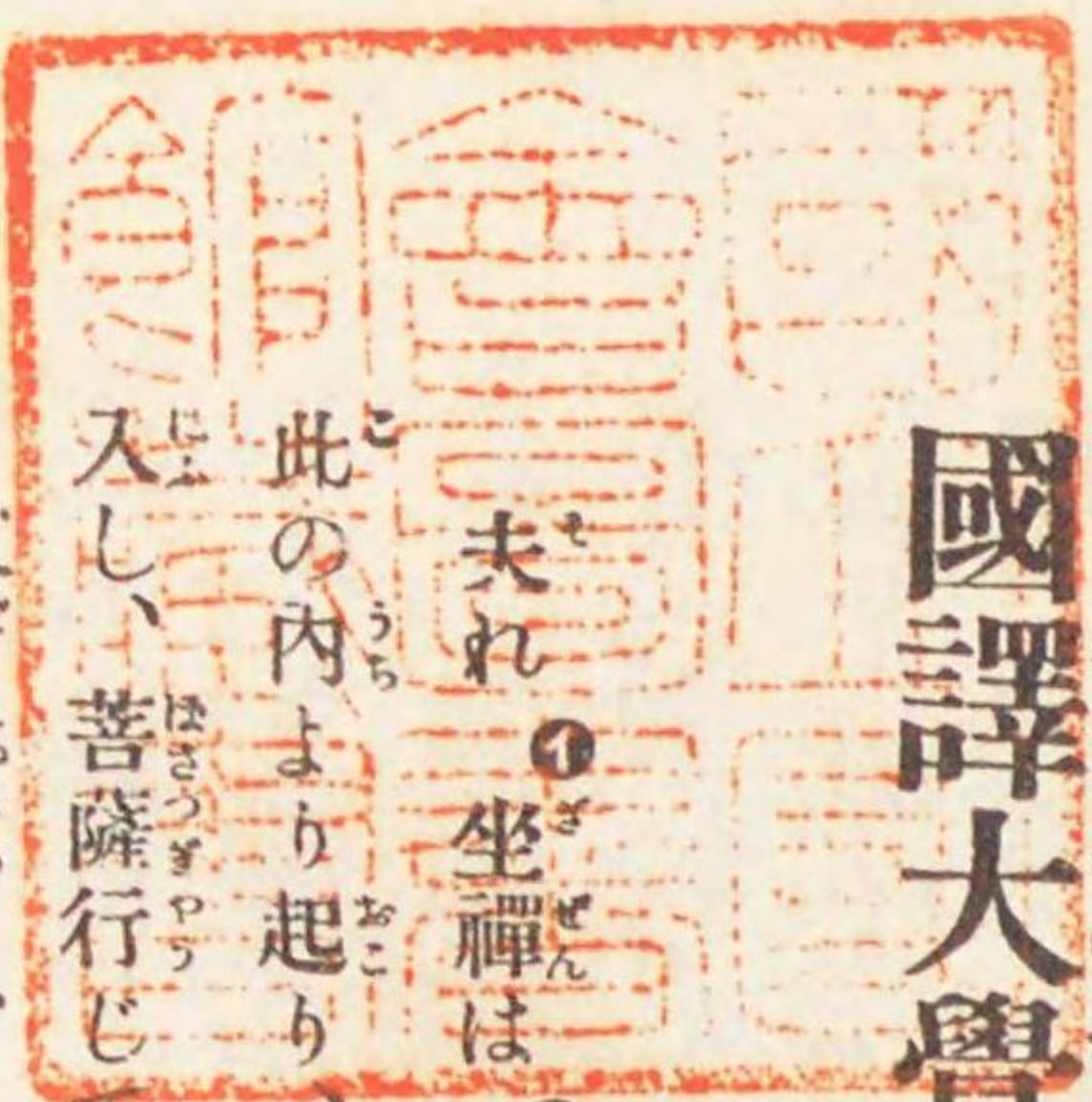
傳を案ずるに、師諱は道隆、蘭溪と號す。支那西蜀涪江（今の四川省西川道綿陽縣）の人なり。俗姓は冉氏、南宋の寧宗皇帝、嘉定六年（我が順徳天皇の建保元年、皇紀一八七三）を以て生る。天性瀟倫、年方に十三にして成都の大慈寺に投じて得度し、諸方に遊歴して講席に侍す。後、江を下りて浙に

入り、無準師範、癡絶道冲、北嗣居簡等に謁し、日々に參請すれども都て契入する所なし。乃ち錫を杖ついで陽山（湖南省にあり）に至り、無明惠性禪師に依る。一日、性の「東山の牛臆懼を過ぎる」の話を擧するを聞いて、忽然として開悟す。辭して明州の天童山に寓す。偶々我が入宋僧の日本の教界を語りて、教法のみ繁榮して禪宗の未だ振はざるを嘆ずるを聞き、深く東渡の志を懐く。淳祐六年、我が國の商舶、來遠亭にあるや、師往いて之を觀、遊志頗る動き、遂に意を決して、弟子義翁、龍江等の數輩を率ゐて博多に著す。時に我が後嵯峨天皇の寛元四年にして、師年三十三歳なり。

師始め博多の圓覺寺に留り、尋いで京都に上り、泉涌寺の來迎院に寓す。時に鎌倉壽福寺に大敬了心のあるを聞いて、之に赴き、錫を席下に掛く。執權北條時頼、師の來化を聞いて大いに喜び、迎へて常樂寺に居らしめ、政務の餘暇、常に其の室に入つて法要を問ふ。遂に一大伽藍を山の内の地に營構し、建長五年成る。巨福山建長興國禪寺と號し、師を請じて開山始祖となす。師乃ち常樂寺七年の居を去つて建長寺に入り、四來の大衆を接待して、大いに宗風を擧揚せり。同七年、時頼更に千人に募縁して巨鐘を鑄る、師之が銘を作る。正元元年、師年四十六、請に應じて京都の建仁寺に移り、開山明庵禪師の忌齋を行ふ。時に東福寺に聖一國師在り、都下の禪風大いに興る。後嵯峨上皇師の道譽を聞き、詔して宮中に召し、宗要を問ふ。師一偈を進めて曰く、「夙縁深厚到扶桑、忝主精藍一十五霜、大國八宗今鼎盛、建禪門慶仰賢王」と。上皇、師の護宗の志の篤きを感ず。師、建仁に住する

こと三年、席を義翁に譲り、去つて鎌倉に歸り、再び建長寺に住す。時に衆中に背逆の輩あり、事によつて幕府に讒す。師これがために甲州に謫せられ、州の東光寺に居る。甲の官民競うて歸仰す。師曰く、「我れ法の爲に海を踰えて此の國に入る、而も僅かに皇畿を周旋することを得るのみ、未だ遐陬に誘導するに遑あらず。今讒に因つて此に至る、天龍豈に斯に意あるか」と。乃ち樂然として處す。居ること三年、再び歸つて建長寺に就く。而も謗議未だ已まず、復た甲州に移る。幾もなくして事判明し、時頼使を遣はして師を迎へ、鎌倉壽福寺に居らしむ。弘安元年五月、建長寺に旋り、秋七月の初、微疾を示す。同二十四日、沐浴して衣を更へ、偈を書して曰く、「用ニ翳睛術、三十餘年、打ニ翻筋斗、地轉天旋」と。筆を置いて衆に辭して寂す。年六十六。衆徒、茶毘して靈骨を建長寺の東南に收めて塔を樹て、西來庵といふ。翌弘安二年、北條時宗、朝廷に奏して大覺禪師と謚す。蓋し本朝、禪師號の嚆矢なり。法を嗣ぐもの、義翁、葦航、無及、宏辯、約翁、林叟、月峯、桑田等二十四人あり。著作は本書の外、語錄三卷、同拾遺一卷あり。皆世に行はる。

國譯大覺禪師坐禪論



夫れ坐禪は

大解脱の法門なり。諸法是れより流出し、萬行是れより通達す。

神通智恵の徳、

此の内より起り、人天性命の道、此の内より開く。諸佛已に此の門より出入し、菩薩行じて即ち此の門に入る。二乗は猶ほ半途にあり、外道行すと雖も正路に入らず。顯密の諸宗、此の法を行せずして、佛道を成ずるものあらざるなり。

問うて曰く、「坐禪は諸法の根源たりと、意志如何。」

答へて曰く、「禪は佛の内心なり、律は佛の外相なり、教は佛の言語なり、念佛は佛の名號なり。是れ皆佛心より出づ、是の故に根本とするなり。」

問うて曰く、「禪法は無相無念にして、靈徳露れず、見性もまた證據なし、何を以てか之を信すべき。」

答へて曰く、「自心と佛心と一味、豈に靈徳にあらずや。我が心我れ知らずんば、誰を喚んでか證據とせん。即心即佛の外、何の證據をか求めん。」

①坐禪。六祖壇經に曰く、「外一切の善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐となし、内自性を見て動ぜざるを名けて禪となす」と。

②解脱。煩惱の繫縛を解き、迷界の業苦を脱すること。

③法門。法は教法なり、門は通入の義。佛法は衆生をして生死を脱して涅槃に趣かしむるの門なるが故に、法門と云ふ。

④神通。神變不思議にして自在無礙なる作用を云ふ。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、神足通、漏盡道を六神通と云

問うて曰く、「能く一心法を修すると也た萬行萬善を修すると 功德争か之を比すべき。」

答へて曰く、「頓に 如來禪を覺了すれば、六度萬行體中に圓なり。然るときんば禪の法、一切の諸法を備へたり。豈に道ふことを見ずや。三界唯一心、心外無別法、縦ひ萬行を修すとも、心法を知らずんば、悟を得べからず。若し悟を得ずして、成佛すと道はゞ、豈に其の理あらんや。」
問うて曰く、「此の法如何が修行すべき。縦ひ修行をなすとも、開悟することを得ずんば、成佛不定なり。若し不定ならば、修行をなすと雖も、何の益かあらん。」

答へて曰く、「此の宗は甚深微妙の法門なり。若し一たび其の耳を経るるとあれば、長く菩提の勝因となる。古人云く、「此れを聞いて信せざるものも、福人天に超ゆ、學んで得ざるものも、終に佛果に到る」と云云。此の法は 佛心宗なり。佛心本より迷悟なし、正しく如來の妙術なり。縦ひ悟を得ずと雖も、一座の坐禪は、一座の佛なり、一日の坐禪は、一日の佛なり、一生の坐禪は、一生の佛なり、未來も亦是の如し。只だ是の如く信

するものは、大機根の人なり。」

問うて曰く、「若し是の如くならば、我も也た修行すべし。云何が安心し、如何が用心せんや。」

答へて曰く、「佛心一切、相に着することなし。相を離るるを以て、實相とす。行住座臥、四威儀の中、坐を以て安穩の義とす。以て端坐思實相と云ふ。」

問うて曰く、「端坐思實相の義、微細に之を説け。」

答へて曰く、「端坐とは如來の結跏趺坐、思實相とは、所謂坐禪なり。法界定印を結んで、身心動せず、眼半目を開き鼻端を守つて、當に一切有爲の法は、夢幻泡影の如しと見るべし、念頭に繋くること莫れ。」

問うて曰く、「足を結び印を結ぶは、如來の威儀なり、半目を開き鼻端を守るは、何事ぞや。」

答へて曰く、「眼を開いて遠く見れば、紛飛の境に侵されて、心散亂し、目を塞げば又昏沈の境に落ちて、心中明かならず。眼半目を開くとさんば、念々恐々ならずして、身心一如にして、明察なるとき、生死煩惱、近傍す

② 二乗は聲聞・緣覺なり、共に小乗教の聖者。

③ 顯密 顯教と密教なり、密教とは眞言宗及び天台宗の一部を云ひ、顯教は其餘の諸教宗を云ふ。

④ 律 佛の制し給へる戒律、即ち規矩法度なり。

⑤ 見性 衆生本具の佛性を見徹して、一超直に佛地に入るなり。

⑥ 即心即佛 僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛、祖曰く、「即心即佛」と。

⑦ 一心法とは見性悟道の禪法を指す。

⑧ 如來禪 釋迦如來より迦葉に傳へ、以後轉々相傳したる禪法。

⑨ 六度 度は梵語、波羅密の譯語なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして菩薩の修する行を云ふ。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、是れなり。萬行はよろづの善行なり、大藏一覽に云く、「開いて六度となり、散じて萬行となる」と。

⑩ 三界唯一心 心外無別法とは森羅萬象悉く一心に外ならざるを云ふ、此の意華嚴經に詳かなり。

⑪ 菩提は梵語なり、智、道、覺などと譯す。佛の正覺を云ふなり。

⑫ 佛心宗とは禪宗を云ふ。他の諸宗の佛の言説即ち經論を所依として立教開宗せるに異なりて、直に佛心を相承するが故に斯く云ふなり。

⑬ 一座の坐禪は一座の佛云々。多時の坐禪修行の功を積み、而して後、佛となるにあらず、他念を雜へず三昧に坐禪せる當體、即ち是れ佛に外

べからず。是れを名けて、立地成佛、大機大用と云ふなり。」

問うて曰く、「是の如きの事を聞くと雖も、尙ほ以て信心及び難し。經咒を讀誦して其の功を積み、持齋持戒、名號を唱へて、其の徳を累ねて専ら憑あり、只だ何事をもなさずして安禪せば、何の奇特かあるべきや。」

答へて曰く、「是の如く疑ふを生死の業と云ひ、是の如く疑ふを煩惱と云ふなり。一切の法を行じて所得の心なきを、名けて深甚一般若となす。般若智慧なり、此の智慧能く生死の根源を切る利劍なり。善根を修して、其の果報を願ふは、凡夫の迷なり。菩薩善根を修して、其の果報を求めず、大慈大悲に向つて善根を修するが故に、菩提の資となる。果報を願つて善根を修し、人天の小果を成ずる人、定めて生死の業なり。」

問うて曰く、「善根の功徳を聚めずして、争か萬徳圓滿の佛を成すべきや。」

答へて曰く、「善根功徳を聚むれば、三大阿僧祇劫を歴し、當に成佛すべし。因果不二の法を行じては、一生に成佛す。自心を明め自性を悟る人、自己本來の佛を見るなり、今始めて成佛するにあらず。」

ならざるを云ふ。

① 機根。根は物の本となる力、機は此の力の發動する作用なり。大機根とは即ち佛道修行の大能力あること。

② 相に著す。相はすがた、かたちなり、著は執着なり、外相に執着すること。

③ 四威儀。行住座臥のこと、威儀とは規矩禮節に合へる動作のこと。

④ 結跏趺坐は坐禪の際の座り方なり、右足を左の股の上におき、左足を右の股の上におくを云ふ、精しくは坐禪儀等を見よ。

⑤ 法界定印。定印とは入定の相を標する印契なり、法界定印とは、一に佛部の定印ともいひて大日如來の住定印なり。

⑥ 有爲。因縁によりて生じたるもの、爲作造作を有するの意なり。

問うて曰く、「見性成佛の人は、因果によらず、善根を修すべからざるか。」

答へて曰く、「見性成佛の人、善根を修して利益をなすと雖も、果報のためにはせす。衆生を教化するが故に、因果を教ふるなり。我が身のため所得なきが故に、功徳に憑らず、一切無心なり。」

問うて曰く、「無心といふは如何。若し一向に無心ならば、誰か見性し誰か悟道し、誰か又說法教化をなすべきや。」

答へて曰く、「無心とは、一切愚痴の心なきを言ふ、邪正を辨する底の心なきを言ふにはあらず。我れ衆生を思はず、亦佛を望まず、又迷を思はず、悟を求めず、人の尊敬にも従はず、名利養聞をも望まず、毒害怨讎をも厭はず、一切の善惡について、差別の念を起さざるを、無心の道人と言ふ。故に云く、「道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ」と云云。」

問うて曰く、「持齋持戒、經咒を讀誦し名號を唱ふる功徳、勝劣ありや無や。」

⑦ 自己本來の佛とは衆生が本來

生れて、位尤も高し。經呪を讀むものは、佛法を護持する故に、此の人來世に當に大智慧を得べし。名號を唱ふれば、佛に歸するが故に、當來に必ず佛土に生ず。又此の無心といふは佛心なり。佛心の功德は、言語も及ぶこと能はず、思量も到るべからず、實に不可思議なり。

問うて曰く、「此の如きの善根は、面々に其の功德疑なし。無心の功德は尙ほ以て不審なり。」

答へて曰く、「佛の威儀を學び、佛の言語を傳へ、佛の名號を唱へて功德あらば、又是れ無心の道人にも功德あるべし。若し無心に功德なしと道はば、餘行も也た功德あるべからず。一切の善根功德は、天上人間の因縁なり、無心は即ち是れ頓證菩提の道なり。功德之を言ふに足らず、實に一大事因縁なり。生死煩惱も自ら消滅して、身心一如なり、即心成佛、何の疑かあらんや。故人の云く、「三世の諸佛を供養せんより、一無心の道人を供養せんにはしかり云云。」實に是れ唯佛與佛の境界なり、凡夫二乗の測るべき處にあらざるものなり。」

問うて曰く、「諸教には無心と説かず、又讚歎せず。何に由つてか宗門に之を貴ぶ。」
答へて曰く、「諸教にも其の説なきにあらす。或は言語道斷と説き、或は不可説と曰ふ、或は畢竟空、

或は一大事因縁、或は又諸法寂滅と説く。釋迦室を掩ひ、淨名口を閉づ、是れ豈に無心を示すにあらずや。影嚮の菩薩は、已に證智するが故に、佛之を説きたまはず、二乗は及び難きが故に、佛又之を説きたまはず。故に法華經に、「無智人中、莫説此經」と云ふ、此の意なり。諸教に八萬四千の法門ありと雖も、色空の二法を出でず。一切形相ある者は、皆色なり身なり。形相に顯はれざるものは皆空なり。身は形あるが故に色と云ひ、心は形なきが故に空と云ふ。一切の經は、皆此の色空の二法を離れず、是れ不可説無心の境界なり。所以に斯の事を讚歎せず、言語も及ばざるが故に、教外別傳と云ふなり。」

問うて曰く、「則ち此の身迷とすべきや、悟とすべきや、又心は是れ何物ぞ、迷悟の根本、之を知らずんばあるべからず、又心は身内にあるか、身外にあるか、何れの處よりか起る。」

答へて曰く、「四大五蘊の色身、十方に遍滿して、一切衆生を根本となす。因縁和合するときんば、身體を建立す、是れを生と名け、果報遷謝するときんば、四大分散す、是れを死と名く。色相は凡聖あり、心體は迷悟なし。然りと雖も假に迷へるを衆生と名け、悟れるを諸佛と名く。迷悟は

具有する佛性なり。
①餘行。持齋、持戒、讀經、念佛等を指す。
②言ふに足らず。言ひ盡す能はずの意ならん。
③唯佛與佛の境とは佛と佛とのみ默契領會し得る境界にして、他の窺知し能はざるもの、世語に英雄あつて英雄を知るに云ふが如し。

④室を掩ひ口を閉づ。佛、摩訶陀國にありて室を掩ふて說法を止め、雜摩、毘耶離城に文殊と對して默然たり、共に妙法の不可説を示すなり。淨名は維摩の譯名なり。
⑤影嚮。諸佛菩薩の形を變へて所化の衆生の姿を現じ、如來説法の會座に連りて之を助くるを云ふ。
⑥四大。地、水、火、風なり、此の四者は一切形體あるものを構成する大作用ある故に大と云ふ。五蘊とは、色、受、想、行、識なり、蘊は積集の義、有爲の一切萬法を此の五に總攝するなり。

只だ妄心に因る、真心には迷悟なし。生佛は本一心の迷悟に因る、本性を了るときんば、畢竟して凡聖の差別あることなし。故に首楞嚴經に曰く、「妙性圓明にして、諸の名相を離れたり、本來世界衆生あることなし云云」と。

問うて曰く、「心性はもと迷無しと、若し然らば迷情は、何れの處よりか起るや。」

答へて曰く、「妄念若し起れば迷隨つて來る、迷來るが故に煩惱も又生ず。妄念若し滅すれば迷則ち去る、迷去るが故に煩惱も又滅す。煩惱は生法なり、生死の種となる、菩提は滅法なり、寂滅の樂となる。迷ふとさんば諸法皆煩惱、悟るときんば諸法皆菩提なり。世人此の迷悟の根本を知らず、生死の念を壓へて起さざるを、而も一念不生と思へり。又是れを無心となす。猶ほ是れ生死の念なり、無心にあらず寂滅にあらず、念を以て念を息むるは、生死相續なり。」

問うて曰く、「小乗は空理に墮して無心を知らず。大乘の菩薩は此の無心を得べきや否や。」

答へて曰く、「菩薩は十地に至りて、猶ほ惑智の二障あり、故に無心を得ず。一に惑障といふは、第七地に至つて、求法の心あるが故に障となる、第十地に至つて、覺照の心あるが故に障となる。成等正覺の時に至つて、此の無心に合ふと云々。」

問うて曰く、「菩薩ども尚ほ十地に至るまで之を知らず、初心の學人、爭か無心に合ふべき。」

答へて曰く、「大乘は不思議なり、直に一念の根源を截つて、頓悟するもの之あり。教家に三賢十聖の位を立つることは、鈍根機のためなり。利根の人は初發心の時、便ち正覺を成すといつて、直に成佛するもの之れあり。十地等覺に至つて、無心に合ふと即今見性成佛すると、無心の理は差別あることなし。」

問うて曰く、「見性成佛といふは、如何なる道ぞ、性といふは何物ぞ、見といふはいかなる見ぞや、智を以て知るべきか、目を以て見るべきか、如何。」

答へて曰く、「經論を學んで得る智は、見聞覺知の分別の智なり。此の修

① 生佛。生は衆生なり、佛と衆生とを云ふ。

② 心性。人間の本心本性にして心性の實體は佛心なれば、迷ひあることなし。

③ 煩惱生法菩提滅法。煩惱は是れ迷妄の基源、菩提は佛果の現實なり、故に迷妄せば諸法幻現して、一切の有情に纏綿し、佛果を證すれば、諸法頓に蒙塵しつくして如々不動なり、法は是れ生滅の主體、生滅は法の示現なり、法の示現ある時は、是れ煩惱の中にあるといふべし、菩提を證する時、一切の法を蟬脱して、虚空裡に自在なり。

④ 一念不生。煩惱は一念生ずる時に起る、一念とは法の幻示なり、即ち一念を生ずる時法生ず、法生じて煩惱生ず、一念不生の時、法滅す、法滅して菩提を證す、一念不生とは

三昧の状態にして、生なく死なく願なく、色なく、一切忘我の時なり。

⑤ 小乗。自己一人の成佛するものをいつて小乗といひ、聲聞緣覺の如きものは所謂小乗なり。宗派でいへば、念佛宗、有部宗の如き是なり。

⑥ 大乘。自他共に成佛するものをいふ、佛菩薩の如きものは所謂大乘なり。宗派でいへば法相宗、天台宗の如き是なり。

⑦ 教家とは禪家に對して他の佛教諸宗派を云ふ、禪の直ちに佛心を相承するに異なりて他は佛の言教、即ち諸經論を所依とす、故に之を教家と云ふ。

⑧ 三賢十聖。菩薩の位次階級なり、三賢は十住、十行、十回向の三位を云ひ、十聖は此の上位する十地を指す。

行には之を用ひず。回光返照して、本有の自性を知見するを、慧眼と名く。見性の後は見聞覺知も、也た受用すべし。」

問うて曰く、「本有の自性を知見すといふは、知見は知るべし、本有の自性といふは如何。」

答へて曰く、「一切衆生本來性あるが故に、自體を扶起す。此の性無始より以來、不生不滅、無色無形、常住不變なり、是れを本有の自性と名く。此の自性は、一切諸佛と一味平等なるが故に、佛性と名く。一切の三寶、六道の衆生も、此の性を以て根本として、一切の法を成就す。」

問うて曰く、「回光返照といふは如何。」

答へて曰く、「外の諸法を照す、自己の光明を回らし返して、内の自己を照すを云ふなり。心明かなること日月の光の如く、無量無邊にして、内外一切の國土を照す。光及ばざる處は闇し、是れを黒山の鬼窟と名く。一切の鬼神、其の内に住す、鬼神はよく人を害す。心法も亦復た是の如し。心性の智光は、無量無邊にして、一切の境界を照す。光及ばざる處は闇し、是れを無明の陰界と名く。一切の煩惱、其の内に住す、煩惱よく人を害す。智心は光なり、妄念は影なり。光の物を耀すを照と云ふ。心念の境界に遷らずして、本性に向ふを回光返照と言ふ、又は遍照とも言ふ。遍照の當體は、迷悟未

だ靈はれざる處なり。今時の人は、妄念を以て本心と思ふ、煩惱を以て樂とす。何れの時か生死を離れんや。」

問うて曰く、「坐禪は一念不生を以て省要となす。念を以て念を止むれば、即ち是れ血を以て血を洗ふに似たり、如何。」

答へて曰く、「一念不生は所謂心法の本體なり。念を止むるはもあらず、又念を止めざるにもあらず、但だ是れ一念不生なり。若し此の本體に合ひぬれば、是れを法性の如來と名く。然るときんば坐禪も亦無用なり。迷もなく悟もなし、豈に念あらんや。若し此の本體を知らずんば、不生を得べからず。縦ひ念を押へて起さずと雖も、皆是れ無明なり。譬へば石の草を壓して久しからずして又生ずるが如し。綿密に工夫すべし、容易なるべからず。」

問うて曰く、「或人云ふ、「當に一念不生の處に向ふべし」と、如何。」

答へて曰く、「一念不生とは、全く生滅去來の相なきを指示する語なり。生死は念より起る、若し念の起る處を知らずんば、生死の根本を知るべからず。衆生は十二時中、煩惱の念に使はれて、本有の性に背く。若し復た妄念の雲晴れて、心性の月彰るれば、已前憎む所の念、還つて皆智恵となる。乃ち此の念を以て說法して、衆生を教化すべし。古人の云く、「諸人は十二時に使はる、我れは十二時

① 十地等覺。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ、十地は等覺に次ぐ菩薩の位なり。
② 黒山の鬼窟。鐵圍兩山の間日月の光を見ず、餓鬼其の中に集りて宿債を償ふと。

③ 坐禪。坐禪の方法は半結跏、兩結跏等ありと雖も、要は心頭一念何の處にありても諸慮を一所に別することに外ならざるなり。
④ 古人の云く云々。是れ趙州和尚の語なり。

を使ひ得たり」と云々。

問ふ、「坐禪の時は、念起るも過、止むるも又過と云ふ、如何。」

答ふ、「未だ見性せざる時は、起るも止むるも皆過なり。佛經に或は不起妄念と説き、或は亦不息滅と説けるも、皆是れ本性を知らしめんがための語なり。本性を知るときんば、修行も無用なり、迷妄の病除くときんば、療治も無益なり。然りと雖も、迷情の病起るときんば、修行の療治を用ふ。念起るは病、續がざるは藥なり。」

問うて曰く、「縦ひ念起ると雖も、念には自性なし、何の過かあらんや。」

答へて曰く、「自性なしと雖も、起れば便ち過あり。猶ほ夢中の事の如し、覺めて後其の虚妄なるを知る、豈に過なしと云はんや。過を起し夢を成すは、衆生の妄見なり。一旦佛法を聞いて信心を起すは、殊勝の事なり。然りと雖も、眞實道心なき人は、工夫疎なるに由つて、心の過を知らず。偶々小々の念を押せども、大々の念を知らず、若し根源を截らすんば、縦ひ結縁の分ありと雖も、生死を出離し難し。」

問うて曰く、「一切の善惡、すべて思量することなけれ云々。善惡に付いて思量することなきを、尤も坐禪の用心となす。小々大々の念と云ふは如何。」

答へて曰く、「一切の善惡、すべて思量すること莫れと云ふは、直截の語なり。坐禪の時ばかり、之

を用ふべきにあらず。若し此の田地に到らば、行住坐臥皆禪なり、必ずしも坐相を執せず。祖師の云く、「行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜、體安然」と。佛經に云く、「常に其の中に在りて、經行若しくは坐臥す」と云々。小々の念といふは、目前の境界に付いて俄に起る念なり。大々の念といふは、貪欲、嗔恚、愚痴、邪見、憍慢、嫉妬、名聞、利養等の念なり。坐禪の時志薄き人は、小々の念を收むと雖も、此の如きの惡念、覺えずして心中に在り。是れを大々の念と名く。此の惡念を棄捨するを、直に根源を截ると名く。直に根源を截るときんば、煩惱も菩提となり、愚痴も智慧となる。三毒も三聚淨戒となり、無明も大智法性となる。いかに沉んや小々の念をや。佛語に「若し能く物を轉せば、即ち如來と同じ」といふは此の意なり。但だ能く物を轉すべし、物に轉せらるゝこと莫れ。」

問うて曰く、「若し能く物を轉すれば、即ち如來と同じといふは、物とは何物ぞ、轉するとは何事ぞ。」

答へて曰く、「物とは萬物なり、轉するとは體脱なり、物を轉するとは一切の境界に就いて心を遷さず、返つて本性に向くるなり。境、心を礙へざれば、天魔鬼神、煩惱生死、便を得べからず、是れを物を轉すと云ふ。物に於て心を遷さず用心するなり。佛見法見、尙ほ以て截るべし、いかに

- ① 田地は境界なり。
- ② 永嘉眞覺大師なり、此の句は證道歌にあり。
- ③ 經行。坐禪の時睡眠を防ぐために一定の場所をめぐりあること。
- ④ 三毒。貪慾、嗔恚、愚痴の三煩惱のこと。
- ⑤ 三聚淨戒。攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒なり、大乘一切の戒法を此の三に總攝す。
- ⑥ 無明。一切の煩惱のこと。
- ⑦ 佛見は、佛に執着すること。

況んや妄念をや。截る心も念の心に似たりと雖も、是れは正念なり。正念をば惠念と名く、是れは正見に入る智恵なり。」

問うて曰く、「煩惱も菩提も、一心より起ること分明なり。何れの處よりか起り始まるや。」

答へて曰く、「色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を嘗め、觸を覺え、法を知るは、六根の徳用なり。此の境界に附いて、善惡を分ち、邪正を辨する底は智恵なり。此に於て人我を立し、愛憎を起すは皆妄見なり。此の妄見に依つて、着相をなすを迷と名く。此の迷より色受想行識の五蘊を起す、是れを煩惱と名く。煩惱を以て衆生の身體を建立するが故に、殺生、偷盜、邪淫、妄語等の惡行を好んで、終に三惡道に墮す。皆是れ妄念より起る。此の妄念纔かに起る時、直に妄念を轉じて本性に向へば、即ち無心となる。已に無心に安住するを得れば、五蘊の身、即ち五分法身の如來となる。是れを」と謂ふ。是の如く用心すれば、修行の大用なり。」

問うて曰く、「久しく坐禪の功を積んで、工夫純熟する人は、煩惱邪迷の心あるべからず。始めて修行をする人、争か煩惱を盡すべきや。」

答へて曰く、「煩惱をも厭はず、只だ心を淨むべし。古人の云く、『學道は須らく是れ鐵漢なるべし、手を心頭に着けて便ち判す、直に無上菩提に趣んで、一切の是非管すること莫れ』と。手を心頭に著けて心の邪正を批判し、心の誤りを知るべきものを智者と名く。若し智恵ありて迷無くんば、譬へば昔より日月の光を入れざる闇穴に、燈を入るゝが如し。而も昔の闇、外邊に去らざれども、俄に明となる。無明煩惱の闇、智恵の光を得れば、去るを待たずして而も去るなり。夜は虚空闇し、然りと雖も、日光現するときは、其の虚空、晝となりて明かなり。心法も亦復た是の如し。迷は暗なり、悟は明なり。智恵の光照るときんば、煩惱の暗忽ち明となる。菩提別に二法あることなし。」

問うて曰く、「煩惱の闇を照すは、智恵の力による。智恵無うして菩提あるべからず。然るときんば争か此の智恵を得べき。」

答ふ、「自己の智光は、自ら明々たり。然りと雖も妄想に覆はれて之れを失す。是の故に迷を起す。譬へば人の夢を見ると、何事も眞實の相をなす、覺めて後、一事もなきが如し。夢の如くなる妄想、覺めて後之れを見れば、もとより之れなし。衆生は迷へる故に、妄を以て實となす。」
問ふ、「悟とは日比知らざること俄に之を知り、過去未來の事も知るべきや否や。」
答ふ、「妄見皆盡くれば、大夢俄に覺めて佛性を知見す。是れを大悟大徹と名く。是れ等は思量分別

法見は法に執着すること。

①六根。眼、耳、鼻、舌、身、意なり。

②三惡道。地獄、餓鬼、畜生の三道なり、此の三道は迷界の六道中に於ても特に苦患多き故に惡道と稱せらる。

③五分法身とは戒身、定身、慧身、解脱身、解脱知見身を云ふ。

④應無所住而生其心。金剛經莊嚴淨土分第十に出づ、六祖大師未だ出家せざる時、市に於て一僧の此の句を誦するを聞きて省悟すといふ。

⑤鐵漢。意志の強剛なるを云ふ、漢は人に同じ。

⑥智恵。般若の正智恵にして、一切の迷惑愚痴を離れたる佛智見をいふなり。

の測らざる處なり。過去未來の事、識るは、神通力なり。其れ修行動力に因る、大悟と謂ふべきにあらず。天魔、鬼神、外道、仙人等も、皆是れ神通あり。昔曾て難行苦行を修せし徳なり。此の徳ありと雖も、邪見を離れざれば、佛道に入らず。」

問ふ、「悟道得法の人、神通を具せずんば、則ち何の徳用かありや。」

答ふ、「此の身は過去の愚迷を以て建立する故に、縦ひ見性成佛の人と雖も、神通露はれず。然りと雖も、悟るときんば、六塵を透脱し、生死を截斷す。故に自ら是れ神通妙用を具す。是れは外道天魔の、有漏の神通力には非ざるものなり。豁然大悟の人、三大阿僧祇劫を歴して、頓に佛道を成す。何ぞ別に神通妙用を論せんや。」

問ふ、「見性成佛と即心即佛と、差別ありや也た否や。」

答ふ、「即心即佛とは直に心外に佛なきを示す語なり。若し直に此の旨を承當せば、伶俐の人なり。或は亦、非心非佛とも之れを示す。見性成佛とは、自性を知見し、衆生の命根を截斷して、妙性圓明なることを了知す。然るときんば生死もなく煩惱もなし。故を以て假に名けて成佛となす。佛とは覺なり、從來迷はざることを覺了す。同異なしと雖も、入門差あるに似たり。是の故に兩般の語をなす。」

- ① 六塵、色、聲、香、味、觸、法を云ふ、此の六は六根の對境となりて人の心神を汚し、眞性を覆ひ昏ますが故に塵と云ふ。
- ② 有漏、煩惱のこと、漏は漏泄の義。
- ③ 非心非佛、僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖曰く、「即心即佛、」又他時一僧あり、同じく問ふ、祖答へて曰く、「非心非佛」と。

問ふ、「性は常住不變にして、諸佛と衆生と一味平等なり。然りと雖も、迷へる衆生は生死の苦あり。然るときんば、一味平等と言ふべからざるものか。」

答ふ、「一味平等といふは、智慧の照す所なり、愚痴の所見にはあらず。祖師の言句は、門を扣く瓦子なり。未だ門に入らざるときんば、見性成佛の語至極なり。此の門に入得すれば、一切の相を離る。故に成佛も又無得なり。」

問ふ、「顯密の諸宗、皆教理智斷行位因果の八法あり。二乗聲聞は、四禪八定を修して、火水風の三災の難を離れ、色受想行識を空じて、無餘涅槃に入る。菩薩は三聚の淨戒を保持して、慈悲萬行を修し、三賢十聖の位を経て、内外の煩惱を斷す。若し煩惱なき處佛果ならば、何に依つてか三世の諸佛は、眞如法界を出で、生死の欲界に來ることありや。」

答ふ、「諸佛菩薩は衆生を利益するを以て能作となす。若し衆生を利益せずんば、佛菩薩にあらず。三乗は衆生を利益せざるが故に、大乘には是れを解脱の深坑に入ると謂ふ。三賢十聖の菩薩は、修行増進して、重玄門に入り、衆生を度せんがために、寂光の樂土を出で、五濁の惡世に來つて、菩提樹となる。譬へば高原陸地には蓮華を生せず、

- ① 門を扣く瓦子とは方便を云ふ、門を開くためには瓦子の要あり、門開かるれば瓦子には用なきなり。
- ② 四禪定とは明得定、明増定、印順定、無間定をいふなり。
- ③ 八定とは初禪天定、二禪天定、三禪天定、四禪天定、以上色界の四定、空處天定、識處天定、無處有處天定、非想非々想處天定、以上無色界の四定是れなり。
- ④ 無餘涅槃、煩惱障を斷じて得たる涅槃なり、小乘の聖者灰身滅智して此の涅槃に入る。
- ⑤ 重玄門、事々物々無礙自在なる法門。

卑濕淤泥に蓮華を生ずるが如し。又農人の稼穡を事とするが如き、淨潔乾爆の地には、苗稼を植うる
 こと能はず、卑濕淤泥に不淨の糞を置きて、米穀の種子を植る、因縁時^①到つて、陽氣動き甘雨潤し、
 萌芽長じ、根莖枝葉繁榮茂盛し、稻梁穀米等成熟して、農業事終つて昇平の歌を唱ふ。諸佛の出世
 も亦復た是の如し。碧落青霄には佛法を建立すること能はず、五濁惡世の穢土に龕弊垢膩の衣を着け
 て、惡業煩惱の衆生を誘引し、應機說法して正因の種子を下す。因縁時^②到つて、惠日照し、慈風扇ぎ、
 法雨瀉ぎ、甘露降つて、道芽萌し、枝葉根莖鬱茂盛長して、菩提樹を生じ、
 ③ 等覺の華を開き、妙覺
 の果を結び、化導圓滿して、涅槃常樂の妙法を唱ふ。道人も亦一株の木
 血身の如し。土に六塵の糞を置き、生靈の種子を下し、色身の苗を植る、
 性智の芽を萌し、心念の根を生じ、意想の莖を長じ、識神の枝を抽んで、
 情欲の葉を茂らし、樂の根株を成じ、知見の花を開き、覺悟の果を結び、
 道業事終へて、無心の樂を唱ふ。凡夫も亦一株の木あり。愚迷薄地にして、
 貪愛の糞を置き、無明の種子を下し、五蘊の苗を植る、
 ④ 業識の芽を萌し、
 執着の根を生じ、人我の莖を長じ、詭曲の枝を抽んで、嫉妬の葉を茂らし、
 煩惱の樹を成じ、妖艶の花を笑き、三毒の果を結び、名利事終へて、
 ⑤ 五
 欲の樂を唱ふ。且く道へ、此の三株の木、還つて勝劣ありやまた無や。若

① 等覺の華。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ因地の極位なり、故に華と稱す。妙覺の果、妙覺とは自覺、覺他、覺行圓滿の佛にして、佛道修行の最後位なれば之を果と稱す。
 ② 業識。第八識即ち阿賴耶識のこと、業は動作のこと、此の識無明煩惱に動かされてよく萬有を造作するが故に、斯く名づけらる。
 ③ 五慾は財慾、色慾、飲食慾、

し人有つて、隻手に此の三株の木を把つて、根に和して一時に拔出して、
 ④ 無陰陽の地に栽培して、直に 無影樹となして、まさに是れ大力量の人
 なるべし。天地と我れと同根、萬物と我れと一體なり。且く道へ、我れは
 是れ何物ぞ。若し喚んで佛となさば、天地遙かに隔たる。」

名慾、睡眠慾なり。
 ④ 無陰陽の地。絕對平等の境界なり。
 ⑤ 無影樹。菩提樹なり。

國譯大覺禪師坐禪論 終

國譯大覺禪師省行文

夫れ^①幻縁和合して、幻に因つて此の色身を成ず。事業修持して、事に従つて其の正理を顯す。理の顯はるゝこと事として達せずといふことなし。身の成ずること幻に由つて立す。是を以て先聖此に於て洞明す。機に應じて滯なし、^②聰睿の上を超え、品類の先に出づ。惟れ^③惠天を動ず、遠として届らずといふことなし。汝等此の門に入り來つて、當に自ら觀察すべし。善行積ますんば、令名豈に馳せんや。一法頓に明むれば、萬縁俱に朗なり。間髪髪を剃除して、佛袈裟を掛くるあり。形は僧形に似たりと雖も、志未だ俗志を捨てず、東西に奔走す、眞僞奚んぞ分たん。只だ^④塵縁に隨順するを知つて、翻つて^⑤憍懂たることをなす。虚しく信施を消して、徒に^⑥空門に廁はる。忽然として自首到來すれば、返つて^⑦後生に笑を取らる。憶ふ、昔上古の出家の其の形骸を勞し、其の體膚を饑す、命を盡し身を畢ふるまで、爲に斯の事を究む。所以に^⑧一日作さざれば一日食せず。豈に今の坐なが

① 幻縁。色身は四大假和合の因縁によりて成立す、四大分離すれば色身破壊して、又空に歸す、恰も夢幻空華の如し、故に幻縁と云ふ。
 ② 聰睿。聰明睿智の略、假令聰睿なるも、是れ一人の智に過ぎざるなり。
 ③ 惠は徳と同字。
 ④ 塵縁は俗事なり。
 ⑤ 憍懂は無知にして且つ意の定まらざるなり。
 ⑥ 空門は出家のこと。
 ⑦ 後生は後進者輩なり。
 ⑧ 一日作さざれば一日食せず。百丈禪師の語なり。

ら愧なきに比せんや。^①檀那^②四事以て汝を供養す、意可にかある。伊が救拔を望む。今生玄妙に通せず、來世愈牽纏せられん。宗親を負累して同じく地獄に墮せん。此の如きものは、滴水も消し難し。いかに況んや、大厦高樓をや、坐臥何ぞ穩ならん。已に一徳なし、罪萬端あり。樂土未だ成らざるに、^③阿鼻先づなる。謹んで^④叢林の高士、學法の上人に勸む、各胸襟を揣り、細に得失を觀せよ。庸輩に隨つて、恣に無知を逞しうすることなかれ。猛く修行を勵み、悟を以て則となし、常に良友に咨つて、以て見聞を益し、廣く琢磨を得ば、道業成じ易し。果してよく此の如くならば、日に萬兩の黄金を消し、銀屋瓊居も分外とせず。若し是の如くならずんば、濫りに僧倫に膺り、佛法の正因、誰に憑つてか紹續せん。親を訪ひ病を問ふも、道に於て極めて妨ぐ。但だ^⑤洞山を學んで、還らずんば益あらん。豈に見すや、青蘿喬松の勢に倚つて、直に千尋に聳え、^⑥紅尾禹門の波に競つて、争つて三級を超ゆ。無情の物だも猶ほ自ら高きを攀づ、水を弄する魚も^⑦霄漢に騰らんと欲す。況んや人として信に篤き、豈に徹する時なからんや。但だ此の心を堅うせよ、何ぞ達せざるを患へん。

① 檀那は梵語 布施と譯す、轉じて能く布施を行するものを指すに至る、今は布施者の意なり。
 ② 四事。供養に用ふる四種のもの、飲食、衣服、臥具、湯藥なり。
 ③ 阿鼻は梵語、譯して無間と云ふ、八熱地獄の第八にして極苦の處たり、苦に間斷なき故に此の名あり。
 ④ 叢林は僧の住處を云ふ、多くは修禪の道場を指す。
 ⑤ 洞山を學ぶ。洞山出家してより故郷に歸らず、曰く、「王祥、孟宗が孝に似んよりは、目連の大孝を學ばん」と。
 ⑥ 紅尾は鯉魚のこと。
 ⑦ 禹門。瀧の名、三段に分る、之を超ゆれば魚化して龍となる。
 ⑧ 霄漢。大空なり。

道は外より得るにあらず、己に返つて求めよ。精微を默審して、淵奥を窮通すべし。光陰に限りあり、人命存し難し。息を轉すれば鶴髮頭に滿つ、^①蹉跎として空しく過すべからず。心源若し濁らば、前路も復た昏からん。病忽ちに相侵せば、能く敵すべきなし。彼の時思ひ付つて悔ゆるとも已に遅々たらん。恨むらくは早く修せざらんことを。江に臨んで船なし、佛法衰替し、人我兼ね行する、今時より盛なるはなし。各自に努力よや。愚、海を逾え漠を越えて、緣此の朝に合ふ。古を擧げ今を明め、寧ろ慚愧なかなや。但諸の後學を勸めて、同じく此の心を究め、以て佛祖慈蔭の恩を報じ、共に檀那供養の徳に酬ゆ、語、華飾なし、勉むるに直辭を以てす。此の如くにして行せば、自他利益せん。

①の蹉跎。説文に曰く、「時を失する也」と。

國譯大慧禪師發願文

唯だ願はくは、某甲道心堅固にして、長遠不退、四體輕安、身心勇猛、衆病悉く除き、^①昏散速かに消し、無難無災、無魔無障、邪路に向はず、直に正道に入つて、煩惱消滅し、智慧增長し、頓に大事を悟つて、佛の惠命を續ぎ、諸の衆生を度して、佛祖の恩を報せんことを。次に冀はくは、某甲、臨命終の時、少病少惱、七日以前に、預め死の至らんことを知つて、安住正念、末後自在に、此の身を捨て了つて、速に佛土に生じ、面り諸佛に見え、^②正覺の記を受け、^③法界に分身して、遍く衆生を度せんことを。

十方三世一切の諸佛、諸尊菩薩、摩訶薩、摩訶般若波羅密。

①昏散。昏は昏沈にして心のくらく沈むこと、散は散亂にして心の靜まらざること。
②正覺の記。佛の懸記即ち佛より成佛の豫言を受くること。
③法界に分身す。神通を得て各所に分身說法するなり。
④度す。濟度すること。

國譯中峰和尚坐禪論

坐禪は別に用心の處なし。只だ十二時中、一切の塵勞妄想の境を放
 下して、常に自心をして虚空の如くならしめよ。毫髮許りも他念なからし
 む。若し自心清淨を得れば、還つて不思議不思議。正當與麀の時、如何な
 るか是れ我が父母未生前本来の面目と、是の如く看よ。若し工夫一片
 にならば、自然に悟入あることを得ん。何をか坐禪と名く、外一切善惡の
 境界に於て、心念起らざるを名けて坐となし、内自性の動せざるを見るを
 名けて禪となす。如今學道人、此の心體を悟らずして、便ち心上に於て心
 を生じ、外に向つて佛を求め、相に着して修行す。皆是れ惡法にして、
 菩薩の道にあらず。

①塵勞。心を勞する塵の意、煩
 惱のこと。妄想はまことなら
 ん別心、みだりなるおも
 ひ。
 ②放下。打遣ること、打捨て、
 顧みざること。
 ③一片は他念を離へず三昧に入
 ること。
 ④相に着す。外相に執着するこ
 と。

大覺禪師坐禪論

夫坐禪大解脫法門也、諸法從是流出、萬行自是通達、神通智慧德從此內起、人天性命道自
 此內開、諸佛已從此門出入、菩薩行即入此門、二乘猶在半途、外道雖行不入正路、凡顯密諸
 宗、不行此法、不有成佛道者也、問曰、坐禪爲諸法根源、意旨如何、答曰、禪佛內心也、律佛外相
 也、教佛言語也、念佛佛名號也、是皆從佛心出、是故爲根本也、問曰、禪法無相無念、靈德不露、
 見性也無證據、以何可信之、答曰、自心與佛心一味、豈非靈德、我心我不知、喚誰爲證據、即心
 即佛外、求何證據、問曰、能修一心法也、修萬行萬善功德、爭可比之、答曰、頓覺了如來禪、六度
 萬行體中圓、然則禪一法、備一切諸法、豈不見道、三界唯一心、心外無別法、縱修萬行、不知心
 法、不可得悟、若道不得悟而成佛、豈有其理乎、問曰、此法何可修行、縱爲修行、不得開悟、成佛
 不定、若不定雖作修行、何有益、答曰、此宗甚深微妙法門也、若有一經其耳、長成菩提、勝因古
 人云、此聞不信者、福超人天、學不得者、終到佛果、云云、此法佛心宗也、佛心自本無迷悟、正如
 來妙術也、縱雖不得悟、一座坐禪一座佛也、一日坐禪一日佛也、一生坐禪一生佛也、未來亦
 如是、只如是信者、是大機根人也、問曰、若如是、我也可修行、云何安心、云何用心哉、答曰、佛心
 一切無着相、以離相爲實相、行住坐臥、四威儀中、以坐爲安穩義、以端坐思實相云也、問曰、端
 坐思實相義、微細說之、答曰、端坐如來結跏趺坐、思實相所謂坐禪也、結法界定印、身心不動、

眼開半目守鼻端當見一切有爲法如夢幻泡影莫繫念頭問曰結足結印如來威儀開半目守鼻端何事答曰開眼遠見被侵紛飛境心散亂塞目又落昏沈境心中不明也眼開半目則念不忿忿身心一如明察時生死煩惱不可近傍是名立地成佛大機大用云也問曰雖聞如是事尚以信心難及讀誦經呪積其功持齋持戒唱名號累其德專有憑只不爲何事安禪可有奇特乎答曰如是疑云生死業如是疑云煩惱也行一切法無所得心名爲甚深般若若智慧也此智慧能切生死根源利劍也修善根願其果報凡夫迷也菩薩修善根不求其果報向大慈大悲修善根故成菩提資也願果報修善根成人天小果人定生死業也問曰不聚善根功德爭可成萬德圓滿佛耶答曰聚善根功德歷三大阿僧祇劫當成佛也行因果不二法一生成佛也明自心悟自性人見自己本來佛也非今始成佛問曰見性成佛人不憑因果不可修善根乎答曰見性成佛人雖修善根爲利益不爲果報教化衆生故教因果也爲我身無所得故不憑功德一切無心也問曰無心者如何若一向無心誰見性誰悟道誰又可爲說法教化乎答曰無心者言無一切愚痴心也非言無辨邪正底心也我不思衆生亦不望佛又不思迷不求悟不從人尊敬不望名利養聞不厭毒害怨讎付一切善惡不起差別念言無心道人也故云道無心合人人無心合道云云問曰持齋持戒讀誦經呪唱名號功德有勝劣無答曰持齋離食貪欲來生當得大福德持戒又爲休惡心生善心也有善心者生人天中位尤高也讀經呪者護持佛法故此人來世當得大智慧也唱名號歸佛故當來必生佛土也又此無心佛心也佛心功德言語不能及思量不可到實不可思議也問曰如此善根面面其功德

無疑無心功德尙以不審答曰學佛威儀傳佛言語唱佛名號有功德又是無心道人可有功德若道無心無功德餘行也不可有功德也一切善根功德天上人間因緣也無心卽是頓證菩提道也功德不足言之實一大事因緣生死煩惱自消滅身心一如也卽心成佛有何疑乎故人云供養三世諸佛不如供養一無心道人云云實是唯佛與佛境界也凡夫二乘非可測處者也問曰諸教不說無心亦不讚嘆由何宗門貴之乎答曰諸教不無其說或說言語道斷或曰不可說或畢竟空或一大事因緣或又說諸法寂滅釋迦掩室淨名閉口是豈非示無心乎影嚮菩薩已證智故佛不說之二乘難及故佛又不說之故法華經云無智人中莫說此經此意也諸教雖有八萬四千法門不出色空二法也一切有形相者皆色也身也不顯形相者皆空也身有形故云色心無形故云空也一切經皆不離此色空二法是不可說無心境界所以不讚嘆斯事言語不及故云教外別傳也問曰則此身可爲迷乎又可爲悟乎又心是何物迷悟根本不可不知之又心在身內耶在心外耶從何處起答曰四大五蘊色身遍滿十方一切衆生爲根本因緣和合則建立身體是名生果報遷謝則四大分散是名死色相有凡聖心性則畢竟無有凡聖差別故首楞嚴經曰妙性圓明離諸名相無有本來世界衆生云云問曰心性本無迷若然迷情從何處起答曰妄念若起迷隨來迷來故煩惱又生妄念若滅迷則去迷去故煩惱又滅煩惱生法也爲生死種菩提滅法也爲寂滅樂迷則諸法皆煩惱悟則諸法皆菩提也世人不知此迷悟根本壓生死念不起而思一念不生又是爲無心猶是生死念也

非無心非寂滅以念息念生死相續也問曰小乘墮空理不知無心大乘菩薩可得此無心否
答曰菩薩至十地猶有惑智二障故不得無心一惑障至第七地有求法心故爲障至第十地
有覺照心故爲障至成等正覺時合此無心云云問曰菩薩尙至十地不知之初心學人爭可
合無心答曰大乘不思議也直截一念根源頓悟者有之也教家立三賢十聖位爲鈍根機也
利根人初發心時便成正覺直成佛者有之至十地等覺合無心與卽今見性成佛無心之理
無有差別問曰見性成佛者如何道性者何物見者何見以智可知歟以目可見歟如何答曰
學經論得智見聞覺知分別智也此修行不用之回光返照知見本有自性名惠眼也見性之
後見聞覺知也可受用問曰知見本有自性者知見可知本有自性者如何答曰一切衆生本
來有性故扶起自體此性從無始以來不生不滅無色無形常住不變是名本有自性此自性
與一切諸佛一味平等故名佛性一切三寶六道衆生以此性爲根本成就一切法問曰回光
返照者如何答曰照外諸法自己光明回返照內自己云也心明如日月光無量無邊照內外
一切國土光不及處闇是名黑山鬼窟一切鬼神住其內鬼神能害人人心法亦復如是心性智
光無量無邊照一切境界光不及處闇是名無明陰界一切煩惱住其內煩惱能害人智心光
也妄念影也光耀物照云心念不遷境界向本性言回光返照又言遍照也遍照當體迷悟未
露處也今時人以妄念思本心以煩惱爲樂何時離生死耶問曰坐禪以一念不生爲省要以
念止念卽是似以血洗血如何答曰一念不生所謂心法本體也非止念又非不止念但是一
念不生也若合此本體是名法性如來然則坐禪亦無用也無迷無悟豈有念乎若不知此本

體不可得不生縱雖押念不起皆是無明也譬如石壓草不久又生綿密可工夫不可容易問
曰或人云當向一念不生處如何答曰一念不生者全無生滅去來相指示語也生死從念起
若不知念起處不可知生死根本衆生十二時中被使煩惱念背本有性若復妄念雲晴心性
月彰已前所憎念還皆成智惠乃以此念說法可教化衆生古人云諸人被使十二時我使得
十二時云云問坐禪時念起過止又過云如何答未見性時起止皆過也佛經或說不起妄念
或說亦不起滅當是爲令知本性語也知本性則修行無用也迷妄病除則療治無益也雖然
迷情病起則用修行療治念起病不續藥也問曰縱雖念起念無自性有何過乎答曰雖無自
性起便有過猶如夢中事覺後知其虛妄豈云無過乎起過成夢衆生妄見也一旦聞佛法起
信心殊勝事也雖然無真實道心人由工夫疎不知心過偶押小小念不知大大念若不截根
源縱有結緣分難出離生死問曰一切善惡都莫思量云云付善惡無思量尤爲坐禪用心小
小大大念者云何答曰一切善惡都莫思量云直截語也坐禪時計非可用之若到此田地行
住坐臥皆禪也必不執坐相祖師云行亦禪坐亦禪語默動靜體安然佛經云常在於其中經
行若坐臥云云小小念者付目前境界俄起念也大大念者貪欲嗔恚愚痴邪見憍慢嫉妬名
聞利養等念也坐禪時志薄人雖收小小念如此惡念不覺在中心是名大大念棄捨此惡念
直名截根源直截根源則煩惱成菩提愚痴成智慧三毒成三聚淨戒無明成大智法性何況
小小念乎佛語若能轉物卽同如來者此意也但能可轉物莫被轉於物問曰若能轉物卽同
如來者物者何物轉者何事答曰物者萬物也轉者體脫也轉物者就一切境界不遷心返向

本性境不礙心，天魔鬼神煩惱生死不可得，便是云轉物於物不遷，心用心也。佛見法見尚以可截，何況妄念。截心雖似念心，是正念也。正念名慧念，是入正見智慧也。問曰：煩惱菩提從一心起，分明也。自何處起？始耶？答曰：見色聞聲嗅香嘗味覺觸知法，六根德用也。附此境界，分善惡辨邪正，底智慧也。於此立人我，起愛憎，皆妄見也。依此妄見，成着相名，迷從此迷，起色受想行識五蘊，是名煩惱。以煩惱建立衆生身體，故好殺生偷盜邪淫妄語等惡行，終墮三惡道。皆是從妄念起。此妄念纔起時，直轉妄念向本性，即成無心，已得安住無心，五蘊身即成五分法身如來。是謂應無所住而生其心。如是用心，修行大用也。問曰：久積坐禪功，工夫純熟，人不可有煩惱邪迷之心，始爲修行人，爭可盡煩惱乎？答曰：不厭煩惱，只可淨心。古人云：學道須是鐵漢，着手心頭便判，直趣無上菩提。一切是非莫管，著手心頭者，批判心邪正，可知心誤名智者。若有智慧，無迷，譬如自昔不入日月光，闇穴入燈，而昔闇不去，外邊俄成明也。無明煩惱闇，得智慧光，不待去而去也。夜虛空闇，雖然日光現，則其虛空成晝明也。心法亦復如是，迷闇也。悟明也。智慧光照，則煩惱暗，忽成明。菩提別無有二法。問曰：照煩惱闇，依智慧力，無智慧不可有菩提。然則爭可得此智慧？答：自己智光自明明，雖然被覆妄想失之，是故起迷。譬如人見夢時，何事爲真實相？覺後無一事，如夢妄想，覺後見之，從本無之。衆生迷故，以妄爲實。問：悟者日比不知事，俄知之，可知過去未來事否？答：妄見皆盡，大夢俄覺，知見佛性，是名大悟大徹。是等思量分別不測處也。識過去未來事，神通力，其因修行動力，非可謂大悟也。天魔鬼神、外道仙人等，皆是有神通，昔曾修難行苦行德也。雖有此德，不離邪見，不入佛道。問：悟道得法人，不具神

通，則有何德用乎？答：此身以過去愚迷，建立故縱，雖見性成佛人，神通不露。雖然悟則透脫六塵，截斷生死，故自是具足神通妙用。是非外道、天魔有漏通力者也。豁然大悟人，不歷三大阿僧祇劫，頓成佛道。何別論神通妙用乎？問：見性成佛與即心即佛，有差別也。否？答：即心即佛者，直示心外無佛語也。若直承當此旨，伶俐人也。或亦非心非佛示之，見性成佛者，知見自性，截斷衆生命根，了知妙性圓明，然則無生死無煩惱，以故假名爲成佛。佛覺也。覺了從來不迷，雖無同異，似入門有差也。是故成兩般之語也。問：性常住不變，諸佛與衆生，一味平等也。雖然迷衆生有生死苦，然則不可言一味平等者乎？答：一味平等者，智慧所照也。非愚痴所見。祖師言句扣門瓦子也。未入門時，見性成佛語至極也。入得此門，離一切相，故成佛又無得也。問：顯密諸宗，皆有教理智斷行位因果八法。二乘聲聞，修四禪八定，離水火風三災難，空色受想行識，入無餘涅槃。菩薩持三聚淨戒，修慈悲萬行。經三賢十聖位，斷內外煩惱。若無煩惱處，佛界依何有三世諸佛，出真如法界，來生死欲界乎？答：諸佛菩薩，以利益衆生爲能作。若不利衆生，非佛菩薩。三乘不利益衆生，故大乘是謂入解脫深坑。三賢十聖菩薩，修行增進入重玄門，爲度衆生，出寂光樂土。來五濁惡世，成菩提樹，譬如高原陸地，不生蓮華。卑濕淤泥，生蓮華。又如農人事稼穡，淨潔乾爆地，不能植苗稼。卑濕淤泥，置不淨糞，植米穀種子，因緣時到，陽氣動，甘雨潤，萌芽長，根莖枝葉繁榮茂盛，稻梁穀米等成熟。農業事終，唱昇平歌。諸佛出世，亦復如是。碧落青霄，不能建立佛法。五濁惡世穢土，着窟弊垢膩衣，誘引惡業煩惱衆生，應機說法。下正因種子，因緣時到，慧日照，慈風扇法雨，瀉甘露降道芽，萌枝葉根莖鬱茂盛長，生菩提樹，開等

覺華結妙覺果，化導成滿唱，涅槃常樂妙法道人，亦如一株木，血身土置六塵糞，下生靈種子，植色身苗，萌性智芽，生心念根，長意想莖，抽識神枝，茂情欲葉，成樂根株，開知見花，結覺悟果，道業事終，唱無心樂，凡夫亦有一株木，慙迷薄地，置貪愛糞，下無明種子，植五蘊苗，萌業識芽，生執着根，長人我莖，抽詭曲枝，茂嫉妬葉，成煩惱樹，笑妖艷花，結三毒果，名利事終，唱五欲樂，且道，斯三株木，還有勝劣也無？若有人，隻手把此三株木，和根一時拔出，栽培無陰陽地，直作無影樹，當是大量人，天地與我同根，萬物與我一體也，且道，我是何物，若喚成佛，天地遙隔矣。

大覺禪師坐禪論終

大覺禪師省行文

夫幻緣和合，因幻而成，此色身事業修持，從事而顯，其正理之顯也，無事不達，身之成也由幻而立，是以先聖於此洞明，應機無滯，超于聰睿之上，出于品類之先，惟慮動天，無遠弗届，汝等入此門來，當自觀察，善行不積，令名豈馳，一法頓明，萬緣俱朗，間有剃除鬚髮，掛袈裟，形雖似僧形，志未捨俗志，東西奔走，真偽奚分，只知隨順塵緣，翻成憶憶，虛消信施，徒廁空門，忽然白首到來，返被後生取笑，憶昔上古出家之勞，其形骸饑其體膚，盡命畢身，爲究斯事，所以一日不作，一日不食，豈比今坐無愧，檀那四事，以供養汝，意在於何，望伊救拔，今生不通玄妙，來世愈見牽纏，負累宗親，同墮地獄，如此之者，滴水難消，何況大厦高堂，坐臥何穩，已無一德，罪有萬端，樂土未成，阿鼻先就，謹勸叢林高士，學法上人，各揣胸襟，細觀得失，莫隨庸輩，恣逞無知，猛勵修行，以悟爲則，常咨良友，以益見聞，廣得琢磨，易成道業，果能如是，日消萬兩黃金，銀屋瓊居，不爲分外，若不如是，濫膺僧倫，佛法正因，憑誰紹續，訪親問病，於道極妨，但學洞山，不還有益，豈不見青蘿倚喬松之勢，直聳千尋，紅尾競禹門波，爭超三級，無情之物，猶自攀高，弄水魚欲騰霄漢，況人篤信，豈無徹時乎，但堅此心，何患不達，道非外得，返己而求，默審精微，窮通淵奧，光陰有限，人命難存，轉息鶴髮滿頭，不可蹉跎空過，心源若濁，前路復昏，病忽相侵，無能可敵，彼時思忖，悔已遲遲，恨早不修，臨江無船，佛法衰替，人我兼行，無盛今時，各自努力。

愚逾海越漠緣合此朝舉古明今寧無慚愧但勸諸後學同究此心以報佛祖慈蔭之恩共酬檀那供養之德語無華飾勉以直辭如此而行自他利益矣。

大慧禪師發願文

唯願某甲道心堅固長遠不退四體輕安身心勇猛衆病悉除昏散速消無難無災無魔無障不向邪路直入正道煩惱消滅智慧增長頓悟大事續佛慧命度諸衆生報佛祖恩次冀某甲臨命終時少病少惱七日已前預知死至安住正念末後自在捨了此身速生佛土面見諸佛受正覺記分身法界遍度衆生也。

中峰和尚坐禪論

坐禪別無用心處、只十二時中、放下一切塵勞妄想境、常令自心如虛空、毫髮計使無他念、若得自心清淨、還不思善不思惡、正當與麼時、如何是我父母未生已前本來面目、如是看、若工夫一片成、自然得有悟入、何名坐禪、外於一切善惡境界、心念不起、名為坐、內見自性不動、名為禪、如今學道人、不悟此心體、便於心上生心、而向外求佛、着相修行、皆是惡法、非菩薩道。

國譯夢窓國師語錄

解題

夢窓國師疎石は徳高くして詞藻豊かに、而も北條氏の末期より足利氏の初世に亘りて、諸方の大利に住し、高く宗旨を擧揚し、幾多の龍象を打出し、且つ七朝の帝師となり、其の一派は天下到る所に彌蔓し、寔に當時禪界に於ける巨人なりき。本語録は斯る大宗師の遺録なれば、古來、叢林の間に盛んに愛誦せられ、貞治四年開板せられて以來、數度の開刻を重ねて今日に至れり。今其の内容の一般を考察するに、上卷の南禪寺語録は侍者本元、慧逸等の編、淨智寺語録は曇林の編、圓覺寺語録は紹榮の編、再住南禪寺語録は紹榮、懷澄、士永等の編、天龍寺語録は宏遠、智光、彌浩等の編、再住天龍寺語録は周澤の編、下卷の陞座以下の各篇は門人妙葩の編にして、國師の滅後十五年を経て門弟子藤原德叟居士の開板に係る。卷頭には東陵の序及び國師の自戒刊板語を掲げ、卷末には梵琦及び妙葩の跋を添ふ。各篇何れも精金美玉の言句に非ざるはなく、書中到處、斯の禪界巨擘の風藻と其の面目とを窺ふことを得べし。附録の西山夜話は、師が南禪寺に住せし際、應機接物、門弟子の間に答へし法話にして、臨川家訓は曆應二年、師が臨川寺を退かんとするに際し、諸門弟子を誠しめしもの、其他、拾遺の偈頌、祭

文、疏、法語、發願文などは、後年、開板者の添附せしものなり。

傳を案するに、國師諱は疎石、夢窓と號す。俗姓は源氏、伊勢の人にして宇多天皇九世の孫なり。母は平氏、嗣を觀音に祈る。金色の光、口に入ると夢みて娠む。後宇多天皇の建治元年を以て生る。四歳にして母を喪ひ、弘安元年、一家擧つて甲斐に移る。九歳にして同國平鹽山の空阿上人に投じて常に法華を誦し、以て母の慈に報ず。十八歳にして祝髮し、初め名を智曜といふ。南都の戒壇院に抵り、慈觀律師を禮して具足戒を受け、顯密の教を學習す。然れども意に義解の學を嫌ひ、嘆じて曰く、「佛法は義學の詣る所に非ず」と。深く別傳の宗を慕ふ。一夕、夢に支那の疎山、石頭の二刹に遊ぶ、一人の龐肩の僧あり、達磨の像を授けて曰く、「爾、善く之を奉持せよ」と。既にして寤めて自ら謂へらく、「吾れ禪宗に因縁あり」と。因つて名を疎石と改め、衣を更へて京に上り、建仁寺に入りて無隱圓範に參す。師意を傾けて朝參暮誦、遂に寢食を忘るゝに至る。永仁三年、相州鎌倉に往き、無及德詮、葦航道然、桃溪德悟、癡鈍空性の諸師に歷參し、皆法器を以て許さる。同五年、京師に回り、再び無隱に侍す。正安元年、來朝僧たる一山一寧禪師、鎌倉建長寺に主たるや、師往いて參じ、擇木寮に在つて諸家の語要を諮決し、日々慈解を増す。去つて奥州に遊び、松島の福寺に寓す。其の近地に一僧あり、止觀を講ずるを聽いて、無礙の辯才を得たり。然れども心地未だ明かならざるを以て、復た鎌倉に往き、一山に見えて問うて曰く、「己事未だ明めず、請ふ直指せよ」と。一山曰く、「我が宗に言句なく、亦一法の人に

與ふるなし」と。師曰く、「和尚、慈悲方便せよ」と。一山曰く、「也た慈悲もなく、方便もなし」と。師益々疑著す。去つて萬壽寺に往いて佛國高峯に參す。高峯曰く、「一山何の言句かありし」と。師前話を擧す。高峯聲を勵まして曰く、「汝、奚ぞ道はざる、和尚漏逗少からず」と。師尚ほ未徹在、請に應じて再び奥州に赴く。常陸の白庭に至つて庵居し、自ら誓つて曰く、「若し休歇を得ざれば高峯を見ず」と。嘉元元年の夏、一夕、坐久しうして起つて壁に靠らんと欲し、誤つて顛倒し、豁然として大いに悟る。乃ち偈を作つて曰く、「多年堀地覓青天、添得重重礙膺物、一夜暗中颺三椽、等閑擊碎虚空骨」と。直に淨智寺に抵つて高峯に呈す。高峯大いに喜び、囑して曰く、「西來の密意、汝今已に得たり。善く自ら護持せよ」と。即ち印可を得て甲州に往き、常牧山に庵居す。高峯の建長寺に主たるや、師を招いて上野の長樂寺に住せしむ。師力め辭して、美濃の虎溪に到りて庵を卓て、又土佐の吸江庵に居す。又相模三浦の臥龍山に往き、泊船庵を營み、門を杜ぢ客を謝して専ら聖胎を長養す。後、上總に之きて退耕庵を作る。

正中二年師年五十一、此の春、洛の南禪寺席を虚しうす。後醍醐天皇、特に詔を降して師を請す。師疾と稱して起たず、重ねて朝旨あり、上意逆ふべからず。乃ち起つて八月、南禪寺を領す。天皇召して宮に入れ、特に錦座を賜うて法要を説かしめ、所説旨に契ふ。嘉暦元年、樞府の命を以て鎌倉に至り南芳庵に寓す。翌年二月、北條高時の強請によりて淨智寺に住す。一夏を過し、辭して南芳庵に歸る。

秋八月、錦屏山瑞泉寺を營みて移り住す。元徳元年秋、圓覺寺に住し、翌年潜かに瑞泉に歸る。此の頃檀越の請に應じて、甲斐の慧林寺を開く。元弘三年、後醍醐天皇、宸翰を降して師を召す、師直に參内して天顔に咫尺し、八月勅を奉じて臨川寺に居る。天皇、特に夢窓國師靈龜山臨川寺開山始祖と賜ふ。建武元年、詔を奉じて再び南禪寺に住す。三年の春、京師大いに亂る、師南禪寺を辭して臨川寺に退居す。將軍足利尊氏、師を幕府に請じて法要を聽き、且つ弟子の禮を執る。延元四年(北朝の曆應二年)の春、攝津の太守藤原親秀、西芳教寺を革めて禪刹となし、師を請す。師忻然として之に赴く。此の年八月十六日、後醍醐天皇、吉野の行宮に於て登遐し給ふや、尊氏勅を奉じて、帝の冥福を薦嚴せんがため、嵯峨に靈龜山天龍資聖禪寺を建て、師を請じて開山始祖となす。貞和元年(南朝の興國六年)八月、先皇の七回忌に當つて、開堂慶讚す。實に曆應二年より貞和元年に至る六載の間にして、山門、法堂、方丈、廊廡、厨庫等悉く備はる。開堂の日、太上皇、上皇及び光明帝、百僚を率ゐて臨幸し、師陞堂說法す。翌年秋、雲居庵に退き、嗣子志玄をして天龍の席を補はしむ。天皇、師を召して宮中に入れ、師資の儀を執り、特に金襴紫衣を賜ひ、又、特に夢窓正覺國師の號を賜ふ。觀應二年(南朝の正平六年)八月十五日、再び朝旨あり、特に手詔を賜うて夢窓正覺心宗國師と加賜せらる。十六日、衆を辭して三會院に退き、次で微疾を示し、九月朔、衆に告げて曰く、「我が世縁近きにあり、疑あるものは問ふべし」と。衆競うて入室し請詢するに、機に隨つて開發す。朝廷、醫藥を賜ふも師辭して受けず、

九月十九日、太上皇親しく寺に幸して病を問ふ、師飲んで恩を謝し、ために法を説く。二十九日遺偈を書して曰く、「轉身一路、横該豎抹、畢竟如何、彭八刺札」と。三十日に天龍、臨川の衆徒を招き、親しく面別を告げ、怡然として寂す。壽七十七、僧臘六十。著述は本語録の外、夢中間答集三卷、夢窓國師法語一卷、夢窓國師和歌集一卷、谷響集一卷あり。皆世に行はる。嗣法の弟子は無慮一百餘、就中、春屋妙葩、無極志玄、絶海中津、龍湫周澤等は最も現はれ、實に叢林の麟鳳たり。師は性質溫雅にして自然に人をして感ぜしむ。故に上は王公より下は匹夫に至るまで、一たび其の音容に接するものは鑽仰せざるものなし。後醍醐天皇以來、七朝の帝師と仰がれ、特に後醍醐帝よりは夢窓、光明帝よりは正覺、光嚴帝よりは心宗、後光嚴帝よりは普濟、後圓融帝よりは玄猷、後花園帝よりは佛統、後土御門帝よりは太圓などの國師號を賜はる。而も其の門派は天下到る所に繁興し、洵に我が禪界稀有の善知識なりしと謂ふべし。

天下の至大なるものは道なり、至公なるものは理なり、人能く公正にして宏大にして、道理に合するもの、尊んで且つ敬せざるは莫し。予、南國より東のかた、扶桑に來つて、惟だ夢窓國師一人を見

る而已。師の道、春の大地を行くが如く、師の徳、皎日の空に當るが如く、師の戒、凜として氷霜の若く、師の行、行事に見はる。八たび、鋤斧を提げ、六處の開山、三朝敬を加ふ。一國咸く尊ぶ、所謂大公の道理に合ふて、自然に人皆得て尊敬すと。若し師の語言天下に満ちて、

- ①南國。元の國を指して云ふ、漢土を喚んで江南と曰ふ。
- ②扶桑。即ち日出處を扶桑と云ふ、東海の中に在る神木、轉じて東方日出の處にある神仙の國、又日本を指していふ。
- ③八提。圓覺、南禪、淨智、惠林、臨川、天龍、而して南禪天龍は再住なり。
- ④鋤斧。鋤音突、鈍也、青原曰く、吾に箇の鋤斧子あり。
- ⑤六處。伊勢の善應、相模の瑞泉、甲斐の惠林、播磨の瑞光、山城の臨川、天龍なり。
- ⑥三朝加敬。後醍醐帝賜ふ夢窓の號、光明帝賜ふ正覺の號、光嚴帝賜ふ心宗の號。
- ⑦無口過。孝經に言ふ天下に滿ちて口過なしと。注に口臆也。
- ⑧佛光。圓覺の開山無學祖元禪師、宋人、無準に嗣ぐ。貞治二年、佛光圓滿當照國師の賜號あり。
- ⑨佛國。下野那須雲巖寺開山なり、高峯顯日禪師、後嵯峨帝皇子佛光に嗣ぐ、同上の年、佛國應供廣濟國師と賜ふ。
- ⑩龍湫。諱は周澤、夢窓に嗣ぐ、南禪・天龍・建仁等に住す。
- ⑪佛鑑。無準師範禪師、宋の名僧にして、佛鑑禪師と特賜號あり、破庵に嗣ぐ。
- ⑫翳睛。蔽す也、障ふる也。
- ⑬叢林。梵語は貧婆那、此には叢林と云ふ、衆多の意、大樹の叢聚する、是を名づけ林と爲す。
- ⑭文和。北朝後光嚴帝の年號、南朝の後村上帝正平九年。
- ⑮禪。祀と同じ、年也。
- ⑯孟。始也。
- ⑰東陵。永興、元國四明の人、雲外岫に嗣法し、洞上の宗を得たり、本朝觀應二年來朝、無極玄、天龍の事を謝するに會ふて、夢窓、師を以て選補す、後詔を奉じて南禪に遷る、貞治四年五月六日安坐して化す、勅して妙應光國惠海慈濟禪師と諡す、天龍にては第三世なり。
- ⑱求添削。國師、門人の編錄を誠むるの語なり。

① 口過なしと曰ふ者なり。

國師の祖は 佛光にして、佛國を師として宗旨を發揚し、後學を警訓す。珠の盤に走るが如し、自つて來ること有り。其の嗣子 龍湫澤首座、師の語録を出して以て余に示し、予に命じて序引を爲らしむ。予が曰く、「國師は乃ち 佛鑑下の子孫にして、却つて 翳晴の法を用ふ。此の録を觀ん者は、自ら宜しく眼を着くべし。師の法を嗣ぐ者衆し、皆 叢林の麟鳳なり。必ず又其の家世を大いにする者あらん。」

昔 文和三 禪 孟夏佛誕生之日

四明 東陵叟永瑛 序

此れは是れ老僧一生の寐語なり。切に 添削を他人に求むること莫れ、矧んや刊版印施をや。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

住山城州瑞龍山南禪禪寺語錄

侍者 本元 慧逸等編

正中二年八月二十九日 入院

① 山門を指して云く「溪澗 潺湲、峰巒 岌岌、公門曾て内外なし、誰か言ふ拽けども入らずと。左右を顧視して云く、「恠しむこと莫れ、相揖せざることを。佛殿、郝老、名を聞くも也た喜ばず、我儂、今日特に來參し良久、「黑蜜は太だ苦く、黃連は太だ甘し。」
土地堂。靈鑑 遺すことなし、賞罰遜ら
す、敢て問ふ、「即今我を觀る麼。泊んど更

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

① 七朝國師號。夢窓、後醍醐。

正覺、光明。心宗、光嚴(以上特賜)。普濟、後光嚴。玄猷、後圓融。佛統、後花園。大圓、後土御門(以上勅諡)。

日本元。南禪に任ず、元翁本元、佛德禪師と諡す、高峰顯日に嗣ぐ。

② 慧逸。詳ならず。

③ 正中。後醍醐帝の年號、師年五十一歳。

④ 入院。百丈清規といふ支那の百丈といふ名僧のきめておか

れたものに具さに出づ。

① 山門。三門なり、城市に對して云ふ、その制、入口三つ、三解脱門を表す。

② 潺湲。水聲也、水の流るること、南禪の風光を云ふ。

③ 岌々。山の高きこと、同上の風景を述ぶ。

④ 公門。三門は佛教の公門也。

⑤ 莫恠。ふとどきと思はれて、不相揖。目禮を缺く。

⑥ 郝老。趙州論禪師のこと、南泉の嗣、曹州郝郷の郝氏。

に一分の飯を下せ。」

祖師堂。聯芳續燄、地に朱砂なし。恐くは八の 評を以つて直と爲すと、一炷の 兜樓、且く他を賞す。

據室。横に主丈を按じて云く、「摩竭の迹を師とせず、少林の響に傲はず。」大衆を召して云く、「只だ 當頭に 薦取せんことを要す。切に忌む故きを 温ね新しきを知ることを。」喝一喝。

勅黄。此れを以て 弊を革め、危きを持し、此れを以て 隠れたるを索め 遠きを致す。印文已に露る、見るや也た無や。碧落の碑贖本なし。

山門 疏。全褒 全貶、海闊く山幽かなり、我を知り我を罪することは、春秋に在らず。

拈衣。大庾嶺頭 線路を通じ、鷄足山裏 針鋒を藏す。新南禪、通も也た得ず、藏も也た得ず。衣を提起して云く、「等間に提起して虚空を覆ふ。」

法座。應身は 苾艸に坐し、法佛は 空裏に坐す、且く道へ、衲僧甚麼を以てか座と爲ん。法座を指して云く、「我 爾に隠すこと無し。」

陞座。拈香して云く、「此の一 瓣の香、爐中に薫向して、恭しく爲めに、今上 皇帝、聖躬 萬歳萬歳萬歳を 祝延したてまつる。陛下、恭しく願はくは 皇威く 天賦の恩に頼らんことを。」

此の香、諸位尊官、文武 百寮の爲めに、

①我儂。俗に我を儂といふ。
②鑑鑑。神鏡の物を照す如く善惡をよくみわけける。

③遺。とりのこす。
④賞罰。善惡を。

⑤敢問。ふんぎつて、りよぐわいながら。

⑥泊。及也、やがて、更に、この上の義。

⑦朱砂。丹を以て朱色の名とす、故に朱砂と呼ぶ。

⑧評。まのあたり人を斥くに言を以てす、人のかけことなとり出して云ふ。

⑨兜樓。梵語に兜樓婆、此に香草と翻す、香のこと。

⑩據室。上二句は師家、下二句は學者に、方丈、室中の間に椅子・拂子・拄杖・竹篋を設け、新命、椅子に坐して侍者焼香請法、その時の法語。據は物をとらへじがみつく、はなさぬとの意。

⑪致遠。遠きより召し出す。
⑫碧落之碑。支那の山西絳州の興龍宮に碧落の石像あり、背に篆文千餘言を刻す。

⑬疏。しよと引いてよむべし、條陳也、簡條を云ひ列べ、山門の兩班より、請待する四六の文章なり、境と徳と請と次第して作るが法なり。

⑭全褒。法の爲に出世するを。

⑮全貶。徳のなきに長老位になること。

⑯知我。孟子の滕文公の章に、「孔子懼れて春秋を作る云云」の末に孔子曰く、「我を知る者はそれ唯春秋乎」とあり、この意をとる。

⑰拈衣。初出世の時ばかりの式なり、師承の由來を人にしらす爲め。

⑱大庾嶺。六祖慧能大師、五祖大師に傳衣し、南行す、大庾嶺に至るとき、衆みな之を奪はんとして、後を逐ひしときのご故事。

⑳線路。衣の縁にて後句と對す。

㉑鷄足山。迦葉尊者、如來に傳法の後、雞足山に入り、後、滅盡定に入る。

㉒針鋒。衣の縁。

㉓應身。三身の中に有り、隨時隨處に隨處に出現するを應といふ。

㉔苾艸。苾は、茅に作るべし。

㉕法佛。虚空を以て座と爲し、清淨法身を成じ、常寂光土に居す。

㉖坐空裏。法華法師品に曰く、如來の座は一切法空是也。

㉗無礙術。論語述而の章に出づ。

㉘陞座。法堂の須彌壇上にのぼること。しんぞとよむ。

㉙拈香。開堂、長老、又親ら拈香することは、所得の道法、必ずする所あり。

㉚摩竭迹。釋尊が摩竭陀國に在りて、衆の爲めに説法の時のご故事。

㉛少林。達磨が支那の嵩山の少林寺に寓坐して、面壁して坐す。

㉜傲。強ひて人に學ぶ也、かなはぬことをむりにまねをするなり。

㉝當頭。まつさきに、第一番の意。

㉞薦取。がてんする、してとる。

㉟切忌。きらふ也。おそるる意を兼ね。

㊱温故。冷を温むるは舊事を用ゐる也。

㊲勅黄。已下法堂の行事なり。黄は唐の高宗上元三年より、蟲のくはぬ黄紙を用ひて勅書を賜ふ、この故に勅書を勅黄と云ふ。

㊳革弊。叢林の弊風を革めし。

㊴索隱。山林に隠れ居る人を召す。

祿算を資陪し奉る。伏して願はくは輔弼全功を樹て、權威美德を旌さんことを。

此の香、山南海北、到る處に埋藏す、未だ嘗て容易に街賣せず。價を定むること他の大商に還へす。爐中に熱向して前住相州建長、救益佛國禪師高峯大和尚に供養して、用て法乳の恩に酬ゆ。」

索話。清平の時節、風物一新、恢いに東閣を開く。誰か是れ高賓。僧問ふ、「一佛出世、地金蓮を湧す、和尚出世、何の祥瑞か有る。」答へて云く、「露柱燈籠、手舞ひ足踏む。」進んで云く、「人天交接、兩得相見。」師云く、「三臺は須らく是れ、大家催すなるべし。」進んで云く、「詔旆筵に臨み、宸恩地を動す、祝聖の一句、願はくは指示を垂れよ。」師云く、「

- ① 辨香。辨は瓜辨也、此に似たるゆゑにいふ。
- ② 萬歲。君に喜慶する所の者、みな萬歲と呼ぶ、秦漢以來なり。
- ③ 祝延。之を祝して長年ならしむる也。
- ④ 陛下。階は階也、尊稱の第一。
- ⑤ 皇圖。圖は地圖也、國は地圖と云ふに同じ。
- ⑥ 斬新。あたらしきこと、唐人の方言。
- ⑦ 山呼。山は呼ぶ、萬歳の聲などを略していふ。
- ⑧ 康阜。康は安樂の意を兼ね、阜は多也、盛也。
- ⑨ 天賦。天子の恩澤を上天の命に比す。
- ⑩ 百寮。寮は僚と通ず、百官と同じ。
- ⑪ 祿は知行、算は壽算。
- ⑫ 資陪。手傳の義。
- ⑬ 奉。通用して、おんためとよむ、古來よりの傳説也、爲にし奉るとよむよし。
- ⑭ 輔弼。たすけ、たすく。文官なり。
- ⑮ 權威。武官也、權ははかりのおもりにて、物の輕重を自由にするより云ふ。
- ⑯ 山南海北。南北に意なし、海は土佐及び相州三浦也、處處に通るるの意。
- ⑰ 街賣。販賣なり、押賣るの意。
- ⑱ 法乳恩。香を焼いて師の恩に酬ゆ、回衆之に依りて新命の法脈を知る、正法眼の恩乳。この式は、興化存獎禪師が臨濟先師に供養するに始まる、嗣香と云ふ。
- ⑲ 風物。風光景物の略。
- ⑳ 東閣。閣は小門、東に向つて當庭の門を避く、賓客を引く也。
- ㉑ 金蓮。如來足下より放光、金色の蓮華座に坐す。

九天 玉印を撃げ、四海 金輪に服す。進んで云く、「恁麼ならば則ち龍峯高き處、君恩重し。」答へて云く、「須らく知るべし海嶽明主に歸することを。」進んで云く、「記得す 大慧禪師、徑山に住する時、馮侍郎問うて云く、「和尚嘗て道ふ、這の蟲豸と作らずと、今日甚麼と爲てか此の山に住す」と。問頭還つて具眼なりや也た否や。」答へて云く、「六隻の骰子滿盤紅なり、大都只是れ頭彩を見る。」進んで云く、「大慧曰く、「盡大地是れ一箇、杲上座、爾甚の處に向つて我を見る」と、意那裏に在る。」答へて云く、「筭筭盡く、蛾眉。」進んで云く、「今日若し人あり、和尚に向つて恁麼に問はゞ、未審如何んが、祇對せん。」答へて云く、「來つて我が毬門の路を攔ること莫れ。」進んで云く、「古

- ① 露柱。大黒柱、自己の面目にたとへる。
- ② 手舞足踏。孟子の離婁の章に出づ、本文の踏の字は踏の字の誤。
- ③ 交接。入れちがひ、出て合ふなり。
- ④ 三臺。三十拍曲の名也、酒宴を催促するまひなり。三臺の舞は一人ではまはれぬ、みなてまふ、出世もさうじや。
- ⑤ 大家。合家といふ如し。
- ⑥ 旆。使者の持せる旗也。
- ⑦ 宸。帝居を指して宸と曰ふ、屋宇なり。
- ⑧ 九天。天に九野ありと淮南子天文訓に出づ、天からは天子の印を授け、四海の人は輪王の徳に服す。
- ⑨ 玉印。天子の璽。
- ⑩ 四海。四方の如し。
- ⑪ 金輪。十善道を修する金輪王
- ⑫ 大慧。大慧宗杲禪師、圓悟勤に嗣ぐ。
- ⑬ 徑山。支那五山の一、杭州臨安府に在り。
- ⑭ 馮侍郎。字楫、濟川居士なり、佛眼達に嗣ぐ。
- ⑮ 道蟲豸。豸は音ち、足なき虫といふ、蟲は足ある虫といふ。
- ⑯ 六隻骰子。すころくのさい、魏の陳思王、雙六の局を製し、さい三つをつくる、唐の末に至つて六つとなる。
- ⑰ 筭筭。ははき。
- ⑱ 蛾眉。蛾は黃蝶に似て小虫なり、其の眉勾曲して畫の如し。
- ⑲ 祇對。本文祇に作るは誤なり、祇は敬也、もと上へ對する語、なれども常語となる、つつしみたふ。
- ⑳ 路。路は通りつけた人でなくてはしらぬ。

人と相去ること多少ぞ。答へて云く、「山上の路を知らんと要せば、須らく是れ往來の人なるべし。進んで云く、「謂つべし。法は法に隨つて行じ、法幢隨處に建立すと。」答へて云く、「天津橋上晝官更を打す。僧禮拜、師乃ち云く、「法固必母し、道方偶を絶す。雙放雙收、即默即說、月に嘯き雲に眠る處、古渡頭邊を離れず。和泥合水の時、常に孤峯頂上に坐す。少林花開き果結ぶ。達磨未だ肯て迷情を救はず、南嶽烟暗く霧深し。思大何ぞ曾て豹變に倣はん。現成の法席、誰か卷き誰か舒ぶ。廣大の施門、闢くに非ず、闔づるに非ず。便ち見る物物同じく皇道不言の化を揚げ、頭頭咸く祖宗絶唱の猷を表することを。石上座恁麼の舉唱、此れは是れ建化門中、私に車馬を通ず。也た只だ官には針をも容れざる底の如きは、又且つ如何ん、低聲低聲、一字公門に入れば、九牛車けども出でず。」

復舉す、世尊曰く、「佛法國王大臣、有力の檀那に付屬す」と。拈じて云く、「釋迦老子、才を量り、職を補して、其の宜しきを失はず、二千餘年、遺風未だ墜さず、他の付屬底の佛法を知らんと要するや。拂を以て床を撃つて云く、「道泰かにして傳へず天子の令、行人盡く唱ふ太平の歌。」

當晩小參、僧問ふ、「隠さんと欲すれば彌露はる、遠く東關の舊隱を離れ、至化逃れ難し、來りて南禪の主盟と爲る、如何なるか是れ不動尊。」答へて云く、「天台に普請、南嶽に遊山。」進んで云く、「恁麼ならば則ち一點の水墨兩處に龍と爲る。」答へて云く、「靈蹤は更に猿啼の處に在り。」進んで云く、「記得す、徳山云く、「今夜小參答話せず、問話の者は三十棒」と、未審、意那裏にか在る。」答へて云く、「此の地に金二兩なし。」進んで云く、「時に僧あり、出で、禮拜す、山便ち打す、還つて的當なりや也た無や。」答へて云く、「長鞭馬腹に搆らす。」進んで云く、「今夜小參問あり答あり、

- ① 法隨法行。松源治父録の語。
- ② 天津橋。支那河南府の城外に在り、洛水に架す。
- ③ 官更。公儀の夜の時大鼓なり。
- ④ 師乃云。已下提綱。
- ⑤ 固必。とりつき、滞るなり。
- ⑥ 方隅。方は四方、隅は角なり。
- ⑦ 救迷情。達磨二祖に傳法の偏にあり。
- ⑧ 烟暗。豹變に縁あり。
- ⑨ 思大。南嶽慧思禪師、支那天台の祖。
- ⑩ 豹變。易の革卦に出づ、君子豹變、善に遷るの義。
- ⑪ 現成。できあひの義に探る。
- ⑫ 卷舒。馬祖上堂、百丈との故事。
- ⑬ 不言之化。論語陽貨篇に、「天何を言ふや、四時行はれ云云」のこと。
- ⑭ 絶唱之猷。猷は道なり、法華方便品の「是法不可示言辭相寂滅」の意、不言の化に對し

- ① 石上座。夢窓國師の諱、疎石。
- ② 一字入公門。この十字、大慧廣錄十に出づるの語。
- ③ 九牛車不出。車にてひくなら、死字を活字に用ひたるなり。
- ④ 復舉。百丈清規に擧古結座とありて、古則を拈提して一座の說法を結びとめるなり、此にて開堂の儀式了る。
- ⑤ 付屬國王。仁王般若經を説き給ひて、十六大國及び波斯匿王等に付屬す。
- ⑥ 檀那。梵語なり、此には施と譯す。
- ⑦ 補職。役を云ひ付くるなり、補は缺けたるをおぎなふなり。
- ⑧ 泰。安く寛大の意を兼ね。
- ⑨ 當晩。入院の日の晩。
- ⑩ 小參。禪宗では詰旦升堂、之を早衆を集めて開示す、之を
- ⑪ 參といひ、日晡念誦之を晩參といひ、非時に說法する、之を小參といふ。
- ⑫ 欲隱彌露。楞嚴經六に此の語あり。
- ⑬ 遠離……。この年より七年已前、土佐より關東へかへり、三浦の泊船庵に居る、三年前退耕へ移る。
- ⑭ 主盟。左傳の襄公九年章に、非禮何以主盟。
- ⑮ 不動尊。不動尊は應身也、南禪、不動水の因縁あり。
- ⑯ 普請。作務、禪家の雜務をいふ。
- ⑰ 一點水墨。支那の張僧繇の故事なり、東關南禪も天台岳も自在なり。
- ⑱ 爲龍。一點の點にて龍を爲す也。
- ⑲ 徳山。宣鑑禪師、龍潭に嗣ぐ、唐僧。
- ⑳ 此地無金。自らその無しと云

徳山と是れ一か是れ二か。答へて云く、「一に多種あり、二に兩般なし。」進んで云く、「古今異路なし、達者自ら歸を同じうす。」答へて云く、「峯轉じて路なきかと疑ひ、溪を隔て、別に村あり。」僧禮拜。

師乃ち云く、「山野未だ此の保社に入らざる已前、諸仁者、曾て者裏に在つて、各自に盤桓す。殿柱閣梁、人人具に見、鐘聲鼓響、箇箇親しく聞く。同一見聞、同一受用、直に得たり耳裏。圓通の戸、牖を開き、眼中本の光輝を放つことを。是れ逐旋、捏合するにあらず、亦法爾如然に非ず、直饒佛祖出興すとも、也た須らく拱默すべし、誰か肯へて一點も相謾せん。忽ち箇の漢ありて出で來りて道はん、此の現前の大衆、既に能く是くの如し、爾甚の長處有りてか、茲の法席に主たりと。」主丈を卓すること一下して云く、「意氣ある時、意氣を添へ、風流ならざる處也た風流。」

復舉す、法燈和尚、衆に示して云く、「我れ本深く巖壑に隠れて、病を養ひ、時を過さんと欲す、奈んせん、先師未了底の公案あるに縁つて、出で來りて他の與に了卻することを。」時に僧あり、出で、問ふ、「如何なるか

- ① 有。有意氣時。宋白雲守端禪師の三頓を禪頌するの句。
- ② 意氣。男だての氣象。
- ③ 風流。はでな、だてな様子。
- ④ 法燈。清涼泰欽法燈禪師、法眼に嗣ぐ、唐僧。
- ⑤ 公案。公府の案牘に喩ふ、佛祖の機縁、之を目けて公案といふ。
- ⑥ 祖。父の廟を祖といふ、祖先といふに同じ。
- ⑦ 陳年滯貨。陳は久しき也、子のきものをうりつけたと思ふた。
- ⑧ 累世。先祖代代の愧をかいた。
- ⑨ 醜。百醜、みともない。
- ⑩ 拙。不調法な。
- ⑪ 雲月。雲は山雲、月は溪月。
- ⑫ 膏肓。膏は心下、肓は心の上、共に針薬の及ばぬところ、醫者のさしたなげるところ。
- ⑬ 任公子。莊子外物篇に出づる釣魚の先生。
- ⑭ 次。百丈清規上に二三に出づ、入院の序にする佛事、建寺の禮越の爲に陸座す。
- ⑮ 龜山。八十九代龜山天皇、南禪寺の開基本願にして離宮を改めて寺とし給ふ。
- ⑯ 覆。譯して純淑といふ、地最勝ともいふ。釋迦の本姓。
- ⑰ 不説一字。四十九年一字不説。
- ⑱ 趙州。從諗禪師、唐の名僧。
- ⑲ 半藏。一婆子あり、錢を送りて藏經を轉せんことを請ふの因縁古事あり。五燈會元四に出づ。
- ⑳ 全功課。功は工夫にて、てまを譯す、課は仕事のつもり、ほどらいなり。
- ㉑ 龍山。夢窓國師みづからを云ふ。
- ㉒ 諦觀。世尊一日陸座、文殊白槌して諦觀……と證明す、これは音讀するのならばせであら、訓讀すると、あきらかに

是れ先師未了底の公案。」法燈便ち打して云く、「祖彌了せざれば、殃兒孫に及ぶと。」拈じて云く、「法燈、將に謂へり。陳年の滯貨販賣時を得たりと、笑ふべし。累世の家私、自ら揚げて外に向ふことを。石上座、溪山に醜。拙を藏め、雲月。膏肓に入る。只先師未了底の公案なきに因つて、所以に出で來りて他の與に恩を謝す、且く道へ古人と優劣ありや也た無や。」良久して云く、「是れ任公子にあらずんば、徒に釣竿を話するに勞せん。」

次の日、龜山聖廟の爲に藏經を看讀し奉る。上堂、「瞿曇一字を説かず、諸人箇の什麼をか看闕す。趙州只た半藏を轉す、甚と爲てか功課を全うすることを得ざる。龍山試に者裏に向つて消息を通じ去らん。」拂子を

舉起して云く、「諦觀法王法、法王法如是。」

菊節、兩班を謝する。上堂。大功不宰、

大化不言は、東西自然に轍に合ふ、左右原に逢

はずといふこと靡し。大衆還つて會す麼、如し

會せば、菊を東籬の下に採る、會せずんば悠

然として南山を見る。

上堂。水。肅し山寒うして秋已に老ゆ。

現成全案人の知る没し、人の知る没くんば、睦

州の主丈又枝を生せん。喝一喝して下座。

開爐。上堂。秋光一變。小春回る。寒暑何

んぞ曾て往來に屬せん。奈んともせず。瀉山

千古の錯、今朝又舊爐の灰を撥ふ。

上堂。主丈を拈じて云く、「此れ箇の事、

度量を絶す。」豎起して云く、「豎に三際を窮

め、横に按じて云く、「横に十方に徧し。大衆、

法王の法を觀するに法王の法はかくの如し」と云ふ、諦觀はよく注意してみること、法王法は佛陀の法、正法眼藏涅槃妙心とか、佛心印とか、佛さまの御說法とかである、宇宙の森羅萬象が佛の本體であるといふ文殊が申された。

菊節。九月九日重陽の日の上堂。

謝兩班。兩班は禪宗の役僧の役名、前版、維那、都寺、藏主の四名役僧なり。

上堂。百丈清規に、毎月旦望に上堂あり、外に五參とて五日あり、今九月は旦を會きて九日にする。

大功不宰。宰は料理人の切り刻み煮焼すること、宰は主也治也。

東西自然轍に合ふ。東西は班の知事、兩班の頭首。

探菊。陶淵明の詩。

上堂。九月朔(一日)の上堂。

縮也、寒也。

現成公案。睦州見僧來云、現成公案放汝三十棒。當面の問題を頓悟す。

開爐。十月旦(一日)。

小春。冬の日の暖きこと春の如きといふ。

屬。人の下につくと云ふことにて、我が自由にならぬ意、此は往來につかぬれば、往來せぬなり。

瀉山。傳燈九に、靈祐百丈に嗣ぐ、侍立の次で問ふ、誰ぞと、師云く、靈祐、丈云く、汝爐中を撥ふて火ありや否や、師撥ふて云く、火なしと、百丈躬起して深く撥ふて極小の火を得たり、擧して以て之に示す、云く、此れ是れ火にあらずやと、師發悟す。

- ① 此箇事。この一箇と云ふ意。
- ② 度量。度はかゝれをあたへはかる、量はますにてはかる。
- ③ 三際。前際は過去、後際は未來、中際は現在世。
- ④ 曙色。よの明けぬ内は、何かわかつたことか、あるかと、みなながめたが、あけたれば、やはりいつもの通り。
- ⑤ 上堂。十一月旦。
- ⑥ 五祖。法演禪師、白雲端に嗣ぐ。
- ⑦ 庭前栢樹。趙州の公案、にはさきのかしのき。
- ⑧ 賺。物を買ふてかひまはる、と。
- ⑨ 顛頂。大きな面。
- ⑩ 冬至。四節上堂の一。
- ⑪ 筆筭。ひちりき。
- ⑫ 懷冰。文選廿九張茂先が詩に出づ。
- ⑬ 律管。月月の律のくだ。
- ⑭ 葭灰。あしのはひ。

横豎總に相干らざる處を見んと要する麼。卓一下して云く、「曙色未だ分

たず、人盡く望む。天曉に至れば也た尋常。」

上堂。擧す、五祖演和尚云く、「如今の禪和家、擧話も也た會せず、

如何なるか是れ祖師西來意、庭前の栢樹子と、恁麼に會せば便ち不是。如

何なるか是れ祖師西來意、庭前の栢樹子と、恁麼に會せば便ち是と。」拈

じて云く、「五祖老師、夜半に烏鷄を捉へて、隣家の睡を驚起す。未だ免れ

ず後人を賺語して、顛頂の處に向つて承當することを。龍山は則ち然

らず、如何なるか是れ祖師西來意、庭前の栢樹子、恁麼に會して始めて得

べし。」

冬至、小參。籬頭。筆筭を吹くときは、則ち人人恰も。氷を懷くに似

たり。律管。葭灰を颺ぐるときは、則ち物物皆。續を挾むが如し。

偉いなる哉。立櫃。鑽仰すべからず。徳の覃ぶ伎、偏なく。黨なし。

諸仁者、此に於て薦得せば、皓老の布。棍價千金。若し也た薦せずんば、

洞山の果子甘うして爽かならん。有る底は與麼に道ふを聞いて、便ち道

ふ、「爾許多の閑事を説いて什麼にか作す」と。今年冬至月頭に在り、早く

須らく被を賣りて牛を買ふべし。良久して云く、「嗚呼覆水收め難し。」

復擧す、芭蕉和尚、衆に示して云く、「爾主

丈子あらば、爾に拄杖子を與へん、爾拄杖子

なくんば、爾が拄杖子を奪はん」と。拈じて云

く、「芭蕉、此の一行の大、神呪を誦出す。古今

未だ人の翻譯し得るあらず、龍山、今夜衆に對

して、分明に翻譯し去らん。」主丈を卓するこ

と一下して云く、「唵蘇嚩蘇嚩娑婆訶。」

冬節諸官至る、上堂。一陽纔かに發生すれ

ば、徧界、硬地なし。龍山、法鼓雷を轟かせば、

萬像、森羅耳を側つ。雲堂の清衆、證明

を作し、朝廷の貴胄、光賁を垂る。今日、風

雲已に、際會、來年の氣候記するに勞せず。

是是不是、維摩掌裏大千を、搏り、老胡口

中兩齒なし。

臘八上堂。瞿曇、喫し盡す氷霜の苦、

夏蟲に説向すれば都て知らず。後二千年、

屈述するに堪へたり。寒梅初めて綻ぶ兩三枝。

主丈を卓して下座。

上堂。「居諸移り易く、歳序云に暮る、或

は無常迅速の、商量を作し、或は物不遷

の處に向つて領取す。且く道へ那箇か是れ正

見。」良久して云く、「鶴蚌、諍つて休まず、終

に漁人の手に入る。」

除夜、小參。索話、臘月三十日、參立便宜

を得、花は須らく、連夜に發くべし、曉風の吹

くを待つと莫れ。僧問ふ、「爆竹聲の中、年已

に盡く、東村の王老、夜、錢を篩ひ、觀面の

一句、請ふ師直指せよ。」師云く、「分明に記取せ

② 挾。續は綿也、一陽來復するにより暖にして。

③ 玄樞。理の微妙なるを玄と曰ひ、樞は開閉を自由にするものなり。

④ 罩。及ぶ、とほくまでひろがりどとく。

⑤ 無偏。偏頗なり、えこなし。

⑥ 無黨。偏也、ひいきなし。

⑦ 皓老。玉泉承皓禪師、北塔廣に嗣ぐ、ふんどしに歷代の祖師の名をかく。

⑧ 根。はつた、此の方の下帯、

⑨ 洞山果子。洞山良价禪師、雲巖巖に嗣ぐ、師泰首座と冬節菓子を喫するの故事なり。

⑩ 今年冬至。以下買牛までは愚庵智及び禪師の語なり。愚庵は原東行端に嗣ぐ。

⑪ 被。よぎ。

⑫ 芭蕉。惠清禪師、南塔湧に嗣ぐ。會元九に出づ。

⑬ 神呪。陀羅尼なり、秘密不軌、

此の土の禁咒の如し。翻譯。梵語を轉じて漢土の語となす。

⑭ 唵蘇嚩蘇嚩。唯佛與佛の境界なり、甘露の水を洒がれて、よみがへりかへるを云ふ。

⑮ 一陽。一陽來復。

⑯ 硬地。陽氣回つて、いて凍るところはない。

⑰ 萬像。日月星辰等、天。

⑱ 森羅。山河草木等、地。

⑲ 雲堂。如來の道場、衆海雲の如く集ると華嚴疏抄にあり、この意に取る、衆の修行するところを云ふ、禪堂なり。

⑳ 貴胄。胄は裔なり、長なり、子孫れされきのすぢめの人なり、華族や大名。

㉑ 光賁。賁音ひ、上より下への辭、垂示の類、光臨に同じ。

㉒ 風雲。風は虎に従ひ、雲は龍に従ふ、易文言傳に出づ。

㉓ 際會。時節に相遇ふ際といふ、

㉔ 後二千年。二千年の後、漸く遂に所念をばらしたと也。

㉕ 風。苦屈、むれん。

㉖ 上堂。月望、十五日なり。

㉗ 居諸。詩經の日月章に、日居月諸。

㉘ 無常。雜阿含經四十七に、諸の比丘當に勤めて觀察すべし、命行きて無常迅速なること是くの如し云云。

㉙ 商量。商賈の量度して中平を失はずして、以て各其の意を得せしむるが如し、はかりはかるなり。

㉚ 物不遷。諸法住法位、世間相常住と法華にあるが、これである。

㉛ 鶴蚌。しぎとはまぐりなり。諍。恐らくは争の誤か、せりあふてとげぬをいつばうの争といふ。

㉜ 除夜。大晦日のばん。

㉝ 連夜。戌のときより寅のとき

よ。進んで云く、^①路遺つるを拾はざる、眞の古道、民皆業を樂んで豊年を見る。師云く、^②堯舜の君、猶^③化に^④稽る。進んで云く、「舊歲今宵去り、新年明日來る底の事、還つて遷變ありや也た無しや。師云く、「有利無利、行市を離れず。進んで云く、「與麼なるときんば則ち舊歲即ち新歲、新年即ち舊年。師云く、「米中、犀角を雜ふれば、鷄驚いて啄まず。進んで云く、「七十二候を、抹過し、六十甲子を亂却して、更に乞ふ一句。師云く、「乾三連、坤六斷。進んで云く、「三世の諸佛、摸索不著、歴代の祖師、近傍するに門なし。師云く、「劍閣途險しと雖も、夜行人更に多し。進んで云く、「萬物、敷榮の態を獻じ、元樞、煦育の功を忘れず、如何なるか是れ。一老一不老。師

まで、よどほしなり。
①爆竹。支那人の祝ごとにはみなやる、はらふの意が。
②王老。唐宋の俗語にて、えらいおやぢさまといふやうなこ
③師。錢。恐らくは焼くか、諸書
みな然り、寫誤が。
④觀面。したしくあふ。
⑤路不拾遺。秦平の世のけつかうな風儀なり。
⑥堯舜。聖人すら、物事自由にゆかぬ。
⑦化。教化なり。
⑧稽。滯也、物事はかどらぬ、すててゆかぬ。
⑨行市。行はとひや、何何銀行、何何洋行といふがごとし。
⑩不離。本分をはなれぬこと。
⑪米中。此れは師家より、本分草料をあたる、驚いてききいれぬ。
⑫犀角。抱朴子に、米をいれて

おく器なりとの意を出す。
⑬七十二候。曆上、清明、啓蟄等の類、數七十二あり。
⑭抹過。けしてしまへ、抹は長點をかけて字をけすこと。
⑮六十甲子。甲に子、乙に丑と、十干と十二支と合せて六十になる。
⑯乾三連。易乾卦。
⑰坤六斷。坤卦。
⑱摸索不著。俗語にいふ事の實否をさぐり、おふせぬなり。
⑲響。さあどうじやなり、語の助なり、音韻、ものを指す貌。
⑳劍閣。連山絶險、飛閣相通するを云ふ。
㉑敷榮。花のひらくこと。
㉒煦育。日出て暖かにして草木の育つ。
㉓一老。會元の洞山价の章に出づ。
㉔老胡知。老胡は佛さま。
㉕以終爲始。王荊公の除日の句。

云く、「只、老胡の知を許して、老胡の會を許さず。進んで云く、「老這裏に在り、不老底什麼の處にか在る。師云く、「相隨來也。進んで云く、「物は終を以て始と爲し、人は故きより新しきを得。師云く、「江に到りて吳地盡き、岸を隔て、越山多し。僧禮拜。
乃ち云く、「一年三百餘日、今宵是れ、結交頭、一生參學事已に畢る。自ら是れ時の人、肯へて休せず、西屋東家、否泰の來去を、品藻し、人人箇箇、日月の、周流を論量す。古人臘雪を將つて大衆に供し、白牛を烹て、活計を作すことを引き得たり。只飯を嚼んで兒を、餃ふことを知つて、覺えず好肉に贅を生ずることを。龍山與麼の告報、大衆還つて甘ふ麼、若し也た甘はずんば、今夜、分歲、彼此便を得ん。
復舉す、僧、香林に問ふ、「如何なるか是れ、衲衣下の事。林云く、「臘月火山を燒く。頌して云く、「峯巒幽邃罕^①游人。傳説、壺中天地新。洞口風過雲忽散。聞時富貴見時貧。
②歲節上堂。僧問ふ、「曆は、寅を以て正と爲し、風は、艮位より來る、正與麼の時、請ふ師祝聖。師云く、「四塞、狼烟絶え、九天鳳瑞新なり。」

①到江。弘秀集三の處默の句。
②結交頭。結はむすびとめ、交頭はいれかはり。
③否泰。否はふさがり、泰はゆきわたり。
④品藻。品は物の高下の次第をわけること、藻は物のあや、いろどりのあること。
⑤周流。立春から立春に至るまで一年まはりて、本へもどること、周は水の流るる様にし、ばらくも止らず。
⑥餃。餃とかく、一字にて、めした人にくはす事。
⑦分歲。除夜に先祖を祭つて、長幼祝盃をあげてうたふを云ふ。
⑧香林。香林澄遠禪師、雲門偈に嗣ぐ。
⑨衲衣。僧侶の一大事はなにぞと、衲は衣なり。
⑩壺中。後漢の費長房傳に出づる故事。

進んで云く、「記得す、僧 鏡清に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也たなしや。清云く、有り。僧云く、如何なるか是れ新年頭の佛法。清云く、

元正 啓祚、萬物咸く新なり、意、邪裏に在る。師云く、「明に機道を修し、暗に陳倉を度る。進んで云く、僧又 明教に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也たなしや。教云く、無し。僧云く、年年是れ好年、日日是れ好日、甚麼に因つて卻つて無き。教云く、「張公酒を喫すれば李公醉ふ、又作麼生。師云く、「羊頭を懸けて狗肉を賣る。進んで云く、鏡清は有と道ふ、明教は甚としてか無と道ふ。師云く、「江南地暖かに、塞北天寒し。進んで云く、「學人即今和尚に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也た無しや。師云く、「舊年會て答へ了れり。進んで云

- ① 洞口。幽邃也、おくふかきたに。
- ② 歳節。歳旦、正月の一日。
- ③ 曆。支那では黄帝がはじめて曆をつくる。
- ④ 以寅爲正。北斗の星の柄の寅の方へさす月を歳の首の月とする。
- ⑤ 長。うしとら、東北。
- ⑥ 四塞。九州の外の夷狄なり。
- ⑦ 狼烟。狼の糞煙が直に上る、のろしに用ふ。
- ⑧ 鏡清。道徳禪師、雪峰存に嗣ぐ。
- ⑨ 元正。皇帝群臣の朝賀を受く。啓祚。ものの口をあけること、祚は福也、祿也。
- ⑩ 明修機道。明はおもむきなり、機道は詭道なり、手をかへ品をかへ、しれぬやうなことをする。
- ⑪ 暗度。人しれずとほる、二つともに韓信の計略なり。
- ⑫ 明教。師寛明教禪師、靈門徑に嗣ぐ。
- ⑬ 張公李公。支那の姓は張・李が最も多し、人を呼ぶに張三李四といふ、日本でなら源平藤橘などじや。
- ⑭ 懸羊頭。看板によいものを見せて、實はわるいものをうる。
- ⑮ 祇對。つつしみこたへる、本録紙に作るはあやまり。
- ⑯ 二大老。鏡清・明教。
- ⑰ 彭八刺札。鼓の聲なり、杖鼓を打つ勢なり、三才圖會に出づ。
- ⑱ 容裕。裕は寛也、祐に作るべし。
- ⑲ 君子。君子は瑣細なることに目はかけぬ。
- ⑳ 一著。一步を譲つての意、放過はほつておく、放任なり。
- ㉑ 元宵。正月十五日を上元・元宵・元夕といふ。
- ㉒ 有照有用。臨濟錄にあり、照

く、「恁麼の 祇對、二大老と相去ること多少ぞ。師云く、「傍人の度量するに一任す。進んで云く、「上來一一指示分明、向上の一句、又作麼生。師云く、「彭八刺札。進んで云く、「時に應じて 裕を容る、慶宜しからずといふことなし。師云く、「君子は介視せず。僧禮拜。師乃ち主丈を拈じて云く、「天一を得て以て清く、地一を得て以て寧く、君王一を得て以て國を安んじ民を撫す。歲月一を得て以て舊を送り新を迎ふ。衲僧一を得る時、又且つ如何。主丈を靠けて云く、「止みね止みね、一著を放過すれば、第二に落在す。」

元宵、上堂。照あり用あり、牛頭没し、馬頭回る。或は明或は暗、雪中の粉、墨中の煤、龍山箇の閑言語を吐けば、燈籠聽き得て笑ひ腮に滿つ。笑つて三更に到れども人の會する勿し。徐々として壁に 沿つて天台に上る。

- ① 是事物の觸覺、用は認識直覺の鋭敏なこと。
- ② 牛頭。馬頭。華嚴經の意に出づることばなり、唐宋時代には流行語で、日本でならば太郎次郎とか赤鬼青鬼とか云ふやうなもの、この語は日本でならば、爺は山へ柴蒞に、婆は川へ洗濯にといふ位なり。
- ③ 粉。胡粉、おしろい。
- ④ 沿。つたふて。
- ⑤ 因雪謝。因はゆゑと譯す、どだいにする意、雪のふるをどだいにして。謝は冬制があいて兩班交代する常格なり、今はこの四人斗り退職とみえたり、夏中の功勞に對するあいさつの上堂。
- ⑥ 首座。この四役は禪宗の役僧の重なるもの。
- ⑦ 維那。此には悅衆と云ふ、梵唄を掌る役なり。
- ⑧ 典座。大衆の齋粥を掌る役なり。

興化に嗣ぎ、^①瀉山 大智に參す。

佛涅槃、上堂。僧問ふ、^②娑羅樹下、^③跋

提河邊、則公案あり、年年今朝現成 呈露す。

學人 上來 請ふ師 剖判したまへ。師云く、

「我今再三せず。進んで云く、口を開けば則ち

喪し、口を閉れば則ち背く、如何んが 通じ

て犯さざらん。師云く、^④一把の柳絲收むるこ

と得ず、風に和して搭在す玉欄干。進んで云く、

人間 月半に天上月圓かなり、與廢の時節、喚

んで 乃洄を唱ふると作すが則ち是、喚んで

法輪を轉すと作すが則ち是。師云く、^⑤一字畫

を著けず、八字兩ノ無し。進んで云く、^⑥胸を

摩し衆に告げて、^⑦行計忽忽に、^⑧櫛に ^⑨雙趺

を示す、甚の 死急をか著たる。師云く、^⑩喪

車後に藥袋を懸く。進んで云く、^⑪若し我れ滅度

①通。開閉共に通じて。

②一把柳絲。類說節用の中に、

徐中雅が宮詞に「内人曉起怯

春寒、輕揚珠簾、看牡丹、一

把柳……欄干。」大觀珠曰く、

此の二句は不犯底の涅槃の大

曼荼羅なりと。

③月半。十五日。

④乃洄。乃は泥に作るべし、泥

洄。泥曰。涅槃、この三名前後

異出なり、楚夏音同じからず、

涅槃と云ふが正なり。

⑤轉法輪。此の法を轉じて他心

に度入し、彼なして得悟せし

めて、六十二見を破するを云

ふ。

⑥一字。珠曰く、本來無物、豈

に涅槃法輪に涉らんや。

⑦摩胸。世尊が涅槃會上に胸を

摩して、衆に告げての給ふの

遺勅。

⑧行計。たびたびかぜはしい。

⑨櫛。そののひつき。

⑩雙趺。大迦葉が至るとき、兩

の足を出して示し給ふ。

⑪死急。きつう、せはしない、

とんだことができたぞ。

⑫喪車後。死後藥の穿鑿は役に

はたたぬ。

⑬折合。なれあひ、つげめをあ

はすなり。はじめとしまひと

をつげめをあはす。

⑭作賊愼關。賊となる人は自家

の關防をつしむこと常人に

過ぎたり。

⑮死屍。涅槃脱體、全身。

⑯蓋卻。なぜに見えぬやう蓋を

してしまはぬぞ。

⑰五天。南北東西とせとなり、

天然は印度なり、唐には月と

すと謂はゞ、我が弟子に非ず、若し我れ滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ず、畢竟作廢生か 折合し去らん。師云く、^①賊と作つて關を愼しむ。進んで云く、^②與廢なるときは則ち只箇の 死屍著くる處なし、今に至つて紅爛す百花叢。師云く、^③人天衆前何んぞ 蓋卻せざる。進んで云く、^④五天霧慘み、雙樹煙愁ふ。人天當日 盡く悲號す、甚に因つて 波旬舞袖長き。師云く、^⑤船上に 散工なし。進んで云く、^⑥涅槃後 大人の相ありと、如何なるか是れ大人の相。師云く、^⑦尺二の眉毛領下に生ず。進んで云く、^⑧上來一一指示、甚れ奈んせん、釋迦老子身を藏すに路なきことを。師云く、^⑨坑に臨んで人を推さず。進んで云く、^⑩三尺と一丈六と且つ同じく手を携へて歸る。師云く、^⑪春色高下なし花枝自ら短長。僧禮拜。乃ち云く、^⑫二千年前萬化千變、二千年後 乞ふ再面なし。好箇太平の時節、波旬卻つて一雙眼を具せんや。拂を以て床を撃つて、下座。

①雙趺。大迦葉が至るとき、兩の足を出して示し給ふ。
②死急。きつう、せはしない、とんだことができたぞ。
③喪車後。死後藥の穿鑿は役にたたぬ。
④折合。なれあひ、つげめをあはすなり。はじめとしまひとをつげめをあはす。
⑤作賊愼關。賊となる人は自家の關防をつしむこと常人に過ぎたり。
⑥死屍。涅槃脱體、全身。
⑦蓋卻。なぜに見えぬやう蓋をしてしまはぬぞ。
⑧五天。南北東西とせとなり、天然は印度なり、唐には月と

上堂。花柳豔を呈し、燕鶯聲を鬪はしむ。東參西扣、^①太無厭生。主丈を卓して云く、^②自らはれ歸せず、歸は便ち得てん五湖の風月、誰ありてか争はん。」

①太無厭生。しゆぢやう
②大人相。巍々堂々、煒々煌々。

上堂。徳山の棒、臨濟の喝、雲門の一字關、
洞山の五位訣、古人各、略略を擅にす。
殺活擒縱、謂つべし。水銀地に墜つと。良久
して云く、「三十六路走るには如かず。」

四月八、上堂。瞿曇會て生せず、甚に因つて
か今日を賞す。①毘藍園裏、一犬虚を吠ゆれば、
西天此土、千、猿實を、唯く。②韶陽徒に意氣
を張り、③薬山錯を將て錯に就く。龍山今日力
を盡し、④格を變じ、⑤途を通じ去らん。主丈を
卓して、下座。

結夏、小參。僧問ふ、「荷錢縁を鑄、梅彈
金を垂る。⑥時節因縁、願はくは提唱を聞かん。」
師云く、「早く上座に答へ了らる。」進んで云く、
「時節既に到れば、其の理自ら彰はる、如何なる
か是れ其の理。」師云く、「開市裏に、磔壇を懸

ぐ。進んで云く、「佛性の義又何ん。」師云く、「賣扇の老婆手日を遮る。」
進んで云く、「與麼なるときは則ち、鏡は金殿の燭を分ち、山は月樓の鐘に
答ふ。」師云く、「須らく知るべし、三島の外、別に一乾坤あることを。」進
んで云く、「九旬の禁足魚網に遊び、物外の安身鳥籠に入る、此の二途を
去けて、如何が是れ衲僧行履の處。」師云く、「虚空に馬を走らしめ、陸地に
船をやる。」進んで云く、「觀面全く彰はる解脱門、一踏牢關、百雜碎。」
師云く、「怪力亂神。」進んで云く、「記得す、龐居士云く、「十方同聚會、
箇々學無爲、此は是れ、選佛場、心空、及第して歸る」と。意那裏に在る。」
師云く、「紫羅帳裏に眞珠を撒す。」進んで云く、「心は工伎兒の如く、
意は和伎者の如し。如何んが無爲を學せん。」師云く、「火を覚めては煙に
和して得、泉を擔つては、月を帯びて歸る。」進んで云く、「此れは是れ選佛
場、那箇か是れ及第底の心。」師云く、「送口に道著す。」進んで云く、「上來
已に、指歸を蒙る、向上宗、乘の事如何。」師云く、「雞頭の艸鞋。」僧禮拜。
乃ち云く、「大圓覺を以て我が、伽藍と爲す、結も也た我に由り、解も
也た我に由る、結するるときんば則ち遍界盡く結す、若しくは凡若しくは

- ①三尺と一丈六と。如來は長に非ず、如來は短に非ず。
- ②萬化千變。如來種々に身を現じて濟度し給ふ、變じかゝるを變と云ふ、變じきりたるを萬化千變と云ふ。
- ③乞無再面。願ふても、またと再びお目にかゝられぬ。
- ④太無厭生。あきがない、あまりよくがふい。
- ⑤自是。唐の崔塗が詩。
- ⑥一字關。雲門の極意。
- ⑦五位。洞山の五位。
- ⑧訣。秘術。
- ⑨韶略。兵書より時事。
- ⑩水銀。安排造作に渉らず。
- ⑪三十六路。三十六計と同じく、にぐるにします。
- ⑫毘藍園。毘藍は風の名なり、義に非ず、園は藍毘と名づく、舍衛國王の御苑也。
- ⑬猿。獲に作るべし、惡犬長毛也、むくいぬ。
- ⑭唾。音は崖、いがみあふこと。
- ⑮韶陽。雲門を指す、雲門寺は韶陽府に在り、我れそのかみ若し見れば一棒に打殺して、狗子に與へて喫却せしめ、貴ぶらくは天下太平を圖らんといへしを云ふ。
- ⑯薬山。會元五、薬山の章に遊布衲佛を浴すの因縁。
- ⑰變格。格は常式。
- ⑱通途。とほりみちをあける。
- ⑲結夏。春秋に乞食(頭陀)し、冬夏に坐禪す。
- ⑳梅彈垂金。鳥をいるはじき球、彈は玉也。
- ㉑時節因縁。因縁は内と外と。
- ㉒開市裏。さわがしきまち。
- ㉓磔壇。やきかはらかけたあぐるで、何ぞ打着せざること、を忿へんとなり。
- ㉔賣扇老婆。有。ことは自ら有り、用ふること、はざるなり、自分の手にありながら、えつ

- ①かはぬ、燈臺もとくらしなり。
- ②鏡分。この一聯は表は景物を詠じたるも、裏は家風にかゝり、意は心鏡明かなる故、よく邪正を見わけ、胸中虚なる故、大小根機に隨つて應接するなり、上句は眼見、下句は耳聞。
- ③三島。蓬萊、方丈、瀛洲。また此の外に一世界がある。
- ④此の二途。游網と入籠と。
- ⑤一踏。ひとふみにふみ付けらる。
- ⑥百雜碎。物を散々に打ちくだくの意。
- ⑦怪力亂神。怪はげもの、力は勇士のちからわざ、亂神はすぢみちの立たぬ鬼のこと。
- ⑧龐居士。馬祖に嗣ぐ、襄州の龐蘊、字は道玄、五燈會三に此の頌をのす。
- ⑨選佛場。禪堂なり。
- ⑩及第。卒業の意。

聖、艸木、昆蟲、同時に禁足安居、遂に我が所
制に違く者あることを見ず。解するときは則ち
遍界盡く解す、萬象縱横無礙、更に規繩の
拘はるべきなし。便ち見る 嘉州の大像、艸鞋
を 緊峭して、妙喜世界に 優遊し、 陝府
の鐵牛、横に 柳標を肩つて 樽桑國中を巡歴す
ることを。只結せず解せざる時の如くんば、至
竟、甚の 舉措をか作す。良久して云く、「山前
麥熟するや也た未だしや。」
復擧す、百丈和尚、上堂し訖る毎に、大衆
を召す、大衆首を回らす。丈云く、「是れ什麼
ぞ。」拈じて云く、「君子は言浪りに發せず、發す
れば必ず度に中る。且く道へ、百丈恁麼に道
ふ、「意何くに在る。」 吽吽。枕上三更の夢を
喚び回して、江南萬斛の愁を惹動す。」

紫羅。居士の心底がまつばり
とみえた。
心如工伎兒。楞嚴經第四にあ
り、心は第八識の心。
意如和伎者。意は第六識の意、
歌をつけるもの。
帶月。おびるは、ひとつにい
れて。
蹉口。足踏也、失口と同じ、
口がすべり、いひぞこなひを
するなり。
指歸。指は方角をさし示す、
歸はおちつきどころ。
大圓覺。圓覺經の文。
伽藍。此には衆園といふ。
昆蟲。昆は明也、明蟲とは陽
にして生じ、陰にして蔽る。
規繩。規はぶんまはし、繩は
すみなは。
嘉州大像。佛祖統記四十一に、
沙門海通、嘉州大江の濱に於
て石を鑿り、彌勒の像を爲る、
高さ三百六十丈、覆ふに九層

1111
の闇を以てす、其寺に扁して
後雲といふ。
緊峭。緊は絲を纏ふこと、急
也といふて絲やなはのつよく
よりのかりたること、琴の
緒のしまりたるにもいか、峭
は急也と、二字にて草鞋をつ
よくはく也。
妙喜。維摩の見阿闍佛品にあ
り。
優遊。寛容をいふ、ゆつくら
との意、自得のこと。
陝府。陝府に鐵牛廟あり、牛
頭は河南に、尾は河北に、禹
以て河患を鎮す。
柳標。そくりつ、又はしつり
つ。木の名、杖と爲すべし、
ひねつた木。
舉措。珠曰く、よきはあげ、
あしきはおろく、いかにさばき
たらよいぞ。
吽々。牛鳴也、梵語うんうん、
此に恐怖と云ふ。

次の日上堂。格外的玄機、佇思を勞せず、
甚の 克期取證、茄子瓠子とか 論せん。然も
是くの如くなりと雖も、未だ免れず今日 西天
の様依つて 葫蘆を畫くことを。何が故ぞ
朝四暮三、便ち歡喜す。吽。
上堂。主丈を拈じて云く、「汾陽和尚云く、
『主丈子を識得せば、一生參學の事畢る』と、龍山
は即ち然らず、主丈子を識得せば、更に須らく
行脚し去るべし。」丈を拈けて、下座。
上堂。阿刺々、横該抹、鬼面神頭、二十九
八、善財失脚す百城の南、笑倒す 無邊身
菩薩。主丈を卓す。
半夏上堂。「前四十五日、既に往くをば咎め
ず。後四十五日、道 預め諾せず、正當今日。」
拂子を拈起して云く、「龍山手裏の拂子、 跣跳

1112
喚回。この二句鷓鴣か杜鵑の
二句ならん、珠曰く、箇の一
句、百丈曰は何と云ふ處を
拈出す。
佇思。久立すること。
克期取證。長期百二十日、中
期百日、下期八十日と圓覺經
に出づ、克期は期日を約する
なり。
論。なんのとんちやくしや
う、なんの詮義をしやう。
西天様。天竺の法に。
葫蘆。ものわらひ。方語に空
心猶在。
朝四暮三。莊子齊物篇に出づ、
名は三と四となり、實は通じ
て七の數也、名實未だ併て變
ぜず云云。此れ是非の名異と
雖も理の實は則ち同じきに喩
ふ。
汾陽。善昭禪師、首山念に嗣
ぐ。
阿刺々。阿は助字なり、刺々

は細語不休のこと。言語多く
くり返しくりかへしいふ。ら
つらつは急を言ふ、古來あら
恐しやと云ふとあるはまちが
ひなり、日本のざわざわ又は
らばら。
善財。童子。文殊善財をして
南方に往いて五十三の善知識
に參ぜしめ、一百十城を歴る。
無邊身。涅槃經に出づ。
半夏。六月一日。
跣跳。跣は諸錄みな跣に作る
も、やはり勃の意にして、下
にあるものがすつとおきて、
物をおしやることなり。
三十三天。梵には恒啾耶、恒
啾奢、こゝに三十三と云ふ。
歡喜園。三十三天王その中に
入りて、已に歡喜善歡喜の二
石の上に坐し、心歡喜を受く、
また極樂を受く、故に歡喜園
と爲すこと、意、法苑珠林に
出づ。

して 三十三天に登り、^①歡喜園裏に在つて、^②帝釋に對して深妙法を説き、諸天圍繞、默然として肅聽す。且く道へ箇の什麼の法をか説く、今朝是れ六月朔。^③

^④上堂。火雲太虚を蒸す、太虚熱からず。^⑤薰風太虚を拂ふ、太虚涼しからず。若し能く恁麼に^⑥領略せば、妨げず縁に應じて^⑦倘伴することを。然も是くの如くなりとも雖も、更に須らく向上の行履あることを知つて始めて得べし。噫、佛錢を偷んで佛香を買ふ。

^⑧上堂。清商、候を告げ、^⑨法歳將に周らんとす。敢て問ふ、諸仁者、所作 已に辨するや不や。若し也た^⑩未だ辨得せずんば、龍山須らく諸人の背後に向つて展拜すべし。何んぞ也、^⑪手臂終に外に向つて曲らず。^⑫解夏小參。僧問ふ、^⑬布袋頭開けて天地寛し、^⑭金風葉を翻して階前に墜つ。正與麼の時、請ふ師提唱。師云く、「太無厭生。」進んで云く、「恁麼なるときんば、則ち溪聲長く耳に在り、山色門を離れず。」師云く、「飽病醫し難し。」進んで云く、「翠巖夏末に、衆に示して云く、「一夏以來、兄弟の爲に 説話す、看よ翠巖が 眉毛 在り麼。」是れ何んの心行ぞ。師云

- ①帝釋。忉利天主。
- ②上堂。六月望。
- ③薰風。東南の風、なつのかぜ。
- ④領略。うけとる、のみこむ、がてんする、心得る、領。取なり、わがものにする也、略し、徘徊なり、たちもとほる。
- ⑤偷佛錢云云。方語に一得一失。
- ⑥上堂。七月旦。商、秋氣和するときは商聲とものふ。
- ⑦法歳。十五日、解制の日。
- ⑧已辨。無學位の人也。
- ⑨未辨。内外凡及び前三果也。
- ⑩手臂云云。方語に理合如是。
- ⑪解夏。七月十五日、自恣の日(盆の十五日)。
- ⑫布袋。布袋の頭は口なり。
- ⑬金風。あきのかぜ。
- ⑭飽病。はらのふくれた、しにくい、れうち。
- ⑮翠巖。翠巖令參禪師、雪峰在に嗣ぐ。

く、「三更 孟津を過ぐ。」進んで云く、「後來 保福云く、「賊と作る人心 虚る」と、意那裏に在る。師云く、「人を 品藻することは即ち得たり。」進んで云く、「長慶云く、「生せり。」如何んが領略せん。師云く、「葫蘆棚上に猪頭を掛く。」進んで云く、「雲門云く、「關。」又作麼生。」師云く、「崑崙鐵袴を著く。」進んで云く、「四大老、與麼の敲唱還つて出身の分ありや也た無や。師云く、「艸本天下同じ。」進んで云く、「謂つべし 卞氏場中に巨璞多く、孟嘗門下高賓足れりと。師云く、「從貧入レ富易 從富入レ貧難。」進んで云く、「龍山今夏還つて人の爲に眉毛を惜しまざる底ありや。師云く、「青山足を擧げず、日下燈を挑げず。」進んで云く、「未審古人とは是れ一耶是れ二耶。師云く、「來つて我を

- ①説話。開會の辭じや、第二義門に下りて、佛がどうの、祖師がどうのと。
- ②眉毛。まゆげ。佛法をあまりに、俗向きに説くと、その罰にて眉もひげも、おちてしまふと云ふ故事に基きいふ。
- ③在麼。有麼ではない、まだついでゐるかどうかと云ふの意なり、日本人ならば頭はまだはげて居ないかどうかと云ふくらゐなり。
- ④孟津。盟津と同じ、書經の周書にあり。
- ⑤保福。雪峰に嗣ぐ、翠岩を賊と見てゐる。
- ⑥作賊人心虚。泥坊をやるものに正直者はない。
- ⑦心虚。こころいつはるとよましてあれども、虚は怯也、おくびやうのことなり、ものごとくに臆するなり、心虚すと、これが正當ならん。

- ⑧品藻。しなまだめするなり。
- ⑨長慶。長慶慧稜禪師、雪峰に嗣ぐ。
- ⑩生也。のびてゐるぞ、まだついでゐる居らぬもない。
- ⑪關。唐宋時代の俗語である、この語は警戒を意味するに使用してゐる、そらはまるぞ、そらあぶないよ、關所じやぞ、と云ふくらゐのもの。
- ⑫四大老。翠、保、長、雲。
- ⑬卞本。本は木の誤り歟。
- ⑭卞氏。卞和也、楚人、玉璞を楚山の中に得て之を厲王に獻す、王之を玉人に相せしむ、玉人曰く、石なりと、それより武王にも獻じたるも、同じく石也として卞氏を誑かして、遂にその右足を刎り、文王位に即く、遂に和氏の璧と曰ふに至るの故事あり。悲しいかな、寶玉にして貞士にして云云。

掩采すること莫れ。進んで云く、「上來一々指示を蒙る、曲終へて人見えす、江上數峯青し。師云く、「切に別人に向つて擧ぐることを莫れ。僧禮拜。師乃ち拄杖を拈じて云く、「この木上座、今夏者裏に在り、體上に寸絲を掛けず、口中に一粒を費さず、肯へて衆に隨つて禁足せず、亦外に向つて遊山せず、西院兩錯の商量を鼻笑し、文殊三處の度夏を平欺す。結も也た管せず、解も也た知らず、只麼に黑糞地、九句の光陰を過了。且く道へ他を賞するが便ち是、他を罰するが便ち是、諸人若し斷ずること能はずんば、直に木上座をして自ら斷り去らしめん。」主丈を卓す。

- ① 孟嘗。君名は文、姓は田氏、食客數千人、貴賤となく等一す。
- ② 掩采。人の威光を減する事、色采をかくす、今のことばでいへば。
- ③ 曲終人不見。唐才子傳の錢起傳に見ゆ。
- ④ 西院。西院(汝州)思明禪師、寶壽沼に嗣ぐ、臨濟玄三世なり。
- ⑤ 兩錯。門人と問答故事あり、傳燈十二の傳にあり。
- ⑥ 鼻笑。せうらわらひのことか、無準錄上にみゆ。
- ⑦ 三處度夏。文殊一月は波斯匿王の后宮に、一月は童子の學堂に住し、また一月は諸の姪女の舎に住し云々と、大方廣寶篋經に出づ。
- ⑧ 平欺。みこなし、あなどる。
- ⑨ 黑糞。拄杖を見よ、こくりんしゆんぢじや、糞は隣と同じ。
- ⑩ 登科。支那では人を試験する
- ⑪ 石礫也、破はしわ。すまじい、手もつけられぬ。
- ⑫ 決斷なり。
- ⑬ 無寸草。いかなる寸草か、具眼のものは須らく自知せよ。
- ⑭ 作法。作ははじめてこしらへる也、左傳昭公四年に出づ。
- ⑮ 涼。薄也、かるしと見るべし。
- ⑯ 貪。あつし也、欲ふかきこと。
- ⑰ 弊。政道の年代久しくなりて、失態の出来ること、しくせのわるいこと。
- ⑱ 將。おつつけ、やがて。
- ⑲ 胡孫。さる。
- ⑳ 只可自怡悅。陶弘景が詩、事文類前集に出づ。怡はうれしうて、のんびりする事、悦はうれしうて、すくこと。
- ㉑ 栗棘蓬。栗はいがあり、棘はいばら、蓬はよもぎ、俱に難路なり。
- ㉒ 欄邊。牛の圍を欄といふ。
- ㉓ 登科。支那では人を試験する

去るべし。石霜聞き得て云く、「門を出づれば便ちこれ艸。」拈じて云く、「法を涼きに作る、其の弊猶は貪し。法を貪きに作る、弊將に若何がせん。」

解夏上堂。僧問ふ、「布袋を解開して、七縱八横、無尾の胡孫、甚の快活がある。」師云く、「只自ら怡悦すべし。持して君に送るに堪へず。」進んで云く、「栗棘蓬を吞まず、箇の什麼をか作す。」師云く、「鐵牛喫せず、欄邊の艸。」進んで云く、「點胸點肋。」師云く、「登科は他の登科に任す、拔萃は佗の拔萃に任す。」進んで云く、「極則の事又如何ん。」師云く、「十字街頭尺八を吹く。」進んで云く、「人天交接如何んが相見せん。」師云く、「兩眼兩眼に對す。」進んで云く、「與麼なるとさんば、則ち愁思は蟬外に偏に覺え、歸心は更に鴈邊に向つて多し。」師云く、「事一向なし。」進んで云く、「者裏若し性燥の漢あつて、直に山を下り去らば、和尚還つて佗を肯はんや也た無や。」師云く、「腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。」進んで云く、「忽ち人ありて、夏何れの

- ① 登科と云ふ。
- ② 拔萃。撰拔を云ふ。
- ③ 十字街頭。方語に云ふ、千人萬人聞く云云。
- ④ 愁思。今は灰にて、心もちと譯す。
- ⑤ 偏。とりわけ、べつして。
- ⑥ 一向。一偏と同じ。
- ⑦ 性燥。氣のいらち。
- ⑧ 鴈後見。つむりのうしろから、腮はほほのは、あぎと。
- ⑨ 蟬外。蟬は腹に作るべし、年臘をいふ、氷は潔白なれば年臘の高行者。
- ⑩ 鐵彈子。大底は大小底は、て
- ⑪ 極則の事又如何ん。師云く、「十字街頭
- ⑫ 兩眼兩眼に對す。進んで云く、「與
- ⑬ 事一向なし。師云く、「者裏若し性燥の漢あつて、直に山を下り去らば、和尚還つて佗を肯はんや也た無や。」師云く、「腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。」進んで云く、「忽ち人ありて、夏何れの
- ⑭ 向なし。進んで云く、「者裏若し性燥の漢あつて、直に山を下り去らば、和尚還つて佗を肯はんや也た無や。」師云く、「腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。」進んで云く、「忽ち人ありて、夏何れの
- ⑮ 腦後に腮を見れば與に往來すること莫れ。進んで云く、「忽ち人ありて、夏何れの

處に在ると問はゞ。未審如何んが祇對せん。師云く、「私事官酬を得ず。僧禮拜。師乃ち云く、「蠟人氷を消散し、鐵彈子を擊開す。兩顆の鼠糞變じて金と成り、翠巖眉毛長きこと尺二、囉囉哩、秋風誰か謂ふ西従り起ると。拂を撃つて、下座。退院上堂。一片の間雲、變態多し、龍に従つて暫く此の山頭に寄る。釘釘懸挂、沒交渉、又秋風を逐ふて別州を過ぐ。拂子を擲下して、下座。

相州鎌倉縣金寶山 淨智禪寺語錄

侍者曇林編

師、嘉曆二年二月十二日入院。佛殿。三人行の時、必ず一師を得、三佛並坐して、何の所爲かある、休みね休みね、六耳謀を同じうせず。拈帖、傳箭令、暗號子、喚んで、靈山の囑と作す、都べて是れ相似す、維那に付與して、且く例を攀づ。

①淨智寺。鎌倉五山の一、開山は大休正念禪師。
②嘉曆二年。北條高時の請による、後醍醐帝嘉曆二年卯。
③三人。論語の述而出づ、この句に本尊協立の心を暗に含めり。

法座を指す。者の一座子、建立を假らず、耐なり。須彌燈王幾多の階級を安著するに、新寶山一時に坐斷し去らん。便ち登座。香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に燕向して恭しく爲に

今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる、陛下、恭しく願はくは、
①聖謨 恢恢、寶祚永く、玄扈の高躅を踐み、淳化 蕩々、世樞咸く、丹陵の古風に復せんことを。次に香を拈じて云く、「此の香は征夷大將軍の爲に、祿算を資陪し奉る。伏して願はくは、營門、刁斗を撃つことなし。三軍戈を止め、官路烽烟を見ず、四塞、壁を銜む。又香を拈じて云く、「此の香は、相州太守都元帥の爲にし奉る。伏して願はくは、壽基福基、

- ①三佛。淨智寺佛殿には釋迦・彌勒・彌陀の三像を安す。
- ②六耳同謀。六耳は三人なれば三人は則ち謀成就せざるを云ふ。
- ③拈帖。公帖をさしげて、すなはち幕府よりの請狀なり。
- ④傳箭令。故章あり、箭を傳へて號となし、令を出す、將軍家の帖、すなはち請狀ゆゑ、此の二件に比す。
- ⑤暗號子。かくしあひづ也。
- ⑥靈山囑。世尊の法は國王大臣に付囑するの意。
- ⑦且攀例。おちついたことではなけれども、まあさうでも。
- ⑧耐。こらへられぬ。
- ⑨須彌燈王。維摩經不思議品に、佛身長け八萬四千由旬、師子座の高さ八萬四千由旬。
- ⑩聖謨。謀は謀なり、子孫長久の計。
- ⑪恢恢。大なる志なり、天下後
- ⑫玄扈。唐繞なり、堯の生れしところの地名。
- ⑬祿算。祿は福なり、算は壽也。
- ⑭營門。軍壘を云ふ。
- ⑮刁斗。銅を以て作る、一斗を容る、晝は飯食を炊し、夜は撃て、持し行く鑪器なり。
- ⑯三軍。五師を軍となす、一萬二千五百人、天子は六軍、諸侯は三軍。
- ⑰銜壁。降参するなり、左傳僖公六年に故事が出づ。
- ⑱相州。相模守北條平高時、剃髮して崇鑑と號す。
- ⑲元帥。征討の事を掌るを云ふ、鎌倉將軍家の執權職。
- ⑳壽基。地形。
- ㉑親衛校尉。日本の將監なり、

俱に堅うして 聖明を萬世に佐け、信力智力、兼具つて、正法を無窮に護らんことを。又次に香を拈じて云く、「此の香は、本寺大檀那 親衛校尉大禪定門の爲にし奉る。伏して願はくは命府の運數、芥城を盡して餘りあり。身宮の德儀 藥樹の如くにして、長く茂らんことを。」又香を拈じて云く、「此の香、貞實にして枝葉を絶し、春に逢ふて芬を著けず、只天然些子の氣あり。他の無鼻孔の人の聞かんことを許す。蒸いて以て、前任建長再住本山救謚佛國禪師高峰大和尚に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

座に就いて、問答罷んで乃ち云く、「大いなる哉 箇の事、天を覆ひ地を載す、諸相を勦絶して、而も 勦絶の跡を留めず、萬靈を字育して、字育の功を宰らす。拈起する也、吒々沙沙、放下する也、綿綿密密、乃佛乃祖、皆悉く他の恩力を承けて、以て 踵を接し 武を躡んで、利濟時を失はず。賢王賢臣、亦是れ他の恩力を承けて、以て法を護し邦を安んじて、今に至るまで間斷なし。直に得たり盡大地 卉木叢林、人畜艸芥箇箇他の恩力を承けて、今日金寶山裏に聚會して、共に 萬年歡を唱ふ。諸仁

北條師時が子將監平の宗政也、淨智寺の開基。
①運數。しだいにまはりてゆく數也。
②芥城。大智度論三十八に出づ、劫は盡きず、芥子は盡きるとのたとへて、長壽の意味なり。
③德儀。儀は容なり、ふりといふこと。
④藥樹。義楚六帖十八に出づ、又香婆の故事もあり、大樹のたとへを云ふ。
⑤貞實。法華方便品に出づ、貞は定なり、精定にして動惑せざる也。
⑥箇事。禪宗の一大事。
⑦勦絶。剃也、絶也。
⑧字育。字はやしなひ、育はそだてる、乳也、長也。
⑨吒々沙々。はらりはらりと髪のみだれぬ如く、又したづみしてくらふゆゑ、又米沙等の物を降下するひゞき也。

者、還つて分明に聽取することを得るや也た無や。倘し或は未だ然らずんば、更に須らく耳を側つべし。」主丈を卓すること一下。

復舉す、世尊一日陞座、文殊 白槌して云く、「諦觀法王法、法王法如是」と。拈じて云く、「釋迦老子、等間に 無孔笛を吹く、文殊、護に 毘拍版を把つて 擊節す。且く道へ畢竟什麼の曲調をか成し得たる。噫、鄭衛の門には須らく耳を掩ふべし。」
佛涅槃、上堂。僧問ふ、「胸を摩し衆に告げて、強ひて癡獸を誑す。大聖本出沒なし、什麼の處にか去來あらん。」答へて云く、「須らく知るべし、三代の禮樂、乃ち是れ 五霸の兵器なることを。」進んで云く、「謂つべし 平地に骨堆を起すと。」答へて云く、「彩氣夜常に動き、精

①綿々密密。まわたの絲、一筋のほそくながく間のきれぬこと。
②接踵。前の人のきびすへ後の人の足がつき合ふなり、あとからだんだん。
③躡武。前の人が一足向へよると、後の人がある足跡を半分ふまへる。
④卉木。草木通じて卉と云ふ、又くさ百草の總名。
⑤萬年歡。東山外集上に、「霜芥滿園禾又熟、胡家曲調萬年歡。」
⑥世尊。佛陀の十號の一。
⑦白槌。槌といふて六角にしたる木の長さ二尺ばかりのたゞくもの、禪家に用ふ、之をならしてこの諦觀法王法の語となへて、出世開堂式の證明をなす。
⑧無孔笛。無孔笛と毘拍版も、どちらも無音のもの、上々根の者にあらざればならせぬ。一曲風前格調高しで、如來の説法にたとへる。
⑨毘拍版。毘は牛毛をとりあつめて板をつくる、拍版は日本のよつだけ也、こゑなきを云ふ。
⑩擊節。「さやくせつ」とよむべし、奏樂の節に應じて樂器をならすより、うけこたへのことにつかふ。
⑪鄭衛。詩經集註評に、鄭衛の樂はみな淫聲となすとあり、みな男が女を悦ばすは衛の樂なり、女が男を悦ばすは鄭の樂なり。
⑫三代。夏、殷、周。
⑬五霸。齊の桓、晋の文、秦の穆、宋の襄、楚の莊也、孟子の告子に出づる注をみよ。周の中ほどより亂世になり、初め二百餘年を春秋の代と云ひ、次の二百餘年を戰國と云

靈日逢ふこと少なり。進んで云く、「二千餘年の 屈、和尚還つて雪め得ん
 麼。」答へて云く、「野火焼けども盡きず、春風吹いて又生ず。」進んで云く、
 「今日は即ち有、明日は即ち無、畢竟して如何んが定當せん。」答へて云
 く、「他の閒事を管して 作麼。」進んで云く、「直に得たり諸天悲泣し、波旬
 鼓舞することぞ。」答へて云く、「一家事あれば、百家忙し。」進んで云く、
 「春色高下なし、花枝自ら短長。」答へて云く、「脚を伸ぶることは元脚を縮
 むる裏に在り。」僧禮拜し下る、乃ち云く、「若し吾れ滅度すと謂はば、是れ
 吾が弟子にあらず、人の知らざらんことを欲せば、如かじ爲ざらんには。若
 し滅度せずと謂はば、亦吾が弟子に非ず、頭を改め面を換へ、東倒西播、
 大衆、釋迦老子舌頭の落處を識らんと要する麼、一たび 潘郎に事卻して
 従り後、也た解す人前に羞を識らざることぞ。」

三月 旦上堂。桃 萼紅を呈し、李花白を獻す。春光敢て人を拒まず、
 只是れ人の領略するなし。良久して云く、「積代の 簪纓、暫時の 落
 魄。」

受昭二首座を謝する上堂。薄福の住山、肚皮 箆を欠く。舊知の訪

ひ來ることを引き得て、彼此同じく氷雪を嚼む。未だ 海月山雲を話せず、
 先づ 百醜千拙を闘はしむ。甚に因つてか此くの如くなる、多子塔前に
 會て 落節す。

四月 旦、直歳を謝する上堂。汾陽、慈明に囑して云く、「修造は自ら人
 あり、且く佛法の與めに主と爲れ。」拈じて云く、「大小の汾陽、話兩 概と
 成る、金峯門下修造已に人を得たり、別に佛法の説くべきなし。」大衆を召
 して云く、「此に於て薦得せば、僧堂 厨庫に對し、佛殿 山門に對す。
 若し也た未だ薦せずんば、只連夜の雨に因つて、又一年の春を過ぐ。」

佛誕生、上堂。瞿曇降生、大驚小怪、自ら淨裸裸地に誇る。脱體寸
 絲掛けず、金峯普請して陀を洗滌す。只要す赤肉も也た存せず、直に他の
 骨節毛竅心肝 五臟、一時に換却せんを待つて、方に許す大口を開いて、
 天上天下、唯我獨尊と道ふことを。然も是くの如しと雖も、明眼に看來れ
 ば、浣盆 浣盆。喝一喝。

結夏小參。微塵刹界を統べて、以て我が伽藍と爲す。無邊の含靈を領じ
 て、以て我が大衆と爲す。十世古今を括つて、刻期の限を立て、一切の

ふ、春秋の代にあたりて天子
 の威光をあがめ、世を靜謐に
 したる人五人あり、之を五霸
 と云ふ。
 ④平地起骨堆。大惠武庫の慈照
 聽禪師の章に出づ。
 ⑤屈。はち也、無質、又はむね
 んとも譯す、かむの意。
 ⑥野火。白氏文集に出づ。
 ⑦今日即有。涅槃經後分に出づ。
 ⑧作麼。さあどうじゃ也、なに
 にかせんと訓す。
 ⑨潘郎。晋書に、潘岳名は安仁、
 姿儀美なり、小名を檀奴と云
 ひたるゆゑ檀郎とも云ふ、妻
 から夫をよんで郎と云ふ。
 ⑩萼。花の萼也。
 ⑪積代。先祖より代々。
 ⑫簪纓。さんばかんむりをとめ
 るかんざし、簪、二字にて官
 人のことを云ふ。
 ⑬落魄。ふしあはせ、おちぶれ。
 ⑭受昭。二人とも夢窓と同參に

して、佛國國師の法嗣也、南
 禪の天庵妙受、萬壽の果山宗
 昭。
 ①肚皮。古人は三寸ちの竹のれ
 そを帯にして枯淡なる住山で
 あつたに、我はそのれそ一す
 ぢもないといふ。
 ②缺篋。篋は竹の皮也、をけの
 わ。
 ③海月山雲。これは非常の美句
 である、宇宙の眞善美を云ふ
 と見ておいてよい。
 ④百醜千拙。醜はみともない。
 拙はぶてうほふ。
 ⑤多子塔前。世尊、摩訶迦葉に
 分座し給ふところ。
 ⑥落節。「らいせつ」とよむべし。
 本を折ふの義、をちどなり、
 三人とも佛國國師の法嗣なれ
 ばなり。
 ⑦直歳。「しつすい」とよむべし。
 禪宗の役僧の名、普請奉行な
 り。

事業を用つて取證の行に蔽つ。直に得たり穢
土淨邦、處々の縁楊馬を繋ぐに堪へたり。六
凡四聖、家家門底長安を透る。結の時、解解
の時、結長期延に非ず。短期促に非ず。金寶
山中、奮を鋤いて種を下す。占波國外に、
梗游萍跡、更に甚麼の禁足不禁足、前安居後
安居とか論せん。忽ち伶俐の漢あり、出來つ
て道はん。我也た別に生涯あり、爾が伽藍に居
せず、爾が衆數に入らず、十世古今一切の事業、
都來我が事に干らず。且く道へ、他什麼の處に
向つてか行履せん。良久して云く、「大海を觀
る者水の爲にし難し。」

①概。杖也、くひぞ。
②厨庫。「づく」とよむべし。く
り、だいでこなり。
③佛殿。禪宗の正殿。
④山門。禪宗の大門、又三門と
もかく。
⑤大驚小怪。水滸傳に出づ、日
本語のげうさん也。
⑥五臟。肝木心火脾土肺腎水。
⑦浣盆。方語に我汝を識得す。
⑧喝一喝。禪宗では馬祖大師に
はじまる、となりつけるので
はない、これはやいみだが、
知つたかとやるのじや。
⑨十世。過去三世、未來三世、
現在三世、三世を一念と爲す
を十世とす。
⑩蔽。蔽は猶當也、掩ふにはあ
らず。
⑪六凡。六道と同じ、地獄、餓
鬼、畜生、修羅、人間、天上。
⑫四聖。聲聞、緣覺、菩薩、佛。
總べてて十界なり。

⑬長短期。百二十日、百日、八
十日。
⑭畜。あら田なり。
⑮占波國。「ちやんばこ」とよ
むも可なり、南海の南なり、
しかしただ遠方をさすなり、
日本なら、えぞ松前じや。
⑯梗。荒也。
⑰萍。水草也、うきぐさ。
⑱伶俐。靈利に作るべし。さか
しきなり。
⑲大海。孟子の盡心篇に出づ。
⑳萬法。宇宙の萬物を總稱して
云ふ、有形無形ともに包含す。
㉑布衫。麻布の法衣、又はかた
びら、ひとへうはぎ。
㉒溼紙。うるほふかみ。
㉓大虫。虎、又は於菟、又は李
耳。
㉔翻筋斗。とんぼがへり、もん
どり、木を斫る具なり。
㉕迷魂寨。中陰の人を指す、寨
はとりで、木櫓。

く、「者の僧、溼紙を將つて大蟲を裏まんと要す、趙州、針鋒頭上に筋
斗を翻す。奇なることは則ち太だ奇なり、只是れ歸處未だ分明ならず、人を
して轉た迷魂寨に入らしむ。今夜人ありて、萬法一に歸す、一何れの處
に歸すと問はゞ、只他に向つて道はん、半は露柱に入り、半は燈籠に上
ると。」

次の日上堂。 ① 東山の家宴、美盡し善盡す。 ② 西院の商量、赤心片々、金
寶今日結夏、敢て諸人を管顧せず、亦兩錯を論せず、何が故ぞ、重
賞の下には必ず勇夫あり。

③ 秉拂を謝する上堂。 ④ 一喝賓主を分つ底の法門、兩堂首座已に説き了れ
り。 ⑤ 虚空裏に向つて、 ⑥ 五字を寫す底の法門は、 ⑦ 書記已に説き了れり。
⑧ 一代藏教も詮注し及ばざる底の法門は、 ⑨ 藏主已に説き了れり。 ⑩ 更に緊
要の一句あり。 ⑪ 佛佛祖祖、 ⑫ 久しく斯要を默す。 ⑬ 我が四頭首也。 ⑭ 各
緘黙す。 ⑮ 金峯久日。 ⑯ 樺來唇、免れず今日鼓を撃つて、諸人の爲に吐露する
ことを。 ⑰ 良久して、下座。

⑱ 上堂。 ⑲ 一二三四五六七、七六五四三二一、幼婦眉を舒べて笑臉開き、

① 露柱。大黒柱といふこと、本
來の面目、大悟の意を表す。
② 東山家宴。會元十九に出づ、
五祖演禪師晩に東山に居り、
上堂結夏の法語あり。
③ 管顧。東山の諸人を管顧せん
が如く、看管は其人と看顧管
束する也。
④ 重賞。三略上に、香餌の下に
必ず懸魚あり、重賞の下に必
ず勇夫あり。
⑤ 秉拂。百丈清規には四節とあ
れども、大方結制は冬至の二
節にあり、西班の前堂、後堂、
書記、東西の藏司まで秉拂す
るなり、此を五頭首と云ふ、
此れも多くは四頭首なり、秉
拂は「ひんぼつ」とよむ。
⑥ 五字。祖師西來意の五字なり、
五祖演録に出づ。
⑦ 書記。禪宗の役僧名なり、文
書を掌る。
⑧ 詮注。詮は具說事理也、事理

① 夜叉膝を屈して眼睛出づ。構得構不得、門に當つて大吉を書す。主丈を卓して、下座。

上堂。塵塵爾、刹刹爾。拂を以て床を撃つて云く、「老鼠床頭を敵む、猫兒正に憨睡。」

半夏上堂。「法歲已に半ばを過ぐ。過去心不可得、解制未だ期に届らず、未來心不可得、正當今日、現在心不可得、三世の心既に不可得。」拂子を豎起して云く、「且く道へ、者箇何れの處

従りか得來る。「良久して云く、「自ら瓶を携へて去つて村酒を買ふ、卻つて衫を着け來つて主人と作る。」

夏中藏主を謝する上堂。擧す、古へ僧あり、經堂の中に在つて坐す。藏主云く、「何如んぞ看經せざる。」僧云く、「字を識らず。」主云く、「何んぞ人に問はざる。」僧 又手して云く、「是れ什麼

の字ぞ。」藏主無語。拈じて云く、「者の僧字を問ふ、將に謂へり藏主の舌頭を坐斷すと、爭奈んせん、烏焉馬と成ることを。藏主無語、者の僧の與めに師と爲るに堪へたり、會す麼。六月清風を賣はゞ人間恐らくは價なけん。」

上堂。主丈を拈じて、卓一下して云く、「休みね休みね、好語説き盡すべからず。」

解夏小參。彌滿清淨、他物を容れず、中に就いて限を立し期を立す。總に是れ魯般が、繩墨、金峰、今夏現前の大衆と與に眉相結び、鼻相柱ふ。全賓是れ主、全主是れ賓、諸公の三昧、金峯知らず、金峯の三昧、諸公知らず。便ち見る。日中一食、人人落得の、盞孟柄なし。夜後一寢、箇々未だ曾て眼を開いて床に尿せず。只麼に騰々として一夏を過了す、畢竟功阿誰にか歸す。拂を撃つて云く、「蠟人跳つて梵天に上り、鐵彈走りて東海を過ぐ。」

復擧す、僧、雲門に問ふ、「初秋夏末、前途忽ち人ありて問ふ、作麼生か對へん。」門云く、「退後退後。」僧云く、「某甲甚麼の過ある。」門云く、

始終、全體をのこさず、いひほどく。注は本文のよくわかるやうにいひほどく。

① 藏主。禪宗の役僧の名なり、經藏を掌る。

② 久歇斯要。法華經藥草喻品に出づ。

③ 頭首。西序を頭首と云ひ、東序を知事と云ふ。

④ 緘黙。口を緘してだまる。樺來唇。かばの木の皮は弓にはるべし、かひほど大きなくちびる、皮のころかとなり。來の字は俗語上のほどの義。斗來大きな、丈來高き等の語多く見ゆ。

⑤ 上堂。端午。⑥ 夜叉。梵語なり、此には能敵鬼といふ、人を敵ふを謂ふなり。

⑦ 爾。此の如くの義にて、このとほり也。

⑧ 三世之心。過去、現在、未來の三世心なり、金剛經に出づ。

⑨ 者箇。珠曰く、不可得の心。⑩ 自携瓶。天厨禁衛上の玉操が詩なり。

⑪ 擧。此の話、禪林類聚頭首門に出づ。

⑫ 又手。たなころをくみあはすこと、右を左の下へ、左を右の上へ拇指をむかへあはせ。

⑬ 烏焉。一字三寫すれば、烏焉馬となる。

⑭ 六月實清風。賣の字、買の字にも作る。

⑮ 好語。大惠武庫に五祖演佛語を戒むるの語。

⑯ 彌滿清淨。圓覺經略疏宗室の序。

⑰ 魯般。肅州燉煌の人、年代未詳、この故事酉陽雜俎に出づ、祈雨に驗ある仙人。

⑱ 繩墨。繩を引き墨を弾く、すみするもの、大工のすゝめつば。

⑲ 日中一食。五燈會元九仰山章に出づ。

⑳ 落得。人々落ちついで。

㉑ 盞孟無柄。依然として、かばらわつら。

㉒ 騰騰。上躍也。

㉓ 初秋夏末。雲門錄に出づ。

㉔ 退。「ついで」とよむべし、さがれさかれ。

㉕ 某甲。凡そ名を知らず、名を言はざるを皆某と曰ふ、甲は甲乙等なり、次第の義也。

㉖ 輕輕。珠曰く、此の二句雲門の機用を述ぶ。

㉗ 躡足。ちよこちよこばしり、せはしくかけまはる、躡は急也。

㉘ 龍門。淮南子脩務訓に出づ、本有水門云云、上り行く上り過ぐることを得るものは、便ち龍と爲す、故に龍門と曰ふ云云。

㉙ 大火西流。火は大火、心星也、六月の昏を以て地の南方に加ふ、七月の昏に至りて則ち下

「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて云く、^①「輕輕 足を躡んで
龍門過ぐ、腥風の地を動し來ることを惹き得たり。」
次の日上堂。^②大火西に流れ、涼颯秋を報ず。九旬の功課、一時に罷
休す。好箇快活の時節、去る底は去り、留る底は留る。然も是くの如くな
りと雖も、金峯肯て點頭せず。何ぞ也、如今馬上に山色を看る、^③牛に
騎つて自由を得るに似かず。

① 功課。しごと、つもり、ほど
② 馬上。馬のしりへに騎つて見
る、面白けれども。
③ 騎牛。それよりのつそりした
牛にのるが、自由ができる。

相州鎌倉縣瑞鹿山 圓覺興聖禪寺語錄

侍者 紹榮編

師、^①元徳元年八月二十日に於て入院。

山門。盡大地是れ圓覺伽藍、且く道へ、門限
什麼の處にか在る。^②彈指一下して云く、「看よ
看よ、宿霧初めて收つて天已に曙。」

① 圓覺。相模國鎌倉山の内、鎌
倉五山の一。
② 紹榮。國師に嗣ぐ、字は枯木、
京師の安國寺に住す。
③ 元徳。後醍醐天皇御宇、元徳

元已巳。
① 彈指。驚覺の義なり、つまは
じき。
② 殿裏底。趙州錄に出づ。泥龍
塑像斗りの意か。

佛殿。殿裏底、他は是れ誰そ、咳。我早く
備を知れり、門に鐘馗を貼す。坐具を展べて
云く、「人天大衆前、且く一頭の低を放す。」
土地堂。法に隆替なく、人に可否なし。
儼然として列坐して什麼をか護す。良久して云
く、「良い哉、土地なることを謬らず。」
祖師堂。祖祖密付、^①天知り地知る。今日
敗缺、咎阿誰にか歸す。
據室。主丈を拈じて云く、「烹佛 煨祖、他
の古徳に還す。便ち是れ、^②渾鋼 能く幾く鐵
かある。新瑞峰聳。」丈を靠けて云く、「幾ど
覆轍に墮つ。」
拈帖。營門の樞機、法城の渠答、半幅全
封、千重百匝、裏許の消息を知らんと要する
麼。凜凜たる威風、六合に生ず。

① 鐘馗。唐開元中、明皇の夢に
大小の二鬼あり、大の方が鍾
馗なり、小なるものを擒へて
之れを殺して食ふ、覺めて後
に吳生に命じて、之を圖せし
むるに始まる。
② 且放一頭低。頭をさげるはず
でなければども、了簡してちよ
つときけてやる。
③ 隆は次第によりなりゆく、替
は廢也。
④ 儼然。貌の莊なること、きつ
として也。
⑤ 其哉。贊美の辭、善にすぐれ
たる意。
⑥ 天知地知。後漢書楊震の傳に
出づ。
⑦ 敗缺。今日に至つて、しそこ
なひ、なちど。
⑧ 烹。鐵を焼いて水へ入れてだ
んだんくづたとること。
⑨ 煨。焼けたる鐵をたたいて、
くづたとると、金扇の鍛が正

字なり。
① 渾鋼。はがれ。
② 能く。此れがそのままむくの
はがれじや、鐵は一つもない。
③ 幾。ほとんど。さんでのこと
で。
④ 覆轍。古人の敗缺のまねな
する。
⑤ 樞機。易の繫辭に、言行は君
子の樞機、かんじんのきじめ
のきかい、極意のこと。
⑥ 渠答。鐵蒺藜。
⑦ 六合。天地東西南北。
⑧ 褒。徳と境と請と次第して書
く。
⑨ 納敗。はいけつする。
⑩ 諸山疏。隣山の住持連名の書
也、五岳入院のときは、南禪
五山十刹の常住連名にて、五
山巡番にて製作する也、勸請
の意を專にするなり。
⑪ 炳然。あきらかなること。
⑫ 東山樹。隣寺どうしの境致な

山門の疏。寝も也た屋裏の話、貶も也た屋裏の話、甚に因つてか此の如くなる。疏を呈起して云く、「謂ふこと莫れ大家 納敗すと。」

諸山の疏。衆口一舌、字義 炳然、諸人還つて會す麼。東山の樹は西山の樹に對し、上澗の泉は下澗の泉に流る。

法座。燈王三萬二千の座。座を指して云く、「盡く是れ此の一座従り出づ。且く道へ、此の座何れの處よりか得來る。」喝一喝。

拈香。此の一瓣の香、爐中に薰向して恭しく

今上皇帝の爲めに、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝嚴す。陛下恭しく願はくは、永く 文明を掲げて、徳化を 宣光の 中興に齊しうし、 葆命を墜すこと毋くして、 覆 壽を 大禹の高躅に竝せたまはんことを。此の香

は征夷大將軍及び文武官僚の爲めに、同じく祿算を増し奉る。伏して願はくは、一人の 簡在に膺り、四海の 具瞻に副はん、益輔佐の功を懋め、

驟安撫の徳を布かんことを。此の香は、本寺大檀那の爲めに、祿算を資陪し奉る。伏して願はくは壽山、百億 須彌の高きよりも高く、福海、十重

香水の廣きよりも廣く、 權澤長く華夷に覃んで、 皇極を綏んじ、

誠明普く、 緇白に被らしめて、以て法門を耀さんことを。

此の香、久しく窮谷に在つて、之を埋めて腐ちず、屢々人前に向つて之を焼けども燼せず。今復た拈出して、前住巨福名山建長興國禪寺

救諭佛國禪師高峰大和尚に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。

遂に座に就き、問答罷んで、乃ち云く、「二六時中、四威儀の内、新羅夜半十日竝び照す、之を名づけて 大光明藏三昧と爲す。二千年前、

薄伽世尊、一時此の三昧に入りて、一切の諸佛菩薩と主伴同會し、 光嚴 住 持す。爾

し自り以降、圓覺の伽藍、巨いに戸牖を開き、西天此の土各門庭を立す。或は僻洞深巖に居り

て、雲に嘯き月に吟じ、或は名山 望刹に據つ

て、雲に嘯き月に吟じ、或は名山 望刹に據つ

①燈王。須彌燈王如來。

②今上皇帝。後醍醐天皇を指す。

③文明。なににても、見事にあやあるを云ふ。

④宣光。宣は周の宣王、光は後漢の光武。

⑤中興。一旦武家の代になりたるを、再び公家のさばきになりて、一統の代と云ふ、その意なり。

⑥葆命。史記の魯の世家に、天の降せる葆命を墜すこと母れとあり、葆は寶なり。

⑦覆。普照也、おほふなり、中庸にもあり。

⑧大禹。書經の小注に、大と稱するは其の功を大にするなりと。

⑨一人。天子を上一人と稱す。

⑩簡。えらぶこと、上帝之心に在り。

⑪光嚴。重重光を交へ、昭耀炳著なり。

⑫住。安住して永く攀縁を絶する也。

⑬持。失せず、壊せざるなり。

⑭望刹。人の爲めに仰ぐ所を望と曰ふ、刹此に竿と云ふ、人柱を以て之に代ふ、名けて刹柱と爲す、又表刹と云ふは所居の處を表するが故なり。

⑮隱顯。視之在前、忽然在後の境界じや。

⑯行藏。論語に、之を用ふるときはすなはち行ふ、之を舍つるときは則ち藏る。

⑰野老。この頌、法眼禪師の宗要七首の萬法唯識の頌なり。

⑱撻舞力。帝の力なり、何か我に於てせんや、日出で、作し、日入りて息ひ、非をほりてのむ、田を耕して食ふ、太平にてあればなり。

⑳擊々。鼓の聲。

て、衆を領し徒を匡す。⑤ 隱顯 行藏、千途萬轍、竝に是れ圓覺を具足して、圓覺に住持する底の様子なり。石上座、今日又此の伽藍に居して、無邊刹海の凡聖含靈と主伴同會し、光嚴住持す、古今恁麼に住持す、更に絲毫の異相なし。畢竟什麼の事をか濟し得たる。拂を以て牀を撃つて云く、「野老は、堯舜の力を知らず、⑥ 琴瑟鼓を打つて 江神を祭る。」謝、録せず。

復舉す、⑦ 宜春の太守、慈明和尚を請じて、南源に住せしむ。明固辭して赴かず、後日に特に太守に謁して行かんことを願ふ。太守其の故を問ふ。明云く、「始めは之を欲せず、今は偶之を欲する耳。」遂に請じて住山せしむ。拈じて云く、「慈明和尚、⑧ 之を瞻るに前に在るかと思すれば忽焉として後へに在り、蹤跡を見んと擬すれば山遙かに水長し。然も是くの如くなり」と雖も、争奈せん人をして是非海裏に墮在せしむ。即今若し人ありて、「新瑞峰去年は固く 鈞命を辭して、當山に住せず、今日何が故ぞ、敢て來りて席を領す」と問はゞ、便ち他に向つて道はん、竹に上下の節あり、松に古今の色なし。」

① 祭江神。江神は山川の神をさすならん。
② 宜春太守。五燈會元十二の慈明の章に出づ。
③ 瞻之。論語の子罕の章に出づ。
④ 鈞命。將軍の命令などで、鈞は重量三十斤のことにて、おもきを云ふなり。國鈞を乗ると云ふより、宰相のことに用ふ、今は執權の仰せ。
⑤ 釘一琢二。又丁卓に作る、算語也、丁一は成立の貌。
⑥ 鈞鐘。かなばさみ、かなづちで、うちきたへること、修行者をそだてるにたとふるなり。
⑦ 捏聚放開。手にぎりあつめる、把住は手ににぎりとめる。
⑧ 拈定。ひつつかまへる、拈住ともかく。
⑨ 返開。楞嚴經六に出づ、返つて開の自性を聞せば性無上道を成す、圓通是くの如しと。

當晚小參。① 釘一琢二、自分の 鈞鐘、② 捏聚放開、作家の受用、是れ世間の韜略にあらず、亦出世の機鋒に非ず。直に得たり、文殊の鼻頭を ③ 拈定して、氣を出すこと能はず、觀音の耳朶を塞却して、④ 聞を返すに由なきことを。電激し星馳す、誰か敢て ⑤ 壘に ⑥ 摩かん。便ち恁麼にし去らば、開熱門庭は即ち得たり。若し正眼を以て之を觀ば、未だ免れず、⑦ 將頭猛からざれば、三軍を帶累することを。山野乍ち此の精藍に住す、自分の 鈞鐘、作家の受用を論せず、只要す現前の大衆と同じく作息し去らんことを。何が故ぞ、⑧ 天津橋上 ⑨ 私鹽を賣らず。問答録せず。

① 壘。軍壁、とりで。
② 摩。切近なり。
③ 將頭。將は大將、頭はかしらたる人。
④ 天津橋上。表向きのはれがましいところ。
⑤ 私鹽。しほの官營、唐時代に始まりしことあり。
⑥ 張無盡。張商英、字は天覺、無盡居士と號す、宋の名臣、護法論を著す。
⑦ 皓禪師。宋の名僧、玉泉に住す、布衲承皓禪師、北塔廣に嗣ぐ、雲門五世。
⑧ 希聲。老子に云ふ、大器は晩成、大音は希聲。
⑨ 此曲。この詩は杜甫の詩なり。
⑩ 陶潛。晋の陶淵明、字は元亮、世に靖節先生と號す。
⑪ 短吟。「採菊東籬下、悠然見南山」の句、逍遙自得の境界。
⑫ 汾陽。汾陽錄上、「一句明明該萬象、重陽九日菊花新。」

九月旦、上堂。秋雲雨を載せて過ぎ、清隱林藪を攬く。構得不構得、一舉四十九。丈を卓して、下座。

菊節上堂。陶潛が短吟、只是れ世俗の活計、汾陽の一句、未だ免

れず、法眼沙を著くることを。鹿峯門下、世法佛法、都て是れ一邊に拈

向す。且つ如何んが箇の時節に應じ去らん。良久して云く、「爲に憐む處々

離邊の菊、一度の秋風一度の花。」

都寺を謝する上堂。世間に入得すれば、出世無餘、事に觸れ縁に應

ず、都て外料に非ず、折旋俯仰、甚の掠虚かあらん。然も是くの如

くなりと雖も、玉を切ることは、須らく是れ昆吾なるべし。

上堂。恁麼恁麼、密に中邊なし。不恁麼不恁麼、觀面猶ほ三千を隔つ。

暮に主丈を拈じて卓一下して云く、「昨夜雨師風伯に値ふ、觀音耳裏鞦

韆を打す。」

上堂。擧す、雲門大師云く、「直に山河大地、織毫の過患なきことを得る

も、猶ほ是れ轉句、一色を見ざる。始めて是れ半提、更に須らく知るべし、

全提の時節あることを。」拈じて云く、「雲門和尚、三更孟津を過ぐ、白日官

路に行く。若し人他の手脚を觀透せば便ち好し、高く鉢囊を挑げて丹霄に

獨歩せん。其れ倘し未だ然らずんば、鹿峯、更に箇の注脚を下さん。

林珂杖を曳いて清興を嗜む、又空濛紫翠の中に入る。脚力盡くる時山更

に好し、有限を將つて無窮を趣ふこと莫れ。」

上堂。主丈を拈じて卓一下して云く、「諸人還つて會す麼。」丈を靠けて云

く、「一枝、鶴鷄に付し、萬里、鴻鵠に付す。」

冬夜小參。問答罷んで、乃ち云く、「天地未分已前、箇の無字の曆日あり

て、氣候節序を記せず、甚の吉凶、悔吝とか論せん。天地已に分るに及

んで、妄りに寒來暑往を見る。眞曆此れ從り、漫滅す、艸本天下に流行す。

世を擧りて咸言ふ、「冬至の時節、綉紋線を添へ、葭管灰を颺ぐ」と。

引き得たり洞山卓を退けて、自ら家私を託く、霜華勝を掲げて、還つて

露布を成すことを。然も是くの如くなりと雖も、瑞峯、敢て此の弊を救

ふことを欲せず、只要す依つて行ふことを。且く道へ意那裏にか在る。良

久して云く、「異端を攻むるは斯れ害のみ。」

復擧す、僧古徳に問ふ、「如何なるか是れ冬來の事。」徳云く、「京師に大

鹿峯。國師みづからを稱す、

瑞興山の意。

都寺。「つうす」とよむべし、

禪宗寺院の庶務を總轄する役

僧名。

入得。都寺は知事の首にて、

世務を重に司る。

外料。なにも入用の品を

云ふ、風雲雪月は詩を作る入

用ゆふ詩料と云ふが如し。

折旋。折はぎくとまはる、旋

はくるくるまはる。

掠虚。唐宋時代の俗語なり、

虚をかすむなれば、ひとりよ

がりて日本のうすのろ、この

たはげめ。

昆吾。金剛と同じ。玉を切る

こと泥の如し。

雨師風伯。あめの神、風の神。

打鞦韆。ぶらんこ、打の字は

造也、俗話につくること、船

を打し、車を打すの如し。

織毫過患。雲門録に出づ、す

こしのあやまち。

林珂。珂は林の外なり、郊野

なり、まき、うまかひば。

空濛。ぼんやりとくらきな

り。

鶴鷄。せきれい、莊子に鶴鷄

深林に巢くふも、一枝に過ぎ

す。

鴻鵠。ひばり、史記に燕雀安

んぞ鴻鵠の志を知らん哉。

吉凶。めでたきこと、いまい

ましきこと、易繫辭傳、吉凶

は得失の象なり。

悔吝。なしたることをあとで

くやむは悔なり、同上に悔吝

は憂虞の象なり、なしたるこ

黄を出す」と。拈じて云く、「古人恁麼の答話、自ら謂へり身を宇宙に横へ、舌大千を獲ふと。殊に知らず、虎豹の文は田を來し、猿狙の便は、藉を來すことを。」

冬節上堂。昨夜籬頭筆筭を吹けば、森羅万象悉く、盧胡、今朝鼓を打つて此の事を報す。借問す諸人信するや也た無や。信底不信底、瑞峯俱に歡喜す。何が故ぞ、陽氣發する時硬地なし。主丈を卓すること一下。

東堂。東明和尚兼て四頭首兼拂を謝する上堂。昔日洞山和尚、冬夜菓卓を擧退して、泰首座をして菓子を喫せしむることを致すこと得ず。千載の下風俗慣ひ易し、人人、鬪擗し、處處安排すれども、也た未だ人の喫し得るあらず。廬山、今年又冬夜を迎へて、分に隨つて宴を作

の針仕事、よけいに出來るとよろこぶ。

①添線。唐の宮中、紅線を以て日の長短を量る。

②腹管灰。冬至となれば、日足ゆるやかに、腹管から灰をはぢき颯ぐるとなり。

③霜華。石霜一に霜華と稱す、慧明和尚のこと。

④露布。軍中捷を奏する辭なり、あらばに、ひろげる。

⑤異端。この語は論語爲政の章に出づ、異端は聖人の道に非ずして別に一端を爲すを云ふ、楊墨の如きなり。

⑥僧問古德。五燈會元十三に出づ、洞山价法嗣疎山匡仁禪師。

⑦虎豹之文。莊子應帝王の章に出づ、とらのかはは文あるを以て、故に田獵の人を招來す。

⑧狙。手がさざる。

⑨便。便捷。

⑩藉。藉は繩なり、束縛する所の針仕事、よけいに出來るとよろこぶ。

以の者なり、藉にあらす藉なり。①盧胡。ものわらひ、ものまればと云ふ、なんらの新機軸もないと云ふこと。

②東堂。禪宗の僧の法階なり、その山の前住を東堂と云ひ、他山の前住を西堂と云ふ、至徳年中五山十刹諸山の次第を立てられしより、五山の住持を前住當住にかざらず東堂と云ふ、十刹諸山の住持を西堂と云ふ。

③東明。惠日禪師、宋國の人、日本に東渡して圓覺建長等に住す、天童の直翁擧に嗣ぐ、洞下の名僧。

④擧退。ばらひのけり。

⑤鬪擗。擗は漢に作るべし、聚也、せりあひのこと。

⑥陳年。ふるきとて、故き也。

⑦低聲低聲。しづかにせよ、あまり聲が高い。

す、新奇底あることなし。只だ洞山陳年の菓子を將て、皮を剝し核を去つて、送つて我が四頭首の口邊に在れども、皆甘んぜず。遂に人大衆の前に向つて、各自ら吐卻し了れり。幕に主丈を拈じて云く、「主丈子與麼の説を聽いて、出來つて便ち道ふ、低聲低聲。這裏に東堂和尚あり、須ひす譚りに洞下の事を説くことを。廬山覆水收め難し、且く主丈子に憑つて、其の輕觸を謝し去らん。」主丈を卓すること一下。

臘八上堂。六載の寒酸猶ほ自ら可なり、一朝の濁富、貧には如かず。明星。迸散す三千界、悉く瞿曇眼裏の塵と作る。

上堂。世界恁麼に廣闊なり、什麼と爲てか鐘聲を聽いて七條を披す。雲門大師與麼の垂示、越國に依係として、揚州に彷彿たり。諸人還つて會す麼。拂を撃つて云く、「山川限り無きの意を識得して、目前瀟灑として多きことを須ひす。」

除夜小參。問答罷んで、乃ち云く、「玄樞運轉、磨を旋るの蟻、其の歩稍移る。歳序推遷、壑に赴くの蛇、其の尾繫ぎ難し。若し能く此に於て不遷底の句を識得せば、白牛を烹て黍飯を炊ぐ。謂つべし、惠して費さ

①輕觸。かるくさばるで、ちよとからかつて見たとか、ちよとあたつて見たとかの意。

②六載。釋迦さまの雪山に六年の修行をいふ。

③迸散。明星を一見して大悟せられし光景。

④瞿曇。釋迦さまの姓。

⑤聽鐘聲。雲門の語、雲門錄に出づ。かれのこゑをきいて、けさをかける、これは食堂におもむくなり。

⑥七條。袈裟の條なり、けさの五條は行脚の衣、七條は食の衣、九條は説法の衣、二十五條は入滅の衣、福田の相をかたどるが袈裟。

⑦依係。さもにたり。

⑧山川無限意。この頌は雲臥紀談乾の下、假山陽に曰く、「數拳の幽石嵯峨を疊み、池水泓然たり一寸の波」の下の句なり。

すと。其れ尙し未だ然らずんば、疫癘を驅り、
癡獸を賣る。都て是れ勞して功なし。鹿山今夜
諸人と分歲、様に依つて猫を畫くことを、別に
箇の施設あり。主丈を卓すること一下して云く、
「嫌ふこと莫れ冷淡沒滋味、一飽能く消す萬劫の
飢。」

復擧す、僧 浮山遠和尚に問ふ、「新歲已に臨
む、舊歲何くにか往く。」遠云く、「目前異怪なし、
鐘馗を貼することを用ひず。」拈じて云く、「這の
僧大洋海底に在つて、尾閭を問へば、浮山須
彌頂上に向つて、路頭を指す。還つて針芥相
投する分あり麼。」良久して云く、「夜深く、珍
重。」

元正 上堂。拂子を豎起して云く、「看よ看よ、
吾が道一以て之を貫せり、會得せば、城上

- ①玄樞運轉。日月のうつるを云ふ。
- ②旋磨。蟻の磨を廻るが如し、磨ははやく蟻は遅し、これも日月のめぐるにたとへる。
- ③赴蛟蛇。歳の盡きるのを知らんとせば、たにおもむく蛇に似たることありと云ふ。
- ④惠而不費。論語堯曰の章に出づ。
- ⑤癡獸。おろかももの。
- ⑥浮山。浮山法遠圓鑑禪師、葉縣省に嗣ぐ。
- ⑦尾閭。莊子秋水篇、海より大なるはなし、萬川之に歸す、尾閭之を泄す。尾閭一名は沃焦といふ、華嚴經に、應身佛は度沃焦佛といふ云云、能く地獄の中の人を度す、故に度沃焦佛と曰ふと、海水沃き着けば即ち焦る、亦沃焦と名く。
- ⑧針芥。南本涅槃經純陀品に、「芥子針鋒に投するに、佛の出

- て給ふことこれよりも難し」とあり。通しがたきを能く通すの意。
- ⑨一以貫之。論語里仁の章に、曾子云云。
- ⑩角。軍中にて用ふる樂器の名、蚩尤、黄帝と戦ふ、帝命じて角を吹いて龍鳴を爲さしめ、之を禦ぐ。
- ⑪一盞燈。傳燈二十二に香林遠禪師の章に出づ。寂定中の智明を表する語。
- ⑫證龜作鼈。龜を呼んですつばんじやと云ふ、おれのところびんばふで油がないでこのやうな。
- ⑬波斯。今のヘルシヤ、性燥暴、俗禮義なし、學藝なしといへども工伎多しと西域記にあり。
- ⑭然燈。智度論九に、然燈佛の因縁出づ、「ねんとう」とよむべし。

已に吹く新歲の角、然らずんば、意前猶ほ點す舊年の燈。」

元宵上堂。家家一盞の燈あり、三人龜を證して鼈と作す。晴眼の
波斯鬧市に入つて、然燈に撞著して記前を受く。且く道へ什麼の記前
をか受く。孟春 白月終ふ、定んで是れ上元の節。

二月旦、新舊兩班を謝する上堂。竺土大仙の心、東西密に相付す。
密に相付す差互なし。庭梅未だ謝せず舊年の花、岸柳旋舒ふ新歲の絮。拂
を以て牀を撃つて、下座。

佛涅槃上堂。一出一沒、半合半開、諸人什麼れの處に向つてか釋迦老子
を見る。主丈を卓すること一下して云く、「湘潭雲盡きて暮山出で、巴蜀
雪消して春水來る。」

三月 望上堂。處處眞處處眞、何れの處の園林か春を領せざる。塵塵爾
り塵塵爾り、遊客都て白踏の人なし。然も是くの如くなりとも雖も、諸人
還つて鹿峯が主丈花を生ずることを見る麼。丈を靠けて云く、「幾乎西施
をして薪を負はしむ。」

上堂。古徳云く、「我に一句子あり、虚空地に墮つる時を待つて、便ち

- ①記前。梵に和伽羅と云ふ、記はこれ記事、前はこれ了前、佛の誠言その當果を授くることを蒙るを云ふ。
- ②白月。満月を自分と云ふ、月かけて晦を黒分と云ふ。
- ③上元。正月十五日。
- ④竺土大仙心。竺土は天竺、大仙心は釋尊の御心。
- ⑤東西密相付。天竺も支那も日本も以心傳心じや。
- ⑥湘潭。此の詩は三體詩の許渾の詩凌散齋の三句四句なり。
- ⑦望。十五日。
- ⑧白踏。白の字俗語也、白吃(むだぐひ)、白走(むだあるき)の白の字也。
- ⑨西施自薪。西施は支那の美人なり、この語は李白集鳴皋歌に出づ。
- ⑩古徳。未詳。
- ⑪川僧打鏡鉢。鹵莽の義、鏡はどら、鉢ははち。

欄に向つて道はん」と。鹿山は即ち然らず、我に一句子あり、虚空未生以前已に曾て説破し了れり。良久して云く、「三十年後、道ふこと莫れ、川僧鏡鉞を打つと。」

佛生日上堂。佛身無爲にして、諸數に墮せず、雲門の一棒、龍を屠るに誇る。月明豈、珊瑚樹に在らんや。噫、瑞峯恁麼の説話、早く是れ清淨法身を汗卻し了れり。急に須らく大佛殿に詣して、普請して佗を浴し云るべし。便ち下座。

結夏小參。徳山小參答話せず、南人、駝を夢みず、趙州小參答話せんと要す、北人、船を夢みず。若し能く二大老の手脚を覩透せば、何んぞ妨げん大蟲舌上に鞅韉を打することを。直に得たり千古の、坏模を、脱略し、諸方の、抑勒を、掣斷することを。期限を立し修證を論ず。都て是れ魯般が繩墨、然も是くの如くなりと雖も、鹿峰未だ點頭せざることに在り。須らく知るべし圓覺伽藍裏、今夏百二十日、別に、條令の遵ひ行ふて始めて得べきあり。且く道へ、是れ什麼の條令ぞ、日中一食、夜後一寢。復舉す、南泉和尚坐する次で、僧あり又手して立つ、泉云く、「太俗生。」

僧便ち合掌す。泉云く、「太僧生。」僧無語、頷して云く、

①塵外靈區、不レ易レ尋。青山九環、洞門深。

神仙將謂ト二斯地。驚聽空中、操梵音。

次の日上堂。護生は須らく是れ殺すべし、八字兩人なし、殺し盡して始めて安居す。山上鯉魚あり、箇の中の意を知らんと要するや、鐵船水上に浮ぶ。休みね休みね、萬里の智あれば、萬里の憂あり。主丈を卓す。乗拂を謝する上堂。聲前信息を通じ、句後安排を絶す。一、挨一、拶、佛祖崖を望む。拂子を拈起して云く、「只箇の拂子思算なし、須彌頂上三臺を舞ふ。」拂を撃つて、下座。

端午上堂。事三に過ぎず、月五に過ぎず。若し能く直下に雙眸を換へば、善財到る處是れ、藥圃、其れ或は未だ然らずんば、蒲人を帯び、艾虎を戴くに、一任す。

上堂。舉す、僧雲門禪師に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」後來、圓悟和尚拈じて云く、「天寧は即ち然らず、如何か是れ諸佛出身の處。」薰風自南來、殿閣生微涼」と。二大老、一人は笞帚

①佛生日上堂。四月八日。
②佛身無爲。維摩經弟子品に出づ。

③雲門一棒。珠曰く、むだばれなり。

④屠龍。莊子の列禦寇に出づ、朱佗漫は龍を屠るを支離益に學ぶ、千金の家を單(つく)す、三年にして技成りて而も用ふるに功なし。

⑤珊瑚。四時色をかへぬにたとへていふたのである、咽喉唇吻を要せざる絶對の境は、光明遍照である、他の力をからぬ。

⑥駝。らくだなり、らくだは寒をよるこぶ、熱はいとふものなれば。

⑦支那。支那は北には海がなきゆゑ船を見たことばない。

⑧坏模。土器のすやきのかた。

⑨脱略。くくりあげ。

⑩諸方。諸方の規矩法度を。

⑪抑勒。抑は按止也、勒は馬頭の絡銜、くつば。

⑫掣斷。あらげなくひくなり。

⑬條令。法度がきのこと、式日のこと、科の次第のかき立て。

⑭南泉。普願禪師、趙州に嗣ぐ。

⑮塵外靈區。世界をはなれた靈場。

⑯九環。九ヶ所の入口入口がある。

⑰洞門。山奥に人家の田地のあるほどの平地ある處也。

⑱空中梵音。魏の陳思王の故事にはじまる。

⑲挨。つかふなり。

⑳護生。麗居士録の語に出づ、安居は偏に夏月に約す、夏中は方尺の地も蟲あり、安居は禁足日。

㉑鐵船水上浮。同上の錄に出づ。

㉒挨。おしやる、むりに向へよるなり。

㉓拶。まぢかくよするなり。

蛾眉を畫き、一人は官路に私鹽を賣る。瑞峰與
麼の 批判、覺えず失笑す。且く道へ箇の什麼
をか笑ふ、地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈
起すれば卻つて是れ 新羅の鐵。

中夏上堂。鳥飛び兎走る、碧落蹤なし。
一齊衆楚、法歲中を告ぐ。

上堂。拄杖を拈じて、卓一下して云く、「大衆
會す麼、若し會せずんば、更に注脚を下し去
らん。」又卓一下。

上堂。火雲天を蒸して、暑威烈烈、嘉州の大
像通身汗流れ、陝府の鐵牛喘きて熱と苦しむ。
別別、富士山頭長へに雪あり。拂を撃つて、
下座。

夏中 東福和尚至る、上堂。擧す、雪峯和
尚衆を領じて淨江に到る。乃ち問うて云く、

「二百僧を寄せて夏を過さんと欲す、得てんや否や。」
淨江拄杖を以て、劃
一劃して云く、「著不得」と。拈じて云く、「淨江和尚、只
大禮辭讓ならざ
ることを知つて、未だ 禮の用は和を貴しと爲ることを知らず。東福和尚
京師より來つて一兩員の僧を寄せて夏を過さんと要す。鹿峯敢て古人の態
度に倣はず、只是れ命に順ふ而已。何んが故ぞ、衡 鑑前に在り、奸峭
を容れ難し。」

上堂。殘陽未だ收まらず、爽氣潛かに起る。無位の真人、赤骨
壓地。喝一喝。

上堂。擧す、瀉山、懶安に問ふ、「汝十二時中、當に何んの務むる所ぞ。」
安云く、「牛を牧す。」山云く、「汝作麼生か牧する。」安云く、「一回艸に入去
れば、鼻に挿き將ち回る。」山云く、「汝眞の牧牛なり」と。拈じて云く、
「懶安金殿に塵沙を撒す、瀉山艸庵に 鷗吻を安す。瑞峰若し他の一回艸
に入り去れば、鼻に挿き將ち回ると道はんを見れば、便ち他に向つて道は
ん、盡大地一頭の水牯牛、更に什麼の處に向つてか挿き將ち回らん」と。
他若し口を開かんと擬せば、便ち一掌を與へて道はん、「國王の水艸を犯

兎は陰月に象る、この四字日
月のすぎざるを云ふ、この上
もなく目出度い。

一齊衆楚。孟子滕文公下に、
一人の齊人之を傳ふるに、衆
くの楚人之を嚇せば、日に盛
ちてその齊ならんことを求む
も、也た得べからず云云。

東福和尚。京都の東福寺五山
の一。
雪峰。ぜつぼうとよむべし、
義存禪師、徳山に嗣ぐ、唐の
名僧。

淨江。長慶安に嗣ぐ、この語、
傳燈十一に出づ。
大禮。孔子家語玉言解に、至
禮は讓らずして天下治る。
禮之用。論語學而章に出づ。
衡。秤のさなにて、物の輕重
をわけけるもの。

鑑。鏡なり、物のよしあした
みわけけるもの。
奸峭。日本のこすいと云ふこ
と。

殘陽。ゆふひ。
爽氣。さわやかなるこころ。
無位真人。心の異名也、この
ことは臨濟錄にあり、佛とも
神とも名付けやうのなき故
に、まあ無位真人と云ふ。
赤骨壓地。骨立也、まつばだ
かなり。

瀉山問懶安。この因縁、傳燈
錄石磴の章に出づ。
鷗吻。宮殿の棟のかざり、及
びしやちほこのるぬ、飛魚の
形、火災を辟くるの咒なり。

國王水艸。五燈會元の三、南
泉の章にも出づ。
眞際。大智度論三十二に、問
ふて曰く、「如と法性と實際と
是の三事、一と爲さんや、異と
爲さんや、答へて曰く、「是の
三、皆是れ諸法實相の異名な
り。」

廓落。大なること。

すこと莫れ』と。」

解夏小參。眞際元來。廓落封を絶し疆を絶す。情域警爾として區分る、凡あり聖あり、所以に釋迦如來二千年前、曲げて方便を垂れて、期を立し限を立し、凡を鎔して聖と成す。殊に知らず、模子既に正しからず、脱出し來る底、七回八凸、便ち見る聲聞は精勤して、擇滅無爲を證得し、菩薩は克期して、平等性智に安居す。都て是れ銅鑄し得る底、未だ脱體完全することを得ず。我が此の現前の大衆、今夏一百二十日、者般の鑪に入らず、他人の鉗鎚を受けず、飢食困寢、各自に烹鍛す。瑞峰今夜鼓を搦つて、自恣の佛事を作す、只諸人各各所成底を驗過せんことを要す。大衆を顧視して云く、「元來只箇の鐵彈子。」

- ①方便。機に隨つて物を利するを方便と云ふ。
- ②擇滅無爲。俱舍界品に三種の無爲を説く。その二の擇滅無爲は擇は即ち揀擇、滅は即ち寂滅、謂ふは聲聞の智を用ひて、揀擇して見思の繫縛を遠離して、即ち寂滅眞空の理を證す、これを揀滅無爲と名づく。
- ③平等性智。本來性の常分なり、證得して法身の受用を知るを圓滿報身として、又平等性智とす、即ち第七末那識の轉變なり、又心無病なりと云ふ。
- ④銅鑄。きづものいかけすること、銅はつなぎとどむ、いふさぐ、聲聞菩薩もまんぞくに出來ぬを云ふ。
- ⑤鑪。鑪は鑪に作るべし、二字ともふいがうなり、國師の法子をこしらへるにたとへ
- ⑥自恣。孟蘭盆會の七月十五日の日に、自分から自分の善惡を人に問ひ、互に遠慮なく心のままに云ひあふて是非をわかつ。
- ⑦佛事。維摩經注に、佛は人を化するを以て事と爲す、凡て是れ人を化するを皆佛事と名づく。
- ⑧鐵彈子。てつまるがせ。
- ⑨初三、十一、中九、下七。この二句は曆書にある出行の吉日にて、世俗の常語なり、初秋夏末出行の時なり。
- ⑩壺矢也、やかす、籌略籌策ははかりことといふに用ふべし。
- ⑪輸。負けるなり。
- ⑫策功。論功のこと。
- ⑬寒山。寒山子、天台山の仙僧、本氏族なし。
- ⑭蓋面帛。死ぬるとき、方帛を以て面を覆ふ、面衣のこと。

復擧す、雲門僧に問ふ、「初秋夏末、平常に觸れず、一句を道ひ將ち來れ。」僧對ふることなし、自ら代つて云く、「初三、十一、中九、下七」と。拈じて云く、「雲門大師明中に一著を贏ち得て、暗中に一籌を輸し了れり。」

- ①自東自西。詩經大雅文王有聲の句。
- ②煖涼。煖は暖なり。
- ③蕭。蕭殺なり、枯すといふ意なり。
- ④り、寒の意もあり。春生秋枯は天の常規也。即ち兩班を謝し、新舊交替するの一語の結に、の一句を用ゐたるもの歟。

蓋面帛、元是れ東家の李大翁。八月旦、兩班を謝する上堂、主丈を卓すること一下して云く、「建化門開く、千足萬足、東自り西自り、思ふて服せずといふことなし、何を以てか驗と爲ん。」丈を靠けて云く、「煖涼次序紊れず、秋末天氣已に肅す。」

再住山城州瑞龍山太平興國南禪寺語錄

侍者 紹榮 懷澄 士永 等編

師、建武元年十月十日、入院。

山門。天下の瑞龍山、門に第二義なし、若し也た、蘆を銜み來らば、那裏是れ那裏。

佛殿。合掌して云く、「希有なり世尊、希有なり世尊、且く道へ箇の什麼をか讚歎す。看よ他の鼻下に口門あることを。」

土地堂。恍たり惚たり、神其の中に在り、恠しむこと莫れ、昔日南泉を見ること得ざることを。王老師も也た未だ他の形容を見ず。

祖師堂。四七二三、家風未だ墜ちず、東西的的相承、樽桑國裏に流落す。良久して云く、「好事門を出でず、惡事千里に行く。」

據室。古來の宗師、佛を叱し祖を呵す。南禪。好采人を接し、丈室門戸を恢開す。何んが故ぞ、大瞋は怒らず。

救黄。皇祚の一統も也た此の印子に由り、祖宗の中興も也た此の印子に由る。將に謂へり今日始めて流行すと。救黄を捧起して云く、「威音王前只這れ是れ。」

山門の疏。屋裏豎四横三、情を盡して一一に説破す。諸人の好心、山僧が罪過。

① 懷澄。不詳。
② 士永。青山慈永、國師に嗣ぐ、建長に住す。

③ 建武。後醍醐天皇再祚建武元年甲戌、この前年元弘三年五月隱岐より還京あり、師六十七歳。

④ 天下瑞龍山。珠曰く、此年の正月、明極和尚住山の時、五山第一の勅命ありし後、初めて入寺、ゆゑに専ら支那の徑山に比しての語。

⑤ 衡麓。淮南子に、「雁は順風を以て氣力を愛し、蘆を銜んで翔り、以て矰弋に備ふ」と、矰はいぐるみ、みじかき矢。請狀を謝するにたとふる。

⑥ 希有。金剛經に「希有世尊」とあり。

⑦ 恍惚。分明ならざる也。

⑧ 好事。この二句、北夢瑣言に出づ。

⑨ 好采。采は喝采の采なり、好

法座。座を指して云く、「十年兩度斯の座に登る、等級なき中等級を成す。一回歩を進むれば一回高し。」

燈王も也た階下に在つて立つ。香を拈じて云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬歲を祝嚴す。」

陛下、恭しく願はくは、武を建て文を揚げ、駿功を萬世に播して、拔せず、禪を興し教を輔し、鴻業を未來の無窮に傳へたまはんことを。此の香、仰いで、

皇太子の尊、船を祝す。伏して願はくは、離明中に瑩きて、嚴威百里に、震驚し、副徳深く殖るて、景運千秋を保ち綏んじたまはんことを。此の香、闔朝の貴官、文武百僚の爲めに、同じく祿算を資け奉る。伏して願はくは、長く天澤の中孚に沐して、久しく法城の外護

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

采は人看ることを愛す、不好采は人看ることを要せず。

② 丈室。大唐の顯慶年中、勅使王玄策、印度にて、淨名(維摩居士)の宅を過ぎて、笏を以て基を量るに、たゞ十笏あり、故に方丈の室と號す。

③ 皇祚一統。年譜に元弘三年、この年五月兩波羅、鎌倉及び諸國の平氏、一時に盡亡して公家一統の世となる。

④ 祖宗中興。代代の天子さまの政治を中興なされたるは。

⑤ 威音王。祖庭事苑五に、禪宗は不立文字之を教外別傳といふ云云、威音王佛已前は蓋し實際の理地を明す。

⑥ 燈王。須彌燈王、身の長さ八萬四千由旬。

⑦ 建武。珠曰く、この年改元の字なり、二字の義は建は初めて取立つるの意、武は左傳に戈を止むるを武と爲す、武に

七徳ありの説ありて干戈を止むるを武の徳とす、後漢の光武も武徳を以て天下をなされたゆゑに、初めて即位の年號を建武と立てられ、諡にも武の字あり、今もその意なる。

⑧ 駿。駿は大也。
⑨ 不拔。堅固丈夫の意。
⑩ 離明。離は麗なり。日月天にうるはしく、百穀草木地にうるはし、重明以て正にうるはし、乃ち天下を化すと易の離卦象に出づ。

⑪ 嚴威。敬畏也。
⑫ 震驚。易說卦に、震を雷と爲す、長子と爲す、龍と爲す。百里を驚すは遠を驚し、遷を懼れしむるなり。

⑬ 副。かげがひ、副君也。
⑭ 景運。大運なり。
⑮ 天澤中孚。易の履卦象上に出づ、孚は信也。大觀珠曰く、

と爲んことを。

此の香、多年窮谷に抛在して、^①贏ち得たり
枝葉の自ら除ることを。錯つて人前に向つて
賣弄して、^②聲價偏に掠虚に墮つ。早く今日
の事を知らば、悔ゆらくは當初を慎しまざるこ
とを。^③已に展べて縮めず、爐中に燕向して、

前住相州巨福名山建長禪寺 敕謚佛國禪師高峰
大和尚に供養して、用つて負恩の罪を謝す。^④

就座。問答録せず、乃ち云く、「向上の一著子
宇宙の間に、^⑤祕在す。佛祖の出興、皆斯の要
を默す。靈山曾て迦葉に付せず、^⑥少室誰か言

ふ神光に授くと。^⑦西竺乾、^⑧東震旦、^⑨繩繩
繼繼、^⑩響を接し虚を承く。或は放或は收、賓
主互換、一挨一拶、拳踢相酬ゆ。便ち見る。五

家行を、^⑪抗げ、途を通じ格を變ずることを。敲
唱彌峻く、號令益嚴なり。然も是くの如くなりとも雖も、終に未だ此の
一著子を擧揚せず。

石上座。今晨此の座に陞る、亦只緘黙するに、^⑫分あり。是れ開堂。祝
聖の儀を失却すること莫し麼。良久して云く、「好し是れ、^⑬無私の大法輪、
蓋天蓋地。皇化を助く。」叙詞録せず。

復た擧す、大唐の、^⑭肅宗皇帝、^⑮忠國師に問ふ、「如何なるか是れ、^⑯無
諍三昧。」國師奏して云く、「檀越、^⑰毘盧頂上を踏んで行け」と。拈じて云
く、「^⑱肅宗、^⑲綸言虚りに出さず、言中自ら、^⑳仙陀の響あり。忠國師の高
談闊論は即ち得たり、只是れ未だ鹽水器馬を辨せざること有り。山野今日
恁麼の奏對を勞せず、坐ながら無諍三昧の自然に現前するを見る、何を以て
驗と爲ん。」拂子を撃つて云く、「^㉑九垓、^㉒鼎祚に歸し、^㉓四塞烽烟を絶す。」

當晚小參。問答録せず、乃ち云く、「^㉔空劫那邊の一大機、古今、^㉕歷落し
て遷移せず、聲に騎り色を蓋ふて獨り、^㉖旋幹す。佛祖當頭眼、眉に似たり、
山僧當年此の精藍に據る。山門佛殿に、^㉗朝し、^㉘厨庫、^㉙僧堂に對す。翠竹
青松、左に圍み右に列す。烟巒雲障、後に峙ち前に横ふ。今日看來れば、

後醍醐帝再祚の後ゆる、群臣
は皆天皇隱岐へ遷幸の後、^㉚秘在。乾坤内宇宙の間に一寶
殿院に奉仕し、北條氏に従ひ
し衆ばかりなり、左すれば皆
天皇に背きたる人々なり、し
かし時勢を推察ありて科をか
ろくし、死罪を宥め給ふ、こ
の御恩澤にいづれも永くうる
ほふなり。
① 贏得。大觀珠曰く、かちは商
の利の餘りなり、算用し了ふ
て見れば、これ計りが得たり
と云ふことなり、勝の義ある
ゆゑかつとよむが、意は前文
のとほりなり。
② 賣弄。ひけらかすの義。
③ 聲價。珠曰く、名の直うちが
實の方へゆかぬ、一方むきに
そらごとの方へおつる也。
④ 已展不縮。虛堂錄卷一に出づ、
も、寺して店をひらいたか
らは、尻おぼめはならぬ。
⑤ 宇宙。古往今來を宙といひ、

四方上下を宇といふ。
⑥ 秘在。乾坤内宇宙の間に一寶
あり。
⑦ 少室神光。傳燈三慧可大師の
章、少室は達磨大師の居りし
ところ。
⑧ 西竺乾。印度。
⑨ 東震旦。支那。
⑩ 繩繩。絶えざること。
⑪ 接響承虚。不實を領取しての
意、人の評判斗りさいてなり。
⑫ 五家。臨濟、潯仰、雲門、法
眼、曹洞の五派。
⑬ 抗。抵抗なり、敵抗なり。
⑭ 有分。あたりまへのこと。
⑮ 祝聖。皇帝の萬歳を祝するの
法式。
⑯ 無私。平等無差じや、天鑑無
私などと云ふてえこひきけ
ないと云ふこと。
⑰ 肅宗。玄宗帝の子、李唐八代
主、法を六祖惠能に問ひ給ふ。
⑱ 忠國師。南陽忠國師、六祖に

副法す。
⑲ 無諍三昧。金剛經に出づ。
⑳ 檀越。「だんのつ」とよむべし、
梵語に陀那鉢底、譯して施主
と云ふ、檀を行ふに由る、貧
乏を越廢する者也。
㉑ 毘盧頂上。法身如來を毘盧遮
那と云ふ、遍一切處と譯す。
㉒ 那と云ふ、遍一切處と譯す。
㉓ 大佛さんのあたまの上といふ
やうなもの。
㉔ 綸言。天子のちよくめい。天
子のおほせはだんだん云ひつ
ぐほどきやうさんになるゆゑ
絲にたとへる。
㉕ 仙陀。涅槃經の九に、一名四
寶鹽水器馬。
㉖ 九垓。王者は九垓の田を置く、
九垓は九州の極數也、垓は國
のはて、極土なり。
㉗ 鼎祚。鼎は三足兩耳、五味を
和するの寶器也と云ふて、帝
業にたとへる、天子の福徳に
したがふの意。

皆悉く舊に仍つて、更に一絲毫許も移易せず。且つ喜すらくは、現前の大衆と同じく此の不變不異の域に遊ぶことを。慕に主丈を拈じて云く、「主丈子冷地甘なはず、出で來つて便ち道ふ、新南禪備只一隻眼を具す。殊に知らず、近日皇風一變して、佛法也た斬新なることを。山僧伏して處分を聽かんに、即今拄杖子其の斬新底の法門を説くこと。一上せよ。」卓一下して云く、「諸仁者、還つて會す麼、其れ或は未だ會せずんば、更に注脚を下し去らん。」又卓一下。復た擧す、僧、曹山に問ふ、「佛未だ出世せざる時如何ん。」山云く、「曹山如かじ。」僧云く、「出世して後如何ん。」山云く、「曹山に如かす」と。拈じて云く、「この僧虛空裏に向つて兩槪を釘す。曹山、美奐莫莫、亦闍茸に例す。南禪今夜

④ 四塞。四方のてきどもも、いくさのろしなあげぬ。
⑤ 空劫。劫に成、住、壞、空の四あり、一大劫といふ。
⑥ 歷落。歴は分明、落は碧落、廓落と同じ。
⑦ 旋轉。めぐり轉するなり。
⑧ 朝。朝見など云ふて、天子におめにかかるを云ふ、河海の水、東に朝すなどに轉用してあつまる意味に用ふ。
⑨ 厨庫。くり、寺のだいどころ、七堂伽藍の一。
⑩ 僧堂。大衆のしゆきやうするたてもの、選佛場とも云ふ。
⑪ 皇風一變。天皇が武家の干渉するを止めて、一統して昔に復したまひしを云ふ。歴史上見ておくべき語なり。
⑫ 處分。さげささしづ。
⑬ 一上。一場なり。
⑭ 曹山。本寂禪師、唐代の名僧、曹洞宗の祖。

六〇
① 美々莫々。莫は逆行、莫は出格。この四字にて木にいてへば節の多きなり、人に逆ふなよいとす人、すれる、ふふくものろぬ。
② 闍茸。猥賤也、やくたいもなくいやし、しつかりと格のたためこと、ひれつ、賤は位ひくきことにて、了簡がせまいと云ふこと。
③ 例。おしなべてと譯す、例闍茸とは曹山も亦世間のひれつなせまい了簡の人と、おしなべてなられたとなり。
④ 下揚州。三つの下揚州あり、その末に腰十萬貫をまとふて鶴に騎つて揚州を下るとあり。
⑤ 聖節。後醍醐天皇の天壽聖節、文保二年十一月二日の御降誕なれば十一月二日の上堂ならん。
⑥ 千載間出。間出は孟子の公孫

敢て他の出と未出とを論せず、且く道へ畢竟何者か是れ佛。喝一喝。上堂。佛法多子なし、只自ら羞を知らんことを要す。昨日は晴分今日は雨、妨げず鶴に騎つて揚州に下ることを。① 聖節、上堂。② 千載間出、一朝、誕彌、景運此の日従りして延ぶ。③ 日日是れ好日、洪基其の時を得て以て建つ。時時はれ好時、祥開き慶布く。塵沙界、萬象森羅齊しく眉を展ぶ。④ 無極。無徳の二首座。昭書記。玄藏主を謝する上堂。⑤ 羣形無極に生ず、誰か端倪を辨せん。大用無徳に現す、焉んぞ軌則を存せん。金章玉章、著述し成し難く、大藏小藏、詮注し得ず。太光生黒漆黒、人天の眼目通塞没し。⑥ 冬節小參。問答罷んで、乃ち云く、「陰化極る時、青松翠柏尚ほ色を變じ、陽威發る處、凍木寒叢也た芽を生ず。燠涼相凌いで、都て朕迹なし。其の所以を泯す、寧ろ識情を容れんや。者裏に到つて、没量の大人、口磔盤に似たり。明眼の衲僧、只頭彩を見る。惹き得たり皓老布褌を洗はず、汗臭掩ひ難く、鏡清。臥單を展べず、眼を開いて床に尿することを。然

丑の章に、五百年必ず王者興ること有り云云とあり、この天皇は實に千載の間出の帝王にていらせらるればなり、國師のこの語大に味ふべし、よき史料たるの語なり。
① 誕彌。玉篇に、天子の生るるを降誕と云ふとあり、生日を誕彌の辰と云ふ、彌はわたる、十月を終るなり。
② 日日是好日。昨日も今日も御めでたいなり。
③ 洪基得其時。洪基は大業のものとて、天皇の御事業は皇政に御復古の御志が、このときをばづしては得給ふこととはむづかしいで、ちやうど御運がむかされたので、建國の基となる。
④ 祥開。目出度こと目の見ゆるなり、開ははじまるなり。
⑤ 慶布。目出度こと、布はひろがるなり。

も是くの如くなりと雖も、冬夜斯に臨む、空しく過すべからず。別に家宴を作して、我が此の現前の大衆を管顧し去らん。手を拱いて云く、「仲冬嚴寒、伏して惟れば珍重。」

復た擧す、南華の徳禪師、新に寶壽に遷る。恰も新冬に値ふて、衆に示して云く、「新冬、新寶壽、言は是れ舊時の言、若し西來意を會せば、波斯船舶に上る。」拈じて云く、「寶壽此の四句を示す、梵語に依倚として、唐言に彷彿たり。山僧住院未だ幾くならざるに、忽ち冬節に逢ふ、也た一偈あり、是れ梵語耶、是れ唐言耶、諸人試に請ふ聽取せよ。新冬新南禪、言も也た是れ新言、喚んで西來意と作さば、北人船を夢みず。」

次の日上堂。陽は陰處従り生じ、陰は陽中に向つて極る。拂子を豎起して云く、「且く道へ、這箇那裏従り得來る。」拂子を擲下して云く、「九九元來八十一。」

建武元年十一月二十八日、

龍、駕本寺に臨幸して一宿、次の早、師に命じて衆の爲めに入室、齋罷んで上堂、拈香、祝、聖罷んで跏趺、問答罷んで乃ち云く、「一顆の靈光、

①無極。諱志玄、天龍第二世、佛慈禪師と諡す。
②無德。字は至孝。
③昭書記。淨智の部に見ゆ。
④玄藏主。不詳。
⑤擊形。太極なり。
⑥端倪。倪は分也、際也、極際のこと、山のいただきと水のほとりと、本末始終の義。
⑦陰化。陰陽造化と云ふこと、冬分の也。
⑧磔盤。柱下の石。
⑨鏡清。洞山价に嗣く。
⑩臥單。會元十三に出づる故事。
⑪南華徳。南華經の法嗣。
⑫西來意。達磨さまが、印度から交那へやつてきた主意は、直指の旨を傳へんがためじや。

⑬波斯。方語に尋常茶飯。
⑭建武元年十一月二十八日。この年の十一月、護良親王鎌倉に幽閉せられ給ふ、この十月藤原藤房官をすて去る。
⑮龍駕。天子の馬を龍といふ、南禪寺へ臨幸し給ふ。大日本史料六の二、建武元、十一月二十八日、南禪寺に行幸し、駐蹕二日にして還り給ふ。又夢窓國師臨幸私記あり、次第を記す。
⑯輝輝。盛赤也、光明也。
⑰輝輝。明盛也、電光也。
⑱得此。此は一顆の靈光。
⑲之を。一顆の靈光。
⑳中原。國の中央。
㉑大寶。一顆の靈光。
㉒四輪。金、銀、銅、鐵。
㉓取。御に同じ、天子ののりも。

今古に輝騰す、明暗通塞、其の相を奪はず、長短方圓、其の形を狀らず、蕩蕩恢恢、輝輝輝輝、天地此を得て以て覆載し、日月此を得て以て照臨す。之を佛祖向上の法輪と謂ひ、亦君王中原の大寶と名づく。是れ四輪の類に非ず、寧ろ七寶を將つて齊しうせんや。此の寶現する時、貴賤賢愚、咸く徳を荷ひ、此の輪轉する處、妖邪魔外盡く蹤を潛む。今日龍馭山中に光幸す、林樾峯巒、争ふて吉祥の色を呈し、齋鐘粥鼓、亦歡喜の聲を作す。直に得たり向上の法輪、推轉するに勞せず、脱體斯に彰る。君王の大寶、希求する所なければども、自然にして至る。正與廢の時、天を感せしめ國に報するの一句、如何んが道著せん。主丈を卓すること一下して云く、「此の深心を將つて塵刹に奉ず、是を則ち名づけて聖恩を報すと爲す。」叙謝、録せず。

復た擧す、大宋の孝宗皇帝、佛照禪師に問ふ、「世尊六年雪山に居す、成する所は何事ぞ。」佛照奏して云く、「將に謂へり陛下、忘卻す」と。拈じて云く、「佛照御に對し玄を談す、一時大遇、檢點し將ち來れば、未だ免れず聖聰を汗瀆することを。今日忽ち人あり、再び此の山に住して、成

す所は何事ぞと問はゞ、只他に對して道はん、
低聲低聲、天子殿前、閒話を容れずと。」

十二月初三日、恭しく、聖旨を奉はつて、特

に、莊田を賜ふ。鼓を鳴して陞堂。拈香。祝

聖罷んで、據座、偈を説いて云く、「公憑端

自二日邊一臻。乃祖田園界畔明。九穗嘉

禾今已熟。荷恩何必待。秋成一。」

頭首の、御に對して秉拂するを謝する上堂。

一喝。賓主を分ち、一句。教禪を辨ず、峻機

穎脱、舌に、瀑泉あり。且く道へ賓主教禪、一

筆に、勾下する時又如何ん。拂子を擲下して云

く、「龜毛の拂子筋斗を蹴へす、鳳鸞を驚起

して碧天に翔けしむ。」

臘八、上堂。六年癡坐、蒙を撃つに由なし。

寒心、酸鼻、徹骨の貧窮、窮るときは則ち變

佛照。育玉山佛照德光禪師、
大慧果に嗣ぐ、南宋の名僧。

忘卻。如來は我法は國王大臣
に付すと説かれた、今帝には

忘卻なされたらう、還つて記
得しめされよと。

大遇。便利を得るの義。

莊田。莊園と云ふが如し、天
子より祿田を賜ふなり。大日

本史料六の二に、遠江新所郷
を南禪寺に寄附す。

説偈。この和韻に、明極楚俊
も一偈あり。

公憑。憑は托なり。

乃祖。乃はなほ汝と云ふが如
し。

九穗。一莖九穗。

對御。天子の御前。

賓主。ひんじゆとよむべし、
臨濟の四賓主の故事あり、柳

は緑花は紅と、ありありはつ
きりしてゐる。

教禪。教相と坐禪と。

峻機穎脱。穎脱は錐の芒也、
いづれもみなやけてじやとい

ふほめことば。

瀑泉。いふことは、まるでた
きのみづの流れるやうな辯者

斗りとほめられた。

勾下。除去するを云ふ、點を
かけてけすこと、勾はまがる

かぎの如くまがるなり。

龜毛拂子。一塵は常にあらす、
變めつるときは、きもようと

かくに同じ。

鳳鸞。當日の百官扈從に比す。

蒙。蒙は「くらし」とよむ、
故に開悟の意なり。

寒心。戰慄也、ぞつとする。

酸鼻。はなつまみもならぬ。

徹骨。徹衣也、ぼろぎ。

窮。窮乏也、除夜のばん。

鎖鑰也。

支那の祝日の習慣で、
竹をはためく。

じ、變するときは則ち通す。暮地に身を翻して山を下り去る、
春風を裏む。襪襪袖裏

上堂。主丈を卓すること一下して云く、「諦聽諦聽、唯此の一事實、餘

二則ち非眞。」

歲夜小參。問答罷んで乃ち云く、「歲、齋運轉して、除夜斯に臨む。西

巷東村、錢を焼き、竹を爆き、張公李老、儼を驅り、窮を送る。一等

に是れ大丈夫、惜しい乎、十二時辰に使はれて、七顛八倒すること。

衲僧家、儵然として、象外に遊ぶ。甚の月の晦朔、年の舊新とか論せ

ん。即今是れ臘月三十の夜にあらずや、誰か言はん來日定んで是れ大年朝

と。直饒恁麼の田地に到り得るも、也た未だ、解脱の深坑に墮在して、脚

を擡げて起たざることを免れず。畢竟如何んが折合し去らん。」良久して云

く、「是れ、桃源の客にあらずんば、徒に洞中を話するに勞せん。」

復舉す、香林に因に僧問ふ、「萬頃の荒田、是れ誰か主と爲る。」

林云く、「看よ看よ臘月の盡くることを。」頷して云く、「萬頃荒田主是誰

答道看看臘月盡。昨日有人天台來、卻得江西一封信。」

驅儼。鬼は外、福は内。とな
り。儒者は正月晦日のことに
用ふ、祖錄は除夜に用ふ。

送窮。鬼を追ふなり、韓文に
も送窮文といふあり。

衲僧家。われわれ坊主なま
ではといふこと。

儵然。果はしきところなしと。

象外。世間外のこと、よろづ
かたちのほかと云ふこと。

解脱深坑。聲聞緣覺の境界に
おちこんで。

桃源。武陵桃源の故事、仙境
のおもむきをしる人でなく

ば。

香林。澄遠禪師、雲門に嗣ぐ。

頃。田百畝を頃と爲す、六尺
を歩となす、二百四十歩を畝

となす。

荒田。本分の田地。

爲主。ただ自照すべきこと。

看看。いつの間にやら、大晦
日にまつた。

元正上堂。歳華云に一變して、晷運三陽を告ぐ。試に腰間の曆日を把つて看よ、何れの日何れの時か吉祥ならざる。

元宵、新舊兩班を謝する上堂。進んで宗に違はず、退いて旨を失はず、左顧右盼、都て暗地なし。佛法世法、照一致に歸す、何を以てか驗と爲る。拂を以て圓相を打して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂。今朝二月一、人人誰か識らざる、二雙に非ず、一隻に非ず、聰明の大王、算筒を擲ち、雨餘の春水虚碧を濼はす。

壽福、石梁和尚、遺計至る、上堂。丙寅の生、囉囉哩、甲戌の滅、囉囉哩、滅不滅、生不生、囉囉哩、長空萬里一圓月、囉囉哩、壽福和尚、此の還源の歌を唱ふ。南禪恁麼に、擊節す、且く道へ是れ什麼の曲調ぞ。拂を以て床を撃つて云く、「囉囉哩、囉囉哩。」

佛涅槃、上堂。鹿苑の中、鶴林の下、左出右没、千變萬化、而今滅後二千年、花柳依依として春野に徧し。伏して惟んみれば、釋迦如來、賊に和して捉敗し了れり。

三月旦、上堂。睦州和尚云く、「現成公案、備に三十棒を放す。」敢て大

⑤歳華。四時風雲草木等入りみだれて、次第にあやあるを形容して云ふ。

⑥三陽。十一月復、一陽、十二月臨、二陽、正月泰、三陽。盼に作るべし、ふりかへりみる。

⑦我見燈明佛。人々自己の燈影あり、法華序品に出づ。

⑧本光瑞如此。いつもかばらぬ、人々具足の那一燈。

⑨算筒。さんぎのつつ也、昔のさんぎは今のそるばんの事。

⑩壽福。建保三年建立、鎌倉五山の一なり、龜谷山と號し、榮西を開山とす。

⑪石梁。仁恭禪師、寧一山に嗣ぐ、建仁壽福等に住す、徑山の石溪月に嗣ぐ。元の台州の人、建武元年十二月十八日寂、六十九歳。

⑫擊節。ひやうしをとると云ふこと、答への意。

衆に問ふ、「如何なるか是れ現成公案。」是れ輕烟柳眼を遮り、微雨花腮を溼す底なること莫し麼。是れ三通鼓鳴つて、四衆雲の如く集る處莫し麼。是れ南禪不説にして説き、諸人無聽にして聽く處莫し麼。阿呵呵、地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈起すれば是れ新羅の鐵。

浴主を謝する上堂。水、水を洗はず、妙

觸宣明、十六開士、夢裏惺惺。主丈を卓す。

果首座、忻藏主至るを謝する上堂。千經萬

論、一黙に如かじ、直示單傳、也た奇特に非ず。

仰山、錯つて、率陀天に上る。觀音院内に彌勒あり。

浴佛上堂。天上天下、唯我獨尊、恠しむこと

莫れ、渠儂思算なきことを。新生の孩子金盆に擲つ。

①鶴林。沙羅樹林の別名也。昔、如來の涅槃に入り玉ふとき、

狗尸那城の沙羅樹林、變じて白鶴の如しと涅槃經に出づ。

②依依。柔弱なること、離るべからざること、しなやかにある體なり。

③和賊捉敗。賊は賊物と云ふ、盜のとるところの物。

④睦州。陳尊宿、黃檗希運に嗣ぐ、江南季王の裔、雲門もこの和尚に參じて、足を折られ

て大悟した。

⑤新羅鐵。鈍鐵也。

⑥浴主。ふるたきげうさま。

⑦水不洗水。本來空のところにては。

⑧妙觸宣明。このことは楞嚴經の五に出づる故事にして、印度の神話を以て禪化したものと云ふことである、水因を悟ると云ふ十六開士が、互に浴僧のときである、妙觸は水が

⑨妙觸宣明。このことは楞嚴經の五に出づる故事にして、印度の神話を以て禪化したものと云ふことである、水因を悟ると云ふ十六開士が、互に浴僧のときである、妙觸は水が

⑩率陀。此には妙足と云ふ、都史陀とも云ふ、夢に上天す。

⑪觀音院。趙州録の頌に、趙州

① 天岸和尚、計音至る、上堂。眉毛を相結ぶ、山川萬里、永く音容を絶つ。方に道義を見る、如是如是、不是不是、誰か知る。一路涅槃門、同條に生じて同條に死せず。

結夏小參。九旬克期、橋柱を抱いて、澡洗す。三處夏を度る、笞帚蛾眉を畫く。祖師門下、這般の普底を管せず、只出格の機を要す。抑勒を規繩に受けず、威儀を、芥曠に混せず。窃窃窺窺、別に生涯あり。若し能く恁地ならば、西天の蠟人氷、東土の鐵彈子、也た是れ閒家。澆具、諸仁者他の出格の生涯を知らんと要する麼。茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す。

復た擧す。僧古德に問ふ、「如何なるか是れ乾坤を定むるの句。」德云く、「十日一雨、五日一風。」拈じて云く、「寸刃を施さず、坐ながらに太平を致す。古德なきにあらず、只是れ未在、何んぞ也、堯舜の君も猶ほ化に稽ほる。」

次の日上堂。十五日已前、蓋蓋口天に向ひ、十五日已後、紫茸毘を靴却す。正當今日、鞞。主丈を卓して云く、「寒山管せず安居の事、須彌頂上に

- ① 南、石橋の北、觀音院裏彌勒有り。
- ② 渠。きよのう、渠は彼なり、他人を云ふ、儂は我なり。
- ③ 天岸和尚。惠廣禪師、佛國高峰に嗣ぐ、夢窓の同參。
- ④ 一路涅槃門。楞嚴經五に出づ。
- ⑤ 同條。當今でなら、おまへとならばどこまでもじや。
- ⑥ 抱橋柱。普燈十七那庵遺の章に出づ、今は九旬克期の規矩に取りついて居るがわるい、たゞ大死一番せよとなり。
- ⑦ 澡洗。あらふ。
- ⑧ 普底。目くら。
- ⑨ 規繩。禪堂の規律。
- ⑩ 威儀。叢林の禮式。
- ⑪ 芥曠。狼藉の義、草のぼうぼう生えたるにたとへる。
- ⑫ 窃々窺々。幽閑の義。
- ⑬ 澆具。澆ははたし、日本のやうにたゞの道具と云ふこと。
- ⑭ 十日一雨。王允論衡に、太平

鞞繩を打す。」

五頭首の秉拂を謝する上堂。鷲嶺。一音を以て演法、衆上隨類各得解、龍山五音を借つて玄を談ず、絶唱古曲人の會するなし。且く道へ驚嶺底是、龍山底是。良久して云く、「牡丹一日紅に、松柏千年翠なり。」

上堂。主丈を卓すること一下して云く、「會するときは則ち、途中受用、會せざるときは世諦流布。」又卓一下。

① 鏡空首座を謝し、兼て大衆の普請、地を鑿し土を般ぶことを謝する上堂。淨土院を革めて延壽堂と爲す。眉間の劔、肘後の符、鏡裏の空、日中の斗、大人の境界、格量を超ゆ。普請諸人自ら看取せよ、凡地佛地高低没し、淨土穢土異趣に非ず。龍山恁麼の擧唱、也

の時、五日一風十日一雨。

- ① 稽。とゞこほると訓す、稽は滯也。
- ② 靴却紫茸毘。靴は履空也(くつのまはりがは)又覆也、拔也、紫茸毘は紫色長毛の茸亂を以て毘となしたるもの、外國の珍産也と云ふ、つまりいへば、むしろつくとて毛をむしつてのけた、透脱自在の境界じや、茸はむちやくちやはえるの意、靴却はひきのばすなり。
- ③ 一音演法。維摩經の佛國品に出づ。
- ④ 途中受用。途中は彼岸に達する途中、受用ははたらき。
- ⑤ 世諦流布。世わたりのやりかた。
- ⑥ 鏡空首座。淨心、規庵圓に嗣ぐ、夢窓の法姪にて、前堂を退職するゆゑの上堂。
- ⑦ 鑿。すぐと云ふこと。

- ① 延壽堂。病僧の入る舎。
- ② 鏡裏空。一切さはりなき意。
- ③ 日中斗。斗は斗の古字。
- ④ 大人。智度論七十二に「菩薩は福德智慧積聚の故に、應に是れ大人なるべし」とあり。
- ⑤ 淨土。他界。
- ⑥ 穢土。此界。
- ⑦ 鞞縣茶瓶。傳説に鞞縣より出すところの茶瓶は口多しと、方語に多嘴多口、兩方に口があるゆゑ、しやべるなどと云ふこと。
- ⑧ 飢逢王儲。法華經授記品に出づる偈。
- ⑨ 糞裏走卻鼈。たしかなことをとりがしたる義。
- ⑩ 才。わづか、機の字の略なり。そこへと云ふこと。
- ⑪ 贅疣。いらぬいぼ。
- ⑫ 大用現前。大活動の發露。
- ⑬ 捏聚放開。自在自由、天上天下、思の儘なること。

た未だ免れず、平地に骨堆を起すことを。拂を以つて牀を撃つて云く、「山前麥熟して桑麻緑なり、饜頭を颯下して歸去來。」

上堂。擧す、雲門大師云く、「佛法は太だ殺あり、只是れ舌頭短し。」良久して云く、「長也。」拈じて云く、「雲門の舌頭短きときは則ち上梵天を柱へ、

長きときは則ち口中を出でず。諸仁者、他の舌頭の落處を知らんと要する麼。噫、鞏縣の茶瓶。」

上堂。寒の時は普天寒し、熱の時は普天熱す。飢ゑて王膳に逢ふて餐すること能はず、剛ひて言ふ。甕裏に鼈を走卻すと。咄。

上堂。一葉。才かに落ちて天下秋を知る、祖意教意、好肉の贅疣。喝。一喝。

解夏小參。靈機活脱、大用現前、捏聚放開、軌則を存せず、殼に滯り、封に迷ふ底、其の體裁を知ること莫し。大覺世尊、二千年前、

虚空裏に向つて、長短の劃を著く、之を法歲期限と謂ふ。結の時解あり、三脚の蝦蟇飛んで天に上る。解の時結あり、無角の鐵牛少室に眠る。

倘し能く此に於て薦得せば、便ち見る釋迦老子、七手八脚、便ち露れ了。

れり。其れ或は未だ然らずんば、山中九十日、雲外幾千年。復た擧す、僧。古德に問ふ、「九旬禁足の事如何ん。」德云く、「蠟人の機に墜ちず」と。拈じて云く、「古德恁麼の答話、只壁を照す月のみありて、

且つ葉を吹くの風なし。」次の日上堂。主丈を拈じて云く、「聖制已に周畢、人人。精勤を圖はしむ。唯。木上座あり、舊に依つて黒糞、是れを虚しく一夏を度ると爲ん

耶、別に長處あり耶。」主丈を卓すること一下して云く、「白日官路に行き、三更孟津を過ぐ。」

新舊兩班を謝する上堂。一進一退、水銀地に墜つ。左之右之、善盡し美盡す。謂ふこと莫れ南禪口門窄しと。山河大地齊しく懽喜す。拂を以て

牀を撃つて、下座。上堂。人人自ら光明の在るあり、看る時見えず暗昏昏、雲門大師、

沙に和して黄金を賣る。只小利を貪ることを得たり、龍山未だ嘗て這般の事を説著せず、何んが故ぞ。良久して云く、「一擧四十九。」

中秋上堂。三四を吞却し、七八を吐卻す。吞吐機前眼眉に似たり、

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

① 滯殼。殼はからなり、皮なり、書狀の袋なり、封筒なり。

② 封。封も封筒なり、殼に同じ。體裁。しかた、もやうのきりもり。

③ 三脚蝦蟇。なぜなれば。無角鐵牛。なぜなれば。七手八脚。とりちらした。

④ 古德。洛京栢谷禪師。蟻人機。戒臘を守りたる古徳にもはぢぬ。蟻は又臘に作る。

⑤ 聖制。佛の定めたまひし夏安居も、をはりて。精勤。精進勤苦。

⑥ 木上座。主丈子を云ふ。莫謂。褒美の語むたらぬ。人人自有光明在。雲門大師上堂、人々暗昏昏々作麼生か自己の光明。

⑦ 吞却三四。傳燈十五、投子大同禪師の章に出づ。⑧ 廣寒宮。山堂肆考宮集に云く、唐の明皇八月望日、月宮に遊

び天府の勝を見るに、廣寒清虚の府と曰ふ、素娥十餘人、皆皓衣白鸞に乗じ、桂樹の下に舞ふと。月宮殿のことなり。

⑨ 惡書記。惡は未詳。⑩ 無賓主話。趙州錄に趙州示衆の語。

⑪ 一不成。初めでければそのとほり。⑫ 二不是。次にできたらさうでない。

⑬ 摩訶衍。具に摩訶衍那と云ふ、摩訶は大衍、那は乘也。⑭ 南山和尚。士雲禪師、東福に住す、建武二年十月七日化す、年八十二。

⑮ 十虚。十方虚空なり、楞嚴經九に、汝等一人眞を發し元に歸すれば、此の十方空皆悉く消殞す云云。

⑯ 舜若多神。此には空と譯す、これも楞嚴經の三に出づ。⑰ 一瓶凍。淮南子の説山訓に出づ。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

① 廣寒宮裏乾坤闔し。

上堂。大道本平夷、愚人自ら佇立す。良久して云く、「鮎魚竹竿に上る、

駟馬追へども及ばず。」

上堂。主丈を拈じて云く、「聲前容を露はし。」丈を卓すること一下して

云く、「句後跡を削る、畢竟如何ん。」丈を擡けて云く、「三雙六隻。」

開爐。② 願書記を謝する上堂、煥涼交替、彼此相知る。風頭暖なる處、

商量時を得たり。拂を以て牀を撃つて云く、「三箇柴頭品字を成し、無

賓主の語繁詞を絶す。」

後堂首座を謝する上堂。③ 一不成、④ 二不是、一著を放過すれば第二に落

在す。苟し能く第二を諱得し去らば、摩訶衍の法別事なし。主丈を卓す。

⑤ 南山和尚遺書至る、上堂。化緣已に盡きて、一機を撥轉す。⑥ 十虛消殞

し、萬象號悲す。當頭突出す大人の相、舜若多神笑つて眉を展ぶ。

冬節小參。⑦ 一瓶の凍を觀て、天下の寒きを知り、一管の灰を觀て、天下

の暖きを知る。造化の公憑、全く昭著し、己靈の神用、自ら現前す。⑧ 海

山童、悉く其の分あり、寒梅瘦竹發機せずといふこと靡し。此に於て薦

① 海山童。童僕、未冠の稱。

② 客作。法華經の信解品に、客

作の賤人とあり。

③ 關楔子。からくりの楔どこ

ろ、緊要の箇所也。

④ 至節。冬至。

⑤ 聖節。後醍醐天皇御降誕、十

一月二日の天長節。

⑥ 地不黃。黃は地の色。

⑦ 天不玄。玄は天の色。

⑧ 端拱。支那禮式ふうにて、う

やまひてたゞしく手をこまね

いて、座して最敬禮したてま

つる。

⑨ 四頭首。頭首とは、古參の上

士にて、十四人あり、今は四

人の最上士をいふ。庫司、典

藏、知客、直日。

⑩ 人天眼目。この二句前堂首座

を謝す。

⑪ 藉此。この一句子。

⑫ 摩訶衍法。摩訶衍は大と譯す、

大法也。後堂首座を謝す也。

⑬ 建化門中。この句は藏主を謝

す。

⑭ 十二分教。十二部經とも云ふ、

修多羅、祇夜、伽陀、和伽羅、尼

陀那、阿浮陀達磨、伊帝目多

伽、闍陀伽、阿波陀那、優婆提

舍、優陀那、毘佛略。

⑮ 翰墨場裏。この句は書記を謝

す。

⑯ 居山。この句は靜山首座を謝

す。

⑰ 大歇。不詳。

⑱ 盤礴。箕踞の狀、わだかまる。

⑲ 迸裂。走散也、へい、はうの

二音あり、今ははうとよむべ

し。

⑳ 光芒。きらきらする光なり。

㉑ 東福。京都五山の一。

㉒ 雙峰禪師。名は宗源、東福十

二世、聖一國師に嗣ぐ、南禪

にも住す、後宇多天皇の歸信

厚し、建武二年十一月二十二

日化す。

㉓ 慧日山。東福の山號。

㉔ 絕楚新。楚はいばらなり、出

「今上皇 帝聖壽萬年。」

① 四頭首の乗拂及び靜山首座の至るを謝する上堂。我に一句子あり、徧

界會て藏さず。② 人天眼目、此に藉つて豁開し、摩訶衍の法、此に

なし。」

至節上堂。圓相を以て圓相を打して云く、「陰は這裏に向つて剝盡、分

毫を減せず、陽は這裏従り生じ來る、一絲を添へず、也た減せず也た添へ

ず、泥人突出す黄金の面。」

③ 聖節、上堂。威音王前、地黃ならず。天玄ならず。威音王後、坤六

斷乾三連、正當今日又且つ如何ん。④ 端拱して云く、

「今上皇 帝聖壽萬年。」

⑤ 四頭首の乗拂及び靜山首座の至るを謝する上堂。我に一句子あり、徧

界會て藏さず。⑥ 人天眼目、此に藉つて豁開し、摩訶衍の法、此に

宣揚す。建化門中、是れを十二分教と謂ひ、翰墨場裏、喚んで四六の文章と作す。龍山與麼の説話、是れ好肉に贅を生ずること莫し麼。良久して云く、「山に居して方に始めて山の静を知り、世に處して誰か能く世の忙はしきを忘れん。」

大歇首座を謝する上堂。道人相見の時、彼此漆桶を呈す。主なく賓なく、照に非ず用に非ず、大歇場中に盤礴す。羣を驚し衆を動ずることを要せず。

臘八上堂。昨夜虚空、星斗を迸裂し、光芒を失卻す、大地の衆生都て識らず。唯瞿曇のみ有つて自ら著忙す。且く道へ著忙底是、識らざる底是。擲を以て牀を撃つて云く、「梅は須らく雪に三分の白きを遜るべし、雪も亦梅に一段の香を輸す。」

東福、雙峰禪師遺書至る、上堂。一株の大樹忽ちに凋零、慧日山顛、楚新を絶す。將に謂へり後昆覆蔭なしと。昌々たる嫩桂又春に逢ふ。桂昌庵の後に葬る。上堂。三通鼓罷んで、簇々として上り來る、佛法人事、一時に周

でて高きものをかゝるで、人の類を出づるを翹楚と云ふ、名僧を失ひしにたとへる。

桂昌庵。東福の塔頭の名。

三通鼓罷。五燈會元二十、淨居尼慧温の章に出づ。

簇々。むらがること。

人事。世間の事がらをすること。

斲劫。むかし。

紀極。紀は記也、極は盡也、之を記して究書すべからざるを云ふ。

交頭。あはれ、新舊のしほざかひ、衲來正中來の位を見聞せよ。

樂在其中。論語述而篇にあり。

來年更有新條在。野客叢書六羅隱の詩。

惱亂。擾亂と同じ。

被風吹別調中。詩格十六、高駢風箏の詩。

月建。孟春夏正建寅月。

律。樂器。

玉曆。舜が歷山に耕して玉曆を河際の岩下に得て、舜天命の己に在るを知りて、道を體して倦まずと云ふ故事あり。

畢す。法眼禪師、與麼の垂示、只金に陪して鐵を賣ることを知つて、覺えず利を見て義を忘るゝことを。龍山即ち然らず、三通鼓罷んで、四衆雲の如くに臻る。客と作ることを會せざれば、主人を勞煩す。喝一喝。除夜小參。曠劫已來、今日に暨ぶ、鳥飛び兔走り、暑往き寒來る、其の蹤迹追尋すべからず。並に是れ收めて舊曆日に歸す。明朝從り去つて、未來際に至るまで、劫波の成壞、晷運の改遷、其の紀極考究すべからず。畢竟夢幻の中に付在す。歲夜斯に臨み、元正未だ至らず。乃ち是れ交頭結尾底の時節、過去に屬せず、亦未來に非ず、喚んで現在と作すも也た得ず。者裏に到つて、甚の舊歲今宵去り、新年明日來るとか説かん。須らく知るべし萬物氣候の爲に遷されず、諸人元虚空と壽を同じうす。倘し能く恁麼ならば、今夜分歲、大家相聚つて冰霜を喫す。樂其の中に在り、其れ或は未だ然らずんば、來年更に新條の在るあり、春風に惱亂して卒に未だ休まず。復た擧す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ雲門の一曲。」門云く、「臘月二十五。」拈じて云く、「太音希聲、今古を該括す。即今臘月三十日、謂ふこと莫れ又風に別調の中に吹かると。」元正上堂。月建今日に丁り、歲君新に律を制す。物々祥符を獻じ、頭々玉曆を撃ぐ。甚に因つてか此くの如くなる、道ふことを見ずや、一吉一切吉と。

山城州 靈龜山 天龍資聖禪寺語錄

侍者 宏遠 智光 彌浩等編

曆應二年十月、敕を降し、後醍醐上皇の爲にし奉つて、離宮を革めて梵苑と作して、乃ち基を開かしむ。

康永四年四月初八、新に法堂を開く。此の日、武將兩殿下法筵に光臨す。

上堂。先づ佛誕の儀を伸べ罷んで、乃ち云く、三世の諸佛、世に出現すること、唯法を説いて衆生を濟度せんが爲なり。是を以て四辯八音、並に説法の軌範たり。鹿苑鷲嶺、亦是れ度生の道場、祖師門下、單提獨弄、直に本分を示す。教門に同じからず、然も其の旨歸を鞠

むれば、亦只傳法救迷の爲めなり。故を以て、西天の四七、東土の二三、各々相承するに、傳法の偈を以てす。達磨大師の云く、「吾れ本茲の土に來り、法を傳へて迷情を救ふ。」便ち見る少室雪中に、臂を斷じ、黃梅、夜半に衣を傳ふることを。正法流通して踵を接し武を躡む。樹下石上、幽洞深巖、處として法幢を建てずといふことなし、機あれば必ず心印を傳ふ。百丈大智禪師創めて叢林を興してより以來、震旦搏桑、列刹相望む。大小異なりと雖も、皆法堂を構へて、宗乘を舉唱す。茲者、本寺基を開き、歳序未だ幾くならざるに、厨庫僧堂、三門兩廊、未だ其の功を畢へずと雖も、佛殿落成の後、先づ法堂を立つ。此れ其の佛祖の本意、説法利生に在ることを表するものなり。今に如

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 上

- ①山城州は、山城國葛野郡嵯峨。
- ②靈龜山天龍資聖禪寺。夢窓國師年譜に曰く、曆應二年己卯師六十五歳、西芳精舎に在りて六月二十四日、師、門人に謂ひて曰く、昨夢みらく、吉野上皇比丘身を現して、鳳鸞に乗じて龜山の行宮に入る。秋八月十六日上皇仙し去る、征夷大將軍(尊氏)勅を奉じて追修の道場を龜山の行宮に建ち、詔累りに降つて師を請じ、明山とす、左武衛將軍(直義)、夢に金龍の寺の南の河中より出づ、故に寺を名づけて天龍資聖禪寺と曰ふ。
- ③宏遠。淨妙寺方外宏遠、國師に嗣ぐ。
- ④智光。絶照、同上。
- ⑤彌浩。無際、佛國に嗣ぐ。
- ⑥曆應二年十月。普明國師造營記に云く、北朝の光明天皇年號、此の年南朝延元四年八月十六日、後醍醐天皇吉野にて崩御、光嚴天皇、尊氏將軍君臣合謀之あり、龜山殿の離宮を禪苑に改むるの議定ありて、帝、師へ開山のこと仰せ出され、十月五日滿中陰に付き、院宣を下され、寺の封疆を定められ、其後追追造營あり、前後七年をへて康永四年始めて開堂の儀式あり。
- ⑦離宮。天子行處の別署を云ふと文選に出づ。
- ⑧康永四年四月初八。光明天皇の年號、この年八月晦日天龍寺供養佛殿慶讚の法語下卷にあり、後醍醐天皇御七年御忌なり、師七十一歳。
- ⑨法堂。はつたうとよむべし、禪寺の大殿にして説法問答するの堂、七堂伽藍の一。
- ⑩武將兩殿下。尊氏、直義、この日光明天皇、この翌日光嚴大上天皇臨幸。
- ⑪四辯。法界次第下に、一義無礙、二法無礙、三樂說無礙、四無礙辯、又無礙智と曰ふ。
- ⑫八音。如來の音聲言辭清雅、諸衆生をして聞即悟解せしむ、一に極好音、二柔軟音、三和適音、四尊慧音、五不女音、六不誤音、七深遠音、八
- ⑬不竭音。
- ⑭鞠。推し窮む。
- ⑮少室。二祖慧可大師。
- ⑯斷臂。拈香の語に見ゆ。
- ⑰黃梅。五祖弘忍大師なり。
- ⑱夜半傳衣。六祖惠能大師が五祖のところで、よるひそかに法寶及び袈裟を傳へて、衆の争を止むの故事。
- ⑲百丈。大智禪師は馬祖に嗣ぐ、唐の名僧にして叢林の規矩といふものを製して、百丈清規といふ。
- ⑳列刹。諸寺諸山の名院。
- ㉑偶諧。偶は合なり、諧なり、諧は和なり、合なり、調なり。
- ㉒符契。符節契券。
- ㉓厨。門戸に署するの文を云ふ。
- ㉔法雷。華嚴經入法界品に、亦大震の能く法雷を震ふて、群品を啓悟せしむるが如し。
- ㉕宸翰。二字つゞけていへば、どちらも御筆なり。

來降誕の日に當つて、已に法堂周備を得、時節因縁、偶諧符契を合せたるが如し、又辱なく

朝廷額を賜ふて、扁して法雷と曰ふ。宸翰奎畫、鳳舞ひ、龍翔ける、直に得たり法雨將に降らんとす、天瑞兆を旌はし、仁澤普く被らしめて、世洪恩を仰ぐことを。如來法を以て、國王大臣に付囑す、慈鑑の効此に昭著す。懿いなる哉、斯の法布益窮りなし。謂は所る法といふは何んぞ耶、乃ち是れ衆生圓具の本法なり。聖に在つても増せず、凡に在つても減せず、之を大いにするときは則ち宇宙に彌り、之を細かにするときは則ち毫釐に攝す。古に亘り今に亘つて、不變不異、諸佛所説、大小權實、半滿偏圓、皆悉く此の法の名義なり。世間の所有艸木瓦礫、一切衆生の動作施爲、此の法の相用に非ずといふことなし。所以に道ふ、森羅及び萬象、一法の所印なりと。倘し能く恣廢に會得せば、如來未だ出世せざるに、度人已に周畢し、此の堂未だ營造せざるに、法門自ら現成す。山僧今日、此の座に陞る、別に衷私底の法門の人の爲に説くべきなし。只本師釋迦如來及び盡虛空界の諸佛菩薩、諸の賢聖衆、現前の大衆、

- ① 奎畫。奎は筆、畫は文字なりとみるべし。
- ② 慈鑑。慈悲昭鑑。
- ③ 懿哉。醇美也。
- ④ 毫釐。十絲を毫、十毫を釐といふ。
- ⑤ 大小。菩薩、聲聞。
- ⑥ 權實。權は三乘なり、暫時かりにとく、實は一佛乘なり、古今不易の法。
- ⑦ 半滿。四教の内藏を半滿、通別圓を滿字教と云ふ。
- ⑧ 偏圓。偏は化法四教の内、藏、通、別の三教を云ふ、聲聞、圓覺、菩薩は一方に於たよる、圓教は佛境界にのみ説く。
- ⑨ 衷私。衷は方寸の蘊む所なり、不偏なり、私は公ならざる、と、つまりいへば、不偏不黨のこと。
- ⑩ 權。音例、むなきなり。
- ⑪ 廣長舌。如來三十二相の山の二十七

外護の尊官、堂中の樞梁、燈籠露柱、無邊刹海の人畜艸芥と、各廣長舌を出して、同じく大法輪を轉するのみ。正當恣廢の時、且く道へ什麼邊の事をか成し得たる。主丈を拈じて云く、看よ看よ、釋迦如來、今日天龍が主丈頭上に在つて、周行七步、天を指し地を指して、普く大衆に告げて言はく、『我れ今再び降誕し、此の堂新に落成す、賢聖沓り臻り、人天交接す。』人々箇々、都て是れ獨尊、牌扁の奎畫、梁柱の方圓、物頭々、演法ならずといふこと靡し、奇なる哉奇なる哉。正法聯綿して、未だ嘗て滅せず、靈山の付囑自ら人あり、婆伽至尊、與廢の垂示、是なることは則ち是れなり、只これ生を降し物に應ずる底の法門なり。諸仁者、如來未だ胞胎を借らざる已前の消息を知らんと要する麼。主丈を卓して一下して云く、『諦聽、諦聽。』

結制小參。問答罷んで乃ち云く、『向上の玄關機路絶す、四維上下一團の鐵、此の關是れ行人を拒まず、自らはれ行人透ること得ず、從上の諸大宗師、各一方に據つて、宗乘を扶立す。皆此の關を設けて以て、方來を接す。千戴の下、儼然未散、天龍門下、營功未だ畢らざるに、結

- ① 沓。音たふ、重也、合也。
- ② 奎畫。宸奎勅畫也。
- ③ 婆伽至尊。婆伽は佛、至尊は世尊。
- ④ 諦聽。はつきりきけの意。
- ⑤ 結制小參。兩安居の、夏のはじまる日の小參。
- ⑥ 四維。維は方隅なり、この四維は東、西、南、北。人の四維は禮、義、廉、恥。
- ⑦ 關。向上の玄關。
- ⑧ 宗乘。宗旨のたてかた。
- ⑨ 方來。四方よりあつまる雲水僧。
- ⑩ 儼然未散。靈山一會の佛、菩薩、羅漢たち、儼然未散を見たと云ふこと、天台の智顛禪師、南岳に在りて法華經を誦して法華三昧を悟り、藥王品の「是真續進、是真眞法、供養如來」と云ふに至りて、感得するの故事。
- ⑪ 營功。經營の功業。

制斯に臨む。山僧別に作略の施すべきなし、只要す諸人此の玄關裏に在つて、禁足安居することを。謂ふこと莫れ、此の寺未だ信堂あらずと。什麼の處に向つてか、剋期修證せんと。今夏荷も能く此の關を透得せば、還つて許す諸人朝に、高穹を躡んで、以て上方の香積厨中に到つて飯を喫し、暮に厚地を縮めて、下界の天龍寺裏に歸つて打眠することを。其れ或は未だ然らずんば、更に長期を立して、以て彌勒下生の時を待つに一任す。何んが故ぞ、有利無利行市を離れず。拂を以て牀を撃つ。復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」後來圓悟禪師拈じて云く、「天寧は即ち然らず、如何なるか是れ諸佛出身の處、董風自南來、殿閣生微涼」と。拈じて云く、「雲門の古曲、纔かに聽くに堪へたり、又風に別調の中に吹かる。」次の日上堂。西天の蠟人冰、東土の鐵彈子、伶俐の衲僧、敢へて介視せず、大衆會す麼。膝下の黄金、鍬に博へず、八九元來七十二。四頭首の乗拂を謝する上堂。天龍一柄の拂子あり、一日我が此の四頭首に分付して、以て結制の佛事を作さしむ。便ち見る横拈倒用、人天の眼目に點開し、左擧右揮、摩訶衍の法を演暢することを。微妙の章句、此れ從り出生し、一代藏教、詮注することを勞せず。偉なる哉、一柄龜毛の拂、無邊の大法輪を轉じ得たり。今日舊に仍つて還つて天龍が手裏に歸す。亦要す此の拂子、山僧に代つて說法一上して、以て頭首の道誼を謝せんことを。拂を擧げ良久して云く、「休みね休みね、太褻は卻つて貶と成る。」上堂。無量の妙義、百千の法門、斬新の日月、特地の乾坤。慕に主丈を拈す、天龍が主丈人情没し、今日底を竭して盡く掀翻す。敢て諸仁者に問ふ、什麼の處に向つてか、氣を出し去ることを得ん。主丈を卓すること一下して云く、「峯轉じて路なきかと疑ひ、谿斜にして別に村あり。」端午上堂。護身の法、肘後の符、羣邪自ら辟け、百福克く孕はる。咄。好事も無きには如かず。

- ① 高穹。穹蒼は蒼天也、おほぞら。
- ② 上方。うへのつた、維摩經に出づる故事。
- ③ 香積。禪寺にて庫裏のことを香積界と云ふ、故事別にあり。
- ④ 縮厚地。地をちぢめるで距離を近くすること。
- ⑤ 下生。五十六億七千萬歳の後じや。
- ⑥ 有利無利。あちらが得をして、こちらが得をしても、問屋市場を外へはゆかぬ。
- ⑦ 東山水上行。一陽來復の端的、雲門のこの語を圓悟が擧揚せしを聞いて、大惠禪師は大悟せられた。
- ⑧ 介視。介は芥と同じ、しばらくも目をとめぬで、塵あくたのやうに見るの意。
- ⑨ 膝下黄金。膝の下にそなへてをれば不足はない。
- ⑩ 鍬。眞ちう。

を點開し、左擧右揮、摩訶衍の法を演暢することを。微妙の章句、此れ從り出生し、一代藏教、詮注することを勞せず。偉なる哉、一柄龜毛の拂、無邊の大法輪を轉じ得たり。今日舊に仍つて還つて天龍が手裏に歸す。亦要す此の拂子、山僧に代つて說法一上して、以て頭首の道誼を謝せんことを。拂を擧げ良久して云く、「休みね休みね、太褻は卻つて貶と成る。」上堂。無量の妙義、百千の法門、斬新の日月、特地の乾坤。慕に主丈を拈す、天龍が主丈人情没し、今日底を竭して盡く掀翻す。敢て諸仁者に問ふ、什麼の處に向つてか、氣を出し去ることを得ん。主丈を卓すること一下して云く、「峯轉じて路なきかと疑ひ、谿斜にして別に村あり。」端午上堂。護身の法、肘後の符、羣邪自ら辟け、百福克く孕はる。咄。好事も無きには如かず。

- ① 道誼。誼は義に同じで、よしみなり。
- ② 太褻卻成貶。あまりほめすぎると、おまげになる、これは警語、也褻也貶がまあよい。
- ③ 出氣去。むれをばらすことができやうとなり。
- ④ 辟。音せき、のぞく也、退くるなり。
- ⑤ 孕。信也、育也、采也、鳥の卵を孵すが如く、其の期を過らぬが如く信を失はざること、既文に出づ。
- ⑥ 上堂。この語、水牯牛の話を提示す。
- ⑦ 珊瑚。玉の聲の形容なり、つゆのあめのおとが。
- ⑧ 簇簇。むらがり、かへつて一種の風景じや。
- ⑨ 水牯牛。めうしの水牛。
- ⑩ 南泉。傳燈八、南泉の章。
- ⑪ 訥訥。或は聲訥に作る、あやまり。

半夏上堂。僧、南泉和尚に問ふ、「祖々相傳ふ、箇の什麼をか傳ふる。」泉云く、「一二三四五」と。天龍は即ち然らず、今日若し人ありて、「祖々相傳ふる、箇の什麼をか傳ふる」と。便ち他に對して道ふ、今朝是れ六月朔、且く道へ、誦訛什麼の處にか在る。良久して云く、「是れ神仙の客にあらずんば、徒に洞中を話することを勞せん。」

上堂。主丈を拈じ大衆を召して云く、「會す麼、今年六月冬の令を行す、炎帝の權威未だ一新ならず。將に謂へり乾坤大信に乖くと。烏藤舊きに仍つて黒糲皴。」主丈を卓す。

上堂。文殊の眼を剝卻し、觀音の耳を塞卻して、聲色叢中に盤礴す。贏ち得たり、干戈自ら止むことを。不是不是、勇士那んぞ肯て家中に死せん。

解夏小參。問答罷んで乃ち云く、「佛祖頂額の一著子、今古に輝騰して差異なし。迷流は日に用ひて知らず、飯籬の邊に坐して自ら餓死す。釋迦如來、機を見て作して、方便門を開く、年々一夏九旬、人をして剋期取證せしむ。制約嚴厲にして結あり解あり、結ぶるときんば則ち普天市地、一時に結す。漫天の網子百千重、鐵額銅頭跳不出、解くときんば則ち普天市地一時に解す。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。四海五湖皇化の裏、忽ちに伶俐の漢あり出來つて道はん、丈夫自ら衝天の氣あり、

如來の行處に向つて行かず、天龍肯て點頭せざること有り、何が故ぞ。貧從り富に入ることは則ち易く、富從り貧に入るとは則ち難し。

復た擧す、僧、趙州和尚に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」州手を以て流水の勢を作す。拈じて云く、「大衆會す麼、會するときはんば則ち途中受用、其れ或は未だ然らずんば、山僧更に注脚を下し去らん。九夏推し移つて又秋を告ぐ。不遷の義會て度さす。觀音菩薩胡餅を買ふ、放下すれば元來是れ饅頭。」

次の日上堂。西天蠟人を以て驗と爲す、東土は鐵彈を以て驗と爲す。天龍門下、今夏只無驗を以て驗と爲す、甚に因つてか此くの如くなる。道ふことを見すや、官馬印を用ひすと。

中秋宋船の網司を謝する上堂。普天市地一秋光。不動扶桑一見大唐。明月團團離二海嶠。滿船官貨孰私商。

重陽、新舊兩班を謝する上堂。一進一退、纖塵を動せず、左之右之、立處即ち真なり。箇の中の消息子を識らんと欲せば、重陽九日菊花新なり。上堂。主丈を拈じて云く、「一徑直二周遮、放下すれば也綿綿密密、

- ① 六月。時候不順で、六月に冬のさむさじや、風寒時ならず。
- ② 聲色叢中。色界聲界の眞たゞ中。
- ③ 盤礴。いつぱいになる。
- ④ 頂額。いたゞき。
- ⑤ 迷流。愚迷凡流。
- ⑥ 制約。諸制規約。
- ⑦ 嚴厲。嚴重猛厲。
- ⑧ 鐵額銅頭。修行のかたき雲水等をさす。

- ① 觀音胡餅。會元十五、靈門の章。
- ② 官馬。珠曰く、馬に印をおすは焼印なり、公儀の馬には焼印なく、其餘の馬には印があるなり。
- ③ 網司。曆歷五年の秋、幕府僧至本に命じて網司と爲し、商舶を宋國に遣し、天龍寺を造營するの資と爲す。曆歷造營記に曰く、「宋船二艘の事、當寺造營の要脚として免許せらるゝ所也、早く用意を致し、明年の秋放洋せしむるの由、網司に仰せらるべく候」と。曆歷四年十二月二十三日直義より天龍寺方丈名宛の狀あり、又網司は公儀の荷物舟のつかさ也。
- ④ 徑直。さしたし、まつす。
- ⑤ 周遮。ぐるりを一べんまはして、はいらぬやうにとめる。
- ⑥ 吒吒沙沙。びら／＼、尾のあ

拈起すれば也た。吒吒沙沙。劃一劃して云く、「本店の賣買、分文、除ら

冬至小參。鳥飛び兔走つて仲冬に届る。風籬頭に逼つて筆策を吹く。徹骨寒來る能く幾く人ぞ。剛ひて言ふ一物黒うして漆の如しと。諸仁者、還つて會すや、苟も能く會得せば、他に許す十二時辰を使ひ得て、陰陽の爲めに轉せられざることを。七十二候、二十四氣、威く掌握の中に歸す。自家の戲具にあらすといふこと靡し。何んぞ妨げん萬象森羅を以て伴侶と爲し、四相遷變を以て佛事を作すことを。然も是くの如くなりと雖も、更に須らく僧家別に生涯あることを知つて始めて得べし。且く道へ有ることを知る底の人、什麼の處に向つてか行履する。良久して云く、「曙色未だ分たず人盡く望む、天曉に至れば只だ尋常。」

復た擧す、僧首山に問ふ、「如何なるか是れ學人親切の處。」山云く、「五九盡くる日又春に逢ふ。」僧云く、「畢竟如何。」山云く、「冬至寒食一百五。」拈じて云く、「首山和尚、屋裏に金玉の舖を開いて、常頭此の僧に賣與し了れり。謂つべし善買の家には、死貨を留めずと、子細に檢點すれば、不だ免れず小利を貪つて大利を失ふことを。」

次の日上堂。一日の風雲を看卻して、一年の氣候を驗取す。此れは是れ世俗底、能く時節因縁を觀て佛性の深義を識得す、之れを出世底と謂ふ。且く道へ世俗底是、出世底是。咄、祖師門下、者般の問事を管せず。

四頭首の乗拂を謝する上堂。諸佛廣長舌を出し、皆四無礙辯を具して、大法を演暢す。天龍舌頭を動せず、別に四無礙辯あり。宗猷を擧揚す、珍重す三世の諸佛、灼然として我れに一籌を輸く。主丈を卓す。

上堂。世尊一日陞座、衆纒かに集る。迦葉白槌して云く、「世尊說法竟んぬ。」世尊便ち下座。大衆を召して云く、「會す麼、其れ或は未だ然らずんば、山僧衆の爲めに、分疎し去らん。朴涼の風度、弊猶ほ多し、法を貧しきに作る將に若何んとかせん。遂に見る二千餘載の後、三尺の杖子黄河を攪くことを。」

臘八上堂。六載の辛酸世妄りに傳ふ、誰か言ふ道を悟つて人前に出づと。虚を吠え實を唯いて今日に至る。雪は山に在り、星は天に在り。

上堂。劍を擲つて太虚に揮す。及と不及とを論せず。英靈の黠兒、猶ほ自ら佇立す。喝一喝。除夜小參、問答罷んで乃ち云く、「燠涼晦朔、春夏秋冬、終つて復た始まり、始つて復た終る。始

る動物などの尾をふりまはすを云ふ。

除。音しや、おぎのらす、錢を拂はずして買ふを云ふ。

四相。生、老、病、死。生、住、異、滅。大の四相、小の四相あり。

首山。省念禪師、風穴に嗣ぐ。

五九。冬至の後四十五日は則ち立春。

冬至寒食一百五。冬至より百六日は是れ清明、寒食の節は清明の前一日、清明は三月の節なり。

死貨。れきもの。

珍重。あつげられな、たふとし。

世尊陞座。聯燈一。

分疎。疎は疏と同じ、分明疏通の義なり。

朴涼。質朴薄涼。

弊猶多。年代久しくなり、し

くせのわるくなること。

三尺杖子。方語に不到底。

唯。狗のかみあひ。

擲劍。傳燈七に、盤山寶積禪師の云く、禪德はたとへば劍を擲つて空に揮ふが如し去云。

中に終りあり、終中に始あり。②空索索赤條條、曠劫の前、其の太初を見ることなく、未來際、其の紀極を知ること罕なり。這裏に到つて、主歳の神將措く所問し。聰明の大王算筒を擲つ、古人已むこととを獲ず。剛ひて言ふ十世古今、始終當念を離れずと。且く道へ當念未だ生ぜざる時、十世古今、何れの處よりか得來る。慕に主丈を拈じて云く、「我が此の主丈子、忍俊不禁、出來つて道ふ、今歲今宵去り、明年明日來ると。者般の事を知らば便ち休せん、更に鞏縣の茶瓶を弄して作麼。山僧唯唯、伏して處分を聽け、何んが故ぞ、道ふことを見すや、局に當る者は迷ふ、傍觀眼あり。」

復た擧す、僧佛日の弼禪師に問ふ、「如何なるか是れ毘盧の印。」日云く、「草鞋雪を踏む。」僧云く、「學人不會。」日云く、「步步蹤を成す。」拈じて云く、「佛日和尙、口を開かば膽を見る、妨げず赤心片片なることを。若しこれ天龍ならば、又且つ然らじ。如何なるか是れ毘盧の印、印文已に露れり、學人會せず、幸に是れ會せず、會せば即ち冬瓜の印。」

歲節上堂。拂子を豎起して云く、「舊歲這裏に向つて去り、新年這裏より來る。試に者裏に向つて高き眼を著けよ。元正祚を啓いて、太だ奇なる哉、何を以てか驗と爲す。」拂以て、牀を擧つて云く、「春信潛かに通す雪裏の梅。」

①空索々。索々はおそろふこと。
 ②唯々。承知したといふへんじ、よし／＼なり。
 ③傍觀。なみ目八目。
 ④佛日弼禪師。淨惠戒弼、育王蓮に嗣ぐ。
 ⑤冬瓜印。にせいんのたとへにしたるなり、冬瓜の皮でつくりし印。

①宵新舊兩班を謝する上堂。擧す、雪峯一日陞座、大衆を召して云く、「看よ看よ東邊底、看よ看よ西邊底、爾若し會せんと要せば、主丈を拈じて擲下して云く、者裏に向つて會取せよ。」拈じて云く、「雪峯和尙、一擧兩得、更に剩法なし。山僧別に伎倆なし、只要す諸人故を温ねて新しきを知らんことを。大衆を召して云く、看よ看よ東邊底、看よ看よ西邊底、會す麼。」良久して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂。拄杖を拈じて云く、「見る麼。」卓一下して云く、「聞く麼、我を知り我を罪するは、其れ惟主丈乎。」丈を拈げ、下座。

佛涅槃上堂。二千年前、野火燒けども盡さず、二千年後、春風吹いて又生ず。柳堤花塢芳草の岸、波旬舞袖の輕きに一任す。

三月旦上堂。檀那の光臨を謝し奉る。花腮露を含んで媚び、柳眼烟を帯びて眠る。將に謂へり東皇此の令を行す、看來れば都て是れ舊青氈と。何を以てか驗と爲ん。看よ看よ、三世の如來、歷代の祖、毘耶室裏鞞鞞を打す。主丈を卓す。

①太上天皇。光嚴院天皇、貞和元年八月二十九日なり、師、說法二星の降ることを感す、土皇大悅、物をたまふ。
 ②綵。まじる、異色の物の相集るを云ふ。
 ③退院。師年七十二歳、貞和二年三月十八日退院。
 ④七年。天龍寺造營は七年もかかった。
 ⑤業債。つみの借金で、罪業の負債との略也。

①太上天皇、臨幸、上堂。春光と祥光と相映じ、和氣と瑞氣と。綵淨なり。奇なる哉、斯の吉兆、諸人會すや也た不や。中原の大寶自然に至る、遼天の高價誰あつてか酬いん。會不會酬不酬。主

丈を卓して云く、「塞北安南一道に收む。」

退院の上堂、「不効汾陽付屬誠。」
七年、業債董二修營。今朝始有爲人處。三下蓼蓼退鼓聲。」

再住天龍資聖禪寺語錄

侍者 周 澤 編

師、觀應二年辛卯七月二十日、陞座。拈香

して云く、「此の一瓣の香、恭しく

今上皇帝

太上天皇の爲めに、睿算萬歲萬歲萬萬歲を祝延

したてまつる。恭しく願はくは、聖德滌らず、

永く神符の籙に膺り、皇謨變せず、久しく

天授の圖を受けたまはんことを。

①周澤。字は龍湫、國師に嗣ぐ、南禪・天龍・建仁等の諸大刹に住す、不動尊をまがく名僧なり、俗に妙深の不動尊といふ。
②觀應。北朝崇光院の年號、この元年二月八日師七十六歳、光嚴光明兩太上天皇・太皇太后・皇太后諸宮妃官女等、師を内道場に請じて各衣孟法名を受け給ふ。光嚴法皇是の

時法號を受けて無範和尚といふ。同二年は師七十七歳なり、この歳の九月晦日示寂す。
③膺神符之籙。文選四十八揚雄が文に、「天と神符を割き地と靈契を合す」とあり、籙は圖書なり、天子の即位の次第を未來にかきたる書なり、膺は當る也。
④天授。天のあたふるところの

次に香を拈じて云く、「此の香、征夷大將軍及び兩副將軍の爲めに、祿算を資陪し奉る。伏して願はくは、身宮久しく保ちて上を輔け下を撫づるの洪勳を失はず。智海彌深うして、永く教を崇め禪を興すの大願に乗せんことを。」

又香を拈じて云く、「此の香未だ掌握に歸せざるに、徧界都て是れ眞熏す、纒かに爐中に挿めば、一會只假弄を成す。今日拈出して、前住巨福名山救證佛國禪師高峯大和尚に供養して、聊か世俗の禮儀を表す。」

師、座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「竺土大仙の心、東西密に相付す。體量廣大にして、機用靈明なり。法界の凡聖、含靈、咸く他の恩力を受く。世間の興亡治亂、此の封疆を擾さず、之を大解脫門と謂ひ、亦正法眼藏と號す。三世の諸佛、此れを證して以て大法雷を震つて、一味平等の甘雨を降澍し、歴代の祖師、此れを悟つて以て大鑪鑪を開いて、鐵額銅頭の俊流を鍛鍊す。便ち見る、五家七宗、燁燁として祖燈を萬世に續ぎ、顯演密說、恢恢として教網を羣機に張る。偉いなる哉、此れ箇の大仙の心、能く是くの如くの大佛事を成す。然も與麼なり

德光。
①征夷。足利尊氏を指す。
②兩副將軍。同直義、義詮。
③身宮。身宮、康健など云ふて、只だ身と云ふことに見るべし。宮はほしなり、十二支を十二宮に配する。
④竺土大仙心。この語は石頭禪師の參同契に出づ。大仙は釋尊なり、雪寶著語に誰か能く擧す。
⑤東西密相付。雪寶著語に眉毛を惜取せよ。
⑥體量。法性の體量。
⑦此封疆。體量。
⑧大解脫門。十方諸佛の大解脫門。
⑨正法眼藏。前々相承の正法眼。
⑩證此。此れは大仙の心なり、證はさるとる。
⑪五家七宗。五家は臨濟、曹洞、沩仰、雲門、法眼、之に楊岐、黃龍を加へて七宗と云ふ。

と雖も、只だ是れ權化門中の事を成し得たり。天龍今日、諸仁者の爲に、佛祖頂額の一著子を指出し去らん。杖を卓すること一下して云く、「還つて會す麼、其れ或は未だ會せずんば、更に箇の注脚を下さん。」又卓一下、敍謝、録せず。

復た擧す、障蔽魔王と諸の眷屬と、一千年金剛齊菩薩に隨つて、其の起處を求むるに得ず、一日因に忽ち見ることを得たり。問うて曰く、「汝當に何くに於て住してか汝が起處を求むるに得ざる。菩薩の曰く、「我れ有住に依つて住せず、無住に依つて住せず、是くの如くにして住す。」拈じて云く、「金剛齊菩薩是なることは則ち固に是、要は且つ只だ佛界に入つて未だ魔界に入らず。山僧此の山中に在ること十餘年、有る時は有住に依つて住し、有る時は無住に依つて住す。諸の魔外と相誰何せず、何んが故ぞ、豈見すや、毘耶大士の道く、「一切衆魔及び諸の外道、皆是れ我が侍なり」と。山僧與麼の體裁、金剛齊菩薩の行履と還つて優劣ありや也た無や。」良久して云く、「但だ見る皇風の一片と成ることを、知らず何れの處か是れ封疆^①」

漸に僧堂を開いて、聖僧を安奉す。云く、「識心滅盡現ニ威儀^②内外

圓明發了知^③。好是天真三昧力。無邊利濟適^④。機宜^⑤。恭しく惟みれば、西天の鼻祖^⑥。摩訶迦葉尊者、形容長く耀いて、金色を稱と爲、鬚髮自ら除いて、衲衣體に著く。半座を分つ處、十二頭陀、悉く眞光を放つ。一枝を拈する時、百萬の大衆、同じく微笑を推す。正法眼藏八字に打開し、教外の宗風十方に流布す。其の祖宗繁興の來歴を、詢め、徧へに尊者廣大の庇^⑦。庇に托す。其の德至れるかな、感じて遂に通ず、其の慈浩然たり、請すれば則ち必ず應ず。將に謂へり、鷄足山中、遐かに慈氏の下生を俟つと。且つ喜すらくは天龍寺裏、正に聖僧の全體を現すること。大坐動せず、後昆を億萬年に覆蔭し、眞儀常に存して、玄旨を未來際に紹隆す。畢竟して如何んが、此の事を保任し去らん。言ふことを休めよ選佛及第し難しと。那箇の衆生、か心空せざる。

八月旦、御忌を啓建する上堂。雨林丘に灑いで、秋色細に入り、顯氣天を領じて、涼颺地を掠む。此に於て薦得せば、法爾の玄談、歷劫未墜、其れ或は未だ然らずんば、御忌の看經、今日を始と爲ん。是是非非不

① 燁燁。さかんなること。
② 顯演密說。教は顯に、禪は密にときたるを云ふ。
③ 恢恢。大いなること、天網恢恢などの。
④ 群機。群生の根機、すなはち衆生のこんきにしたがひ。
⑤ 一著子。大悟徹底の一手段た。
⑥ 障蔽。大惠の正法眼藏に出づ。
⑦ 毘耶大士。維摩居士をいふ、毘耶離に居るを以てなり。
⑧ 僧堂。坐禪堂なり、師の年譜に曰く、夏四月柱を植て方を竭して經營す、秋七月開堂、工を百日の中に畢す。
⑨ 識心滅盡。涅槃經に、阿羅漢思惑を斷じ盡して、三界の生死を受けず、故に我生已盡と云ふ。
⑩ 圓明了知。楞嚴經の四に、此の會中摩訶迦葉の如きは、久しく意根を滅して圓明了知の心念に因らずと。

① 機宜。發すべきを機と爲し、相應するを宜と云ふ。
② 鼻祖。鼻は始也、獸の初生之を鼻といふ、人の初生之を首といふ。
③ 摩訶迦葉。釋迦十大弟子中の第一なり、迦葉波此には飲光勝尊と譯す。
④ 十二頭陀。頭陀の行者は迦葉これなり、十二頭陀は十二頭陀經といふあり、くはし。
⑤ 詢。鞠に同じ、きはむるなり。
⑥ 庇。庇に同じ、樹陰を庇といふ。
⑦ 感而遂通。易繫辭傳に出づ。
⑧ 鷄足山中。迦葉の居給ふところ。
⑨ 保任此事。法華譬喻品。
⑩ 顯氣。顯は白きこと、天上のきよらかなること。
⑪ 不合。せればよかつたにないふ意味なり、いらざることすまじきこと。

杖を拈じて云く、「天龍 不合に口 吧吧なることを、端なく笑殺す拄杖子。杖を拈け、下座。」

中秋上堂。靈山月を話する、權實偏圓區域を分つ。曹溪月を指す、

體裁手段途を同じうせず。指話機先の消息子、佛祖も也た敢て名模せず。只だ恭しく、先皇の爲めに、月旦従り今日に至るまで、大藏 眞詮を看閲するが如き、法界の含情も亦同じく此の洪因を受くるや也た無や。拂を以て圓相を打して云く、「今夜一輪満てり、清光何れの處にか無からん。」

八月十六日、多寶院に就いて陸座。香を拈じて云く、「此の香本來寥廓名相を絶す、攝化門中喚んで香と作す。三世の諸佛、其の價を知らず、歴代の祖師、只だ其の芳を傳ふ。今日拈出して寶爐に熱向して、閻浮攝化、盧舍那如來、千百億化身、釋迦牟尼大覺至尊に供養す。云々。哀むる所の善利、併せて用つて 後醍醐天皇の覺位に 回嚴す、恭しく願はくば神儀と法界の含情と同じく此の眞熏を受けて、頓に其の妙果を成せん。」座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「法身毘盧の主、大方所を包み、細無間に入る。赤條々空索々、凡に非ず聖に非ず、形名を何んの邊にか求

① 吧吧。大口のこと、口まめなやつ。
② 靈山曹溪。傳燈十八、玄沙の章に出づ。
③ 體裁手段。全體のきりもり、てぎは。
④ 指話。月を話し、月を指す。
⑤ 眞詮。具説也、喩也。
⑥ 多寶院。天龍寺の塔頭にして、後醍醐天皇を奉安するの聖廟。
⑦ 閻浮。此には勝金と譯す、南瞻部洲とも云ふ。
⑧ 盧舍那。此には光明遍照と云ふ、報身也。
⑨ 千百億化身。摩訶衍に云く、應身也、千華の上にまた千釋迦を現す、一華に百億の國あり、一國一釋迦、故に釋迦牟尼を召んで千百億化身と名づく。
⑩ 回嚴。回向莊嚴。
⑪ 朕迹。線縫のほか朕と云ふ。

めん。古に亘り今に亘る、朕迹を當處に絶す。佛々出世顯演密談、只此れ他の光影邊の事を説き得たり。祖々相承、單提直示、未だ他の天真の靈機を賣弄することを免れず。倘し能く與麼に會得せば、上攀仰なく、下己船を絶す。獨脱無依、伴侶を借らず、更に一法の障礙を作す無し。直に得たり萬象を以て戯具と爲すことを。成就も也た我に由り、破亂も也た我に由る。乃ち知る聖凡の昇降、世界の轉變、皆悉く一妄従り生ずることを。一妄亦起處なし。之に迷ふときんば則ち幻化輪廻、甘んじて自ら沈溺す。之を悟るときんば則ち本有の妙用自然に現前す。所以に道ふ、夢中明々として 六趣あり、覺めて後空々として大千なしと。若し是れ我が家の眞の種草ならば、夢中覺めて後、俱に坐在せず。且く道へ他什麼の處に向つてか行履する。拂を以て床を撃つて云く、「須らく知るべし海嶽の明主に歸することを。謂ふこと莫れ干戈太平を致すと。」

散説。夫れ以みれば、眞淨界中他なく自なし、豈に怨親を其の間に容れん哉。一迷纔かに生ずれば、萬境隨つて現す。世界の治亂、人倫の怨親、虛妄にして相酬い、虛妄にして相奪ふ。若し靈根あるものは、直

① 夢中明々。永嘉の證道の歌に、夢裏明々とあり。
② 六趣。人、天、修羅、畜生、餓鬼、地獄なり、趣とは衆生自らの業力に隨つて、六道に趣入する也。
③ 散説。この散説は史料としてよく注意すべし、殊曰く、按ずるに唐土の諸録に散説なし、普説の體格也、普説は大惠が學者を開悟するを以て心と爲して開取りよきやうに平話の如く、普く廣く説く也、又散説は寺の建立の由來、寫經、誦經、追薦の功德などを普説の如く説くなり。
④ 眞淨界。眞如清淨法界なり。
⑤ 前後際斷。際は際畔の義。
⑥ 元弘。後醍醐帝の年號。
⑦ 征夷將軍。足利尊氏。
⑧ 讒虎。楞嚴八の中に、是の故に十方如來怨謗を色目して、同じく讒虎と名づく、ながこ

下に非を知つて、一念生せず、前後際斷す。若し是れ淺識の流は、此の幻妄に縛せらるゝことを被る、休歇あることなし。或は怨に似て親なるものあり、或は親に似て怨なるものあり、怨と親と都て定相なし。此れ其の怨親俱に是れ幻妄なる所以なり。元弘大亂の時、征夷將軍、特に敕命を奉じて、速かに國敵を亡す、茲に因つて官位日々喬に遷り、名望人々觀を改む。忽ちに讒虎威嚇を長するに因つて、遂に逆鱗の回避し難きことを得たり。其の由來を釋ぬれば、併せて是れ疾かに功業を成して、甚だ叡襟に愜ふの致す所なり。古者道く、「親は是れ怨の媒と爲る」と。其れ此の謂か。茲に祥瑞雲散じて、龍馭虞らず南山に幸し、簾韶聲消して、鳳輦復た北闕に還らず。武家大息して以謂らく、悲しいかな、臣遂に讒諛に墮ちて陳謝すること及ばず、永く逆臣の謬に沈むのみ。故を以て、武家の愁歎、常流よりも切なり。敢て恨緒を以て懷に介せず、自ら丹棕を漉ぎ、特に白業を修す。専ら覺果を祈り奉らんと欲して、遂に見る大伽藍を建て、大佛事を作すことを。暑往き涼來りて、又南呂に逢ふ、一十三回、御息忽爾として斯に臨む、五千餘卷の眞詮、舊に仍つて

- ① 逆鱗。天子の御怒をたとへて、龍のどの下にある逆鱗にたとへる。後醍醐天皇はじめは尊氏を信じ給ひしも、ゆゑありて敵とし給ふなり。
- ② 不虞幸南山。延元元年十二月、吉野に遷御。
- ③ 簾韶。舜の樂を云ふ。
- ④ 北闕。闕は宮門なり、轉じて内裏の稱に用ふ。
- ⑤ 武家。足利氏をいふ。
- ⑥ 丹棕。棕はおもんばかるなり。
- ⑦ 白業。大乘義章に、善業、善法、鮮淨之を名づけて白と爲す。
- ⑧ 南呂。仲秋の月。
- ⑨ 資薦。薦は進也、推也と、向へす、資は善提の資糧の意にて、入用をてつたふなり。
- ⑩ 蘊藉。蘊は積也、衆也、つみあつめたくはへる。藉は薦藉

看閱す。加之、新に僧堂を開いて、以て清衆を安す。翅今日一會の佛事のみにあらず、盡未來 神儀を 資薦し奉らんと欲す。其の追修懇切の志を諷むれば、偏に君臣不和の中より出でたり。此れを以て之を思はゞ、謂つべし怨は親の媒たりと。然も末運の變移、三寶諸天も亦奈何ともせず、世復た騷亂して人民穩かならず。是を以て今日佛事、武家の願望に加かず。然りと雖も、懇志の之く所、聊か供佛齋僧の儀を表す、仍ほ小比丘某に命じて、此の座に陞つて、宗旨を擧揚せしむ。某、内蘊藉の徳なく、外顯脱の才を缺く、只宿世の縁遇に因つて然らしむ。忝なく 先皇の 仁顧に沐すること久し。已に八旬の暮齡に迫んで、自ら再住の家醜を揚ぐ、此れ亦前縁の然らしむる所なり。寔に 聊爾 苟且の事に非ず、縦ひ台命を受けすと雖も、卑情寧ろ安間を守るに忍びん乎、所以に敢て固辭せず、出で來つて納敗す。伏して乞ふ衆慈、各亮察を垂れよ。恭しく惟れば、

- 也、下にしく、ゆつたりとしたる徳也。
- ① 仁顧。仁恩顧眷也。
- ② 聊爾。且略也。
- ③ 苟且。草率也。
- ④ 天選。選は授也。
- ⑤ 鳳曆。左傳昭公十七年に出づる故事。
- ⑥ 堯風。論語に君子の徳は風也の義にて。
- ⑦ 舜日。堯のことを、之に就くこと日の如しと云ふより、日の字を用ふ。

後醍醐天皇、徳化 天選に冥符し、聖明古風を辱しめず、皇運時至つて、再び一統の洪基を建て、鳳曆新たに開いて、重ねて萬乗の寶祚を踐む。四表枉を斂めて、萬品襟を披く、將に謂へり 堯風永く扇いで窮りなしと。豈度らんや 舜日暫く出でて忽ちに隠れんとは。熟其の態度を思へば、寧ろ

偶然として然りと謂はん乎。料り知る 神儀、假に 濁世の業縁を償ふて、早く淨邦の嘉會に預ること。是れ聖運短祚の因由に非ず、只是れ衆人不幸の標職なる者なり。果然として 登霞の後、今に至るまで世未だ靜謐ならず、緇白の流、多くは是れ所を失す、衆心攀慕、得て止み難し。上來伸ぶる所、皆是れ夢中の夢事なり、縦ひ實に有と雖も、既に往くを咎めず、況んや是れ夢事なるを耶。人間第一の輪王も、亦是れ夢中の寶位、梵世最高の天王も、亦夢中の快樂なり。是の故に釋迦如來、輪王の位を棄て、山に入りて苦行す、其の意何んぞや。蓋し人をして各無上覺王の、世間の尊貴に超越することを知らしめんが爲の故耳。四部異なりと雖も、既に佛弟子と稱す、其れ豈に其の行藏に効はざらんや。恭しく願はくは、上皇頓に塵機を轉じて、妄宰に拘らず、速かに業識を翻して、靈知を證得し、怨親差別の昏衢を超越し、迷悟一如の靈域に優游し、鷲嶺の付屬を忘るゝことなく、生々法門を保護し、龜山の寂場を動せず、刹々羣類を利濟せん。武家の祈り奉る願望、既に爾も斯くの如し、上皇の 叡念、寧ろ之が爲に消融せざらんや。修する所の善根、固に輕渺に非ず、諸佛の大慈、必ず當に冥に感應を垂るべし。若し爾らば則ち干戈永く止みて、四海清平に、災厄咸く消して、萬民康泰ならん。武運綿々として、永く 奕世に傳へ、願心 浩々として

- ①濁世。五濁、惡世。
- ②登霞。天王登霞すと、禮記曲禮に出づ、天子の崩御を申し上ぐる。霞は霞退又通ず、遠きに登るの義にて、天に上ると同じ。
- ③梵世。梵天、或は梵世天とも云ふ。
- ④妄宰。幻妄を己が主宰となす。
- ⑤奕世。奕は重也。
- ⑥浩々。廣大なること。

普く含情に及ぼさん。

復た偈を説いて曰く、人々箇の無盡藏あり、聖賢凡庸増減なし、河沙の徳用盡く包容す、之を不思議實相と謂ふ。或は重々樓閣の雲を現じ、或は種々の音聲海を出す。大千の經卷一塵に攝す、一塵徧く經卷の中に在り、一一の文字樓閣を現じ、一一の樓閣法門を演ぶ。是くの如きの法門舌に干らず、是くの如きの樓閣造作に非ず、今此の伽藍も亦是くの如し。大衆中に於て大藏を轉す、伽藍經卷互に融攝す。明々として彌滿す虚空界、偉いなる哉出格の大佛事、神儀直に如來地に入る。普く法界迷倒の類を導いて、怨親平等覺果を成じ、佛法王法下衰せず、百千萬劫窮盡すること莫し、三寶證明疑ふべからず、更に後昆の爲に公憑を立つ。主丈を卓すること一下。

- ⑦大千經卷。華嚴經の如來出現品に、此の大經卷復量大千世界に等しいへども、一微塵の中に住す。
- ⑧三寶。佛、法、僧を宇宙最勝の寶なりとなす、故に三寶と稱す。法は宇宙の主體、僧は客體、佛は主客合融の極所に於て、三寶を化現するを以つて、宇宙の靈現を成すといふ、佛教にては三寶説を諸宗の根本となす。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄上 終

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄下

住持天龍禪寺 小師 妙葩 編

陞座

① 法華懺摩を慶讃す (香詞録せず)

靈光獨り耀き、暗に非ず明に非ず、清寥寥白滴滴、罪雲素來點を絶す、懺雪何ぞ功を積むに勞せん。解脱を以て諸佛を貴ぶべからず、淪溺を以て衆生を賤しんすべからず。釋迦老子、事は丁寧従り起ることを知らず、四十二年東街西媚、法華會上に到るに返つて、奈んともせず。檢索俱に露るゝことを、卻つて言ふ、正直捨方便、但説無上道と。上は是れ天、

① 小師。梵には鐸曷攝、唐には小師といふ、受戒十夏已前皆小師と稱す。
② 妙葩。塔銘に曰く、字は春屋、夢窓に嗣ぐ、後圓融帝、師を請じて特に智覺普明國師と賜ふ、南禪・天龍に住す、相國寺二世。
③ 法華懺摩。法華三昧懺儀は、隋の瓦棺寺の沙門釋智顛、法華、普賢觀經及び諸大乘經の意を采り、此の法を撰し、後代に流行す。

④ 靈光獨耀。百丈海の上堂の語。
⑤ 素來絶點。素來はもとより。
⑥ 丁寧。再三告示することなり、くりかへしものを云ふことなり、日本の丁寧にはあらず。
⑦ 四十二年。佛五時の説法、阿含十二年、方等八年、般若十二年、法華涅槃はともに入年づつ、華嚴は最初三七日。東街。街はうりつけるで、自媒なり、自分で媒合すること。西媚。あいさやうらしくする

下は是れ地、甚を喚んでか無上道と作さん。七論玄談、都て是れ太虚の翻載、三周妙悟、好肉贅疣にあらずといふこと靡し。龍女鱗を脱するも、未だ奇と爲るに足らず、慢者席を退く、卻つて些子に較れり。只今日諸仁者、法華三昧を修習して、愆尤を懺滌するが如きんば、是れ方便門耶、是れ無上道耶。左右を顧視して云く、「露地の白牛蹄を弄して行く、雪山歩歩間草なし。」復た偈を説いて云く、「人人箇の一卷の經あり、古今歷落常に現前、是れ靈山所説底にあらず、亦葱嶺より帯び將ち來るにあらず、蕩蕩として廻かに思議の表に出づ。是れを妙法蓮華經と名づく。都て文字の書寫すべきなし、更に何れの處に向つて此の經を讀まん。忽ち宿殖深厚の人あらば、當頭能く此の經あることを信せよ。書すべからざる處に、筆を下し得、讀むべからざる處に唇を鼓し得、是くの如く書寫し、是くの如く讀まば、無功の功大利を成せん。茲の功至竟何れの處にか歸す。黄頭碧眼も也た知らず。」主丈を卓すること一下。

① 太虚。骨折損することなり。
② 法華會上。法華を説きたまひしときにいたりて。
③ 七論。法華は二十八品で、前の十四品は是れ述門・開權・顯實、後の十四品は是れ本門・開迹・顯本にて七論あり、法華一如註に委し。
④ 太虚。骨折損することなり。
⑤ 翻載。斧の形のぬひ模様。
⑥ 三周。一には説法周、上根の爲めに、二には譬説周、中根の爲めに、三には因縁周、下根の爲めに。
⑦ 龍女脱鱗。法華の提婆品に出づる因縁、變成男子のこと。
⑧ 慢者退席。同じく方便品に出づ、増上慢のこと。
⑨ 愆尤。過ちなり、とが一切を。
⑩ 露地白牛。白は是れ色の本なれば、即ち本淨の無漏と相應す。

諸佛未だ出世せず、是の處山凸く谷凹む。祖師未だ西來せず、諸人天を

頂き地を踏む。木鏡素面を照す、幸に自ら可憐生、諸佛已に出世、横説
豎説、也たこれ白日に燈を點す。達磨已に西來、以心傳心、大いに河頭
に水を賣るに似たり。一家事あれば、百家も亦忙し、便ち見る棒を行し喝
を下し、拂を豎て牀を撃つて、多少の人を、簧鼓し去ることを。錯を將つ
て錯に就く、甚んの了期かあらん。幕に主丈を拈じて。看よ看よ、太平和
尚、今日、瑞峯が主丈頭上に在つて、先賢の窠窟を掀翻し、直に諸人をし
て生死禍福、總に是れ太平無事の時節なることを知らしめん。諸人還つて
知る麼。卓一下して云く、「太平元是れ將軍の致、許さず將軍の太平を見
ることを。」

復た擧す、「白水の仁和尙、因に洞山の忌齋を設く。僧あり、問うて曰
く、「先師還つて来るや也た無や。」仁云く、「更に一分の供養を下し著よしと。
拈じて云く、「白水和尙、謂つべし報恩。太だ過ぎて卻つて怨と成ると。即
今若し人あつて、今日此の忌齋を設く、太平和尙還つて来るや也た無やと
問はゞ、便ち一絶の古詩を以て他に呈似せん。「少小離家老大回。齒
黃面皺髮鬢。兒童相見不相識。卻問客從何處來。」と。」

性喜禪定尼小祥忌の請

普天匝地恁麼に熱す、富士山頭猶ほ雪あり、寒中の暑也暑中の寒、都て
一定底の時節なし。倘し能く此に於て頂門の眼を著け得て、方に法に定相
無し。縁に逢へば即ち宗なることを信せば、便ち生死去來、安危得喪、是
れ自家の遊戯三昧なることを見ん。有る時は東倒西播、四海五湖皇化の裏、
有る時は騎聲蓋色、毒龍行く處草生せず。成就も也た我れに由る、破亂も也
た我れに由る。權柄掌握に在り、塵塵法幢を建つ。然も是くの如くなりと雖
も、更に須らく向上眞歸の處あることを知つて始めて得べし。諸人者眞歸
の處を知らんと要する麼。拂子を撃つて。漢收めず秦管せず、又驢子に騎つて揚州に下る。叙謝録せず。
復た偈を説いて云く、「一段の精明名相を絶す。古今寥廓として獨り光輝、乃ち是れ諸佛出身の處、
含生此を以て歸する所と爲す。男に非ず女に非ず神鬼に非ず、左轉右轉眞儀を露はす。之を摩訶般若
力と謂ひ、亦廣大無縁の慈と曰ふ。迥然として超過す言象の外、大人の境界人の知る没し、君が爲に
今日情を盡して説く。日は東方より出でて、夜西に落つ。」主丈を卓すること一下。

上杉法禪禪尼小祥忌の請

香を拈じて云く、「此の香是れ人間の所有に非ず、亦龍宮より出来るに非ず、手に信せて才かに拈起

- ① 雪山閑草。涅槃經如來性起品に、雪山草あり、名けて肥膩といふ、牛若し食へば純ら醍醐味を得と。
- ② 葱嶺。印度の名山なり、こゝには天然を總じて指す。
- ③ 黃頭碧眼。釋迦、達磨を指す。
- ④ 太平和尙。諱は妙準、勅監佛應禪師、佛國に嗣ぐ、夢窓と同參、鎌倉淨智寺に住す。
- ⑤ 小祥。祥は凶を去り吉に従ふの義、一周忌の法要なり。
- ⑥ 横説豎説。説法の自在なるを云ふ。
- ⑦ 以心傳心。六祖壇經に、法は則ち心を以て心を傳へ、自悟自解せしむ。
- ⑧ 簧鼓。莊子駢拇篇にあり、言語を以て之を簧鼓し、鼓動する也。
- ⑨ 瑞峰。瑞鹿山なり、圓覺寺の山號、このとき師が住せしは圓覺なり。

- ① 太平元是。昭覺總禪師の頌、禪林類聚に出づ。
- ② 白水仁。本仁禪師、洞山に嗣ぐ。
- ③ 太。唐の俗語である。日本のいかう、きつうの意なり。
- ④ 古詩。唐詩選の賀知章の詩。
- ⑤ 鬢。鬢は披髮、髮はみみすくなしとよむ。
- ⑥ 上杉法禪禪尼。鎌倉の上杉は足利の執權。

289612

すれば、眞薰九垓に滿つ。茲者奉三寶の弟子侍中藤の某人、今晨伏して先妣法禪尼小祥忌の辰に値ふて、手を借つて此の妙香を蒸いて、本師釋迦如來、十方三世の婆伽至尊、圓覺楞嚴維摩法華一切の妙典、迦葉阿難、四向四果、諸賢聖衆、文殊普賢、三賢十聖の諸大菩薩に供養す。鳩むる所の善利、併せて用つて先妣禪尼の覺路に資薦す。伏して願はくは、覺靈法界の含情と同じく眞熏を受けて、共に道果を成せんことを。座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「妙性圓明、諸の名相を離る、切に忌む白日に燈を挑げて經行することを。靈光獨り耀き、廻かに根塵を脱す。憐むべし特地に目を捏つて月を見ることを。目を捏らす燈を挑げず、生死禍福何れの處より得來る。所以に道ふ、夢裏明明として六趣あり、覺めて後空空として大千なしと。倘し能く此に於て薦得せば、西施拈卻す。蓋面帛、元是れ隣家の老母嫗。寶蓮未だ嘗て泥犁に陥らず、龍女誰か言ふ正覺を成すと。玉樓金殿、劍樹刀山、意に任せて逍遙し、都て忻厭なし。之を無爲無事大人の境界と謂ふ、更に甚麼の五障三從とか論せん。正當恁麼の時、修善報恩、還つて功浪りに施さざる分ありや也た無や。」

- ① 九垓。くにのはてまでも。
- ② 侍中。日本の藏人と云ふ官職にあたる。
- ③ 妣。禮記の曲禮に、生を父と曰ひ母と曰ふ、死を考と曰ひ妣と曰ふ。
- ④ 阿難。釋迦の弟子中多聞第一なり、秦には歡喜と譯す。
- ⑤ 四向。須陀洹向、斯陀含向、阿那含向、阿羅漢向。
- ⑥ 四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果。
- ⑦ 三賢十聖。華嚴に、十住十行十迴向を賢と爲す、十地を聖と爲す、妙覺を佛と爲すと。
- ⑧ 覺路。成佛のほどに。
- ⑨ 妙性圓明。楞嚴七に出づ。
- ⑩ 捏目見月。楞嚴二下に出づ。
- ⑪ 拈卻。とつて除ればといふこと。
- ⑫ 蓋面帛。ふくめん。
- ⑬ 母嫗。大醜婦のこと。

主丈を卓すること一下して云く、「骨を換へ腸を洗ひ紫塞に投ず。洪門切に忌む更に蘆を銜むことを。贊經叙請錄せず。復た偈を説いて云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門、去來別處に非ず。縛脱共に同源、徧界曾て藏さず。覓むるときは則ち暗昏昏、大にしては纖芥に入り細にしては乾坤を蓋ふ。與麼に照破するもの之を大覺尊と謂ふ、與麼に受用し去る乃ち是れ大善根、此れを以て三有を資け、此れを以て四恩を報ず。功德涯量没し、贊歎言を爲し難し、我れ今自ら話墮す、笑倒す鐵崑崙。」と。

法海禪師忌の請

香を拈じて云く、「此の香、其の根廣大、豎に三際を窮め、横に十方に亘る。其の蔭洪荒、上高穹を覆ひ、下厚地を載す。茲者平安城佛心禪寺住持比丘某、今晨伏して先師法海禪師大和尚三十三回の遠忌に値ふて、手を山僧に借り、此の寶香を蒸いて、現座道場、當來導師彌勒慈尊、現在應迹、釋迦牟尼如來等、微塵法界、十方三世、諸薄伽梵、華嚴般若法華涅槃等、龍宮海藏、諸部の眞詮、文殊普賢地藏觀音等の諸大薩埵、西天四七、

- ① 寶蓮。寶蓮華比丘尼、この因縁楞嚴八の中に出づ。
- ② 泥犁。地獄の梵名、秦には無有喜樂と譯す。
- ③ 逍遙。優遊自在を云ふ。
- ④ 五障。法華提婆品に、女人の身猶ほ五障あり、一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には輪聖王、五には佛身、如何んぞ速に成佛を得ん。
- ⑤ 三從。大智度論九十九に、女人の體、幼なるときは父母に從ひ、少きときは夫に從ひ、老いたるときは子に從ふと。又禮記にも見ゆ。
- ⑥ 換骨。傳燈二十、永安淨悟の章に見ゆる語。紫塞は秦長城を築く、土皆紫色、之を紫塞といふ。又雁門草に、色みな紫なるが故に紫塞と名づく。
- ⑦ 三有。欲有、色有、無色有。有は一切有漏の法是れなり。

東土二三、種を糺ぎ宗を傳ふ歴代の祖師、先師法海禪師大和尚に供養す。糺ふ所は、香雲徧く布いて、無邊の含情、咸く龍華三會の慈雨に霑ひ、法海彌深うして、未來永劫、遐かに天池一派の正流を通せんことを。座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「威音以前も也た與麼、一絲毫を添へず、威音以後も也た與麼、一絲毫を減せず。也た添へず也た減せず、空索亦條條、洗滌すれども清に匪ず、塗糊すれども汗に匪ず、様を離れ模を離れ、迥かに心識の機括を出で、淵に至り奥に至る。寧ろ言詮の梯媒を借らんや。然も是くの如くなりと雖も、苟も能く荆棘林を透過せば、處處綠楊馬を繫ぐに堪へん。深玄の法門、刹説衆生説、廣大佛事、一成一切成、漚和を藉らず。刹刹羣動を度し、號令を勞する毋く、塵塵法幢を建つ。山野慈麼に告報す、諸仁者、還つて法海禪師冷地に聽き得て横に點頭することを知る麼。若し也た知り得ば、山僧今日利を失はず、其れ或は未だ然らずんば、眞淨界中纔かに一念、閻浮早く是れ八千年。」主丈を卓すること一下。

復た擧す、耽源和尚、忠國師の忌日に齋を設く。僧あり問ふ、「國師還つて來るや不や。」源云く、「未だ他心を具せず。」僧云く、「又設齋を設けて作麼。」源云く、「世諦を斷せず」と。師拈じて云く、「耽源和尚、世諦を斷せざることは即ち得たり、若し是れ佛法は遠くして遠し矣。今日法海禪師の遠忌に丁りて、門下の高弟、同じく齋會を設く、且く道へ是れ佛法耶、是れ世諦耶。」拂を以て牀を撃つて云く、「三千界外光明を放ち、雙六盤中喝彩を休む。」

つて來るや不や。源云く、「未だ他心を具せず。」僧云く、「又設齋を設けて作麼。」源云く、「世諦を斷せず」と。師拈じて云く、「耽源和尚、世諦を斷せざることは即ち得たり、若し是れ佛法は遠くして遠し矣。今日法海禪師の遠忌に丁りて、門下の高弟、同じく齋會を設く、且く道へ是れ佛法耶、是れ世諦耶。」拂を以て牀を撃つて云く、「三千界外光明を放ち、雙六盤中喝彩を休む。」

① 康永改元壬午仲秋初五日欽んで、聖旨を奉じて京城東山八坂寶塔を慶讚す（塔中兩界の諸尊を圖繪す）

香を拈じて云く、「此の香、微塵刹界求め得難く、大願海中流出し來る。爐中に薰向して、恭しく今上皇帝、太上天皇の爲に、本地法身、法界塔婆、釋迦如來、眞身舍利、胎金兩部、無邊の諸尊、三世出興の諸佛如來、十方常住の諸賢聖衆に供養し、次に祝貢を伸ぶ。梵天帝釋四大天王云云。博桑顯化伊勢太神宮、八幡大菩薩等、大小福德、一切神祇、伏して願はくは、洪慈保持、彼の大願力を増長し、諸障消殞して此の勝善根を圓成せんことを。」

- ④ 四恩。父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩。
- ⑤ 難無言。いふことがしにくいの意。
- ⑥ 話墮。墮などいふ語あり、破れて一物も立てざるところをいふ。
- ⑦ 法海禪師。淨智寺無象靜照禪師、入宋して月石溪に嗣ぐ、京の佛心、丹の寶林、常の興禪に開山たり、淨智に住す。
- ⑧ 三際。過現未の三世。
- ⑨ 佛心寺。倭漢禪利次第に、平安山又は永安、一條大宮桃園宮寄趾。
- ⑩ 三十三回忌。師臨川に在り、曆應元年。
- ⑪ 龍宮海藏。金翅鳥の眷屬ども、三自歸を受け已つて、即ち龍の子に従つて海の宮殿に到る、彼の宮殿中に七寶塔あり、諸佛所説の諸法ふかく藏す、別に七寶の函あり、中に

- 満つ云云。菩薩處胎經の中に出づ。
- ⑫ 龍華三會。本尊が彌勒ゆゑに、初會説法、九十六億の人阿羅漢を得。第二大會説法、九十四億の人あらかんを得。第三大會の説法に、九十二億の人あらかんを得。
- ⑬ 天池。莊子逍遙遊の篇に、「窮髮の北、溟海あり、天池也」とあり。
- ⑭ 機はゆはず、括ははず。
- ⑮ 刹説衆生説。晉譯華嚴の普賢行品に出づ。
- ⑯ 漚和。梵には俱舍羅、此には方便と譯す。
- ⑰ 耽源和尚。耽源應真、南陽忠國師に嗣ぐ、六祖惠能三世、唐代宗肅宗時代。
- ⑱ 康永改元。北朝光明帝年號、師六十八歳。
- ⑲ 八坂寶塔。祇園下の八坂の法觀寺の塔、今建仁寺派に屬す。

座に就いて、索話、無縫塔裏、一線を通せず、佛事門中、且く相見を容す、袖中に漫刺を藏する底あること莫き麼。僧あり衆を出で、問うて云く、「塔を修し、斧を止め、供養良辰を擇ぶ、朝旆筵に臨み、山川瑞靄を生じ、人天耳を側つ、請ふ師提綱。」答へて云く、「日月光を添へて天老いす、山川瑞を布いて地に秋なし。」進んで云く、「佛事門中還つて西來の祖意あり麼。」答へて云く、「鐵牛擎げ出す黄金の角。」進んで云く、「與麼なるときは則ち但見る皇風一片と成ることを。知らず何れの處かこれ封疆。」答へて云く、「切に忌む管裏蒼穹を見んことを。」進んで云く、「記得す、僧石門の聰禪師に問ふ、「如何なるか是れ無縫塔。」問云く、「直下に看よ」と、的當なりや也た無や。」答へて云く、「白日官更を打す。」進んで云く、「僧云く、「如何なるか是れ塔中の人。」問云く、「退後退後」と、意那裏にか在る。」答へて云く、「半開半合。」進んで云く、「學人即今和尚に咨す、如何なるか是れ無縫塔。」答へて云く、「大家這裏に在り。」進んで云く、「如何なるか是れ塔中の人。」答へて云く、「當面に蹉過す。」進んで云く、「和尚恁麼の答話、古人と是れ同耶是れ別耶。」答へて云く、「蓋面の帛を拈却して看よ。」進んで云く、「只今日慶

106
①今上。北朝光明天皇。
②太上。同光嚴天皇。
③本地法身。これより眞身舍利、または舍利體の文なり。舍利、又は舍利體、此に身骨と譯す。
④眞身。色心不二の法體を以て之を分つ。
⑤胎金。胎藏界、金剛界。
⑥祝賀。言を以て神に告ぐを祝といふ、貢は下の上に與ふる也。祝は願文、貢は供物。
⑦消殞。殞は歿也、沒終也。
⑧無縫塔。これには、無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識の古語あり。卵形の塔である、し語あり。この宇宙間はすべて無縫塔の卵塔じや、層落々影圍々と雲寶もいふてゐる。
⑨漫刺。刺は名刺、今日でいへば名刺の亂呈じや。
⑩止斧。普請を止めてなり。
⑪石門聰。首山念に嗣ぐ、宋の名僧なり。

贊する。浮圖の如き、便ちこれ無縫塔なること莫し麼。答へて云く、「地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈起すれば却つて是れ新羅の鐵。」進んで云く、「莊嚴既に善美を盡す、供養も亦勤渠を致す。畢竟什麼邊の事をか成し得る。」答へて云く、「萬象隨喜、虚空證明。」進んで云く、「翹學人。普味を開くのみにあらず、普く含識をして良因を結ばしむ。」答へて云く、「大商は小利を見ず。」又僧あつて出で、問うて云く、「浮圖壯麗、慶讚を周畢し、法筵儼然、好し是の時節、願はくは提唱を聞かん。」答へて云く、「既に自ら能く此くの如し、我今再三せず。」進んで云く、「一句全提、萬機寢削、學人猶ほ遲疑、更に請ふ慈誨を垂れよ。」答へて云く、「左晒千生、右顧萬劫。」進んで云く、「昔年雙林の傳大士、靈塔を旋繞す。七佛前に引き、維摩後に接す、未審しこれ什麼の標格ぞ。」答へて云く、「彩氣夜常に動く、精靈晝逢ふこと少なり。」進んで云く、「今日八坂の勝伽藍、靈塔を慶贊す。王臣歸崇し、人天感動す、還つて功浪りに施さざる分ありや也た無や。」答へて云く、「大功宰せず。」進んで云く、「郷談相似て、州縣同じからず。昔年底便ち是か、今日底便ち是か。」答へて云く、「六隻の骰子滿盤紅なり、大都只是れ頭彩を見る。」進んで云く、

107
①浮圖。或は鼓斗婆に作る。正しくは宋都婆なり。
②勤渠。渠々は動むる也。
③翹。音に同じ。これのみでないなり。
④普。蒙と同じ、めくら。
⑤寢削。寢は息也、削は刮也。けづりてのける、やみてなくなる。
⑥傳大士。善惠大士ともいふ、支那梁の時代の非僧非俗の道人。
⑦標格。佛法中での標準なり、のり、手本といふこと。
⑧大功不宰。慈悲喜捨の中で慈悲喜は大功なり、捨の一字は不宰の義、この四字はづぬぶん難解の語じや、つまりいへばおれこそと主宰にはならぬといふこと。

「與麼ならば則ち古今異路なし、達者自ら歸を同じうす。」答へて云く、「君は瀟湘に向ひ我れは秦に向ふ。進んで云く、「上來指示を蒙る、猶ほ功助の邊に墮す、如何なるか是れ向上の事。」答へて云く、「八角の磨盤空裏に走る。」進んで云く、「夜來の鴈に因らずんば、争でか海門の秋を見ん。」答へて云く、「君子は介視せず。」乃ち云く、「群生の大本、諸聖の眞源、古に亘り今に亘る。獨露獨耀、伴侶を萬法に借らず、靈明を諸縁に味さず、恢恢焉として、十虚に彌綸し、蕩蕩乎として、三際に通貫す。識を以て識るべからず、凡庸争でか梯航を得ん。智を以て知るべからず、聖賢も亦鑽仰し難し。梯航を絶する時、機路自ら活し、鑽仰し難き處、車馬濶かに通ず。倘し能く此に於て承當せば、觸向都て適莫なし。便ち見る本分地上、全く佛事門を開き、佛事門中、直に本分の事を示すことを。淨穢元異域に非ず、處處祖宗を擧揚し、聖凡同じく一音を發して、時時玄旨を演暢す。正當與麼の時、且く道へ功何れの處にか歸する。」拂子を豎して云く、「天高うして羣象正しく、海濶うして百川朝す。」散説并せて後に附す。「今日法會の旨趣佗なし、只此の塔婆を慶讚し、其の善利を成就せんが爲め而已。夫れ塔婆は梵語、此には高顯處と云ふ、亦功德聚と名づく。或は外相に就いて以て名を立て、或は内蘊に

- ①磨盤。磨を承くるを盤といふ、ひきうすのたいなり。
- ②彌綸。彌は偏なり、あまれくなむ。
- ③蕩蕩。廣大なること。
- ④梯航。ふなわたし舟のこと。
- ⑤適莫。論語里仁爲美に、君子の天下に於けるや、適もなく莫もなし」と、非常にすききらひなり。
- ⑥塔婆。法華義疏十一に云く、舍利あるを塔婆と名づく、舍利なきを支提と名づく。
- ⑦約。とりて。

約して以て義を明す。蓋しこれ標識、高顯遠く望み近く瞻て、俱に益を得、く周圍するが故のみ。諸佛菩薩、各三摩耶形、此を以て本形と爲す。一切の衆生、種種五取蘊體、此を以て總體と爲す。雷凡聖含靈能く斯の體相を具するのみに匪ず、草木瓦礫に至つても、亦其の形容を受く、所以に之を法界塔婆と謂ふ。十方世界、弘法利生の處、之を建立せすといふこと靡し。諸聖敷演する、眞詮秘典の中、皆以て讚歎す。祖師門下、別に模様なし、當頭箇の無縫塔を指出す、通上徹下、間に髪を容れず。横に徧く豎に窮む、杳として形を見ることなし。性具の徳用、既に思議を絶す、修飾の功勳、那ぞ限劑あらん。端由述べ回し、梗槩旃に在り。伏して惟んみるに、征夷大將軍、左武衛將軍、兩殿下、英傑を天賦に稟け、武門の遺風を玷さず、善本を夙生に殖る、鷲嶺の付囑に相符ひ、左武右文、王室の機括を爲すに堪へたり。内眞外俗、寔に是れ法城の金湯、茲者、元弘以來、國家大いに亂る、賢懷を想ひ料るに爰ぞ惡を介むことあらん。祗是れ天災不虞に起つて、人民を傷害すること尠からず、舍宅を焚燒する幾何ぞ。此の惡縁に因つて、翻つて善願を發す、其の善願は、所謂六十餘

- ⑧五取蘊。俱舍頌疏一、因に従つて名と爲す、有漏を取蘊と名づくるは煩惱を取と名づく、よく生死を執取するが故なり、蘊は五蘊、取より生ずるが故に、取蘊と名づく。
- ⑨杳。はるかに。
- ⑩劑。分劑也。
- ⑪梗槩。大綱の如し。
- ⑫旃。之なり、焉なり。
- ⑬征夷。足利尊氏を指す。
- ⑭武衛。同上弟の直義を指す。
- ⑮英傑。千人を英といふ、英に倍するを賢と曰ふ、萬人を傑といふ。
- ⑯金湯。外護の俗人を云ふ。
- ⑰元弘以來。元弘元年、北條高時兵を發して西上す、これより天下大いに亂る。

州の内にて、州毎に一基の塔を建てんと欲するものなり。其の旨趣敢て私家の爲にするにあらず、佛法王法同時に盛に興らんことを祈らんと欲す。其の回向も亦自利の爲にするにあらず、此方他方一切の含識を濟はんと欲す。具に精悃を陳べて、上聖聞に達す。其の志叡襟に協ひ、亦同じく大願を發し、乃ち主の幹を武將に命じて、以て締構を諸州に成す。或は新たに營功を樹て、或は重ねて廢址を補ふ。今此の當山の靈塔、是れ其の一なり、茲に因りて數年漸く頽落の積弊を補ひ、今日特に供養の儀を旌す。朝旆筵に臨み、法の爲めに證を作し、梵苑彩を添へ、人をして觀光せしむ。龍象 沓來、人天交接、伶倫樂を奏す、以て世俗諦中に眞諦あることを表するに足れり。清衆 諷經、亦眞空門裏化門を開くとを示すに堪へたり。法會 九成、觀願萬足、此れ乃ち冥顯感應の致す所なり、豈君臣道合ふて然らしむるに非ずや。本寺堂頭 高山和尚、願を發して此の塔を修營すること、已に四十餘回に迫る、累年興隆大功、併せて高徳に歸す、今日慶贊の唱導、寧ろ別人に干らん乎。然りと雖も、老師自ら謙讓の忱を伸ぶ、遂に山野を擧げて以て代らしむ。是を以て、叨りに

- ① 悃。至誠なり。
- ② 幹。せむするなり。
- ③ 締構。締は結、構は成也。
- ④ 旌儀。旌は法なり。
- ⑤ 朝旆。朝廷の行列。
- ⑥ 觀光。國の盛徳、光輝を觀ぜしむるを云ふ。
- ⑦ 龍象。龍の如く象の如しといふて、水には龍、陸には象、もつとも力大なり、昔阿羅漢たちの力にたとへる。
- ⑧ 沓。重なり、疊也。
- ⑨ 諷經。禪宗風に唐音でふきんとよむ、經をよむなり。
- ⑩ 九成。集めて大成する也、成は樂の一終なり。
- ⑪ 高山和尚。慈照禪師、建仁に住す、靈洞院に塔す、法燈國師に嗣ぐ、六寺に開山となる、夢窓國師と同時なり、康永二年十二月二十五日寂す。廣濟禪師と號あり。

詔命に膺つて、固辭を爲し難し、愚 恚を捺るに違あらず、出で來りて敗闕を納る。伏して乞ふ衆慈、各亮察を垂れよ。釋ぬるに夫れ 七百年前靈塔草創の時節、乃ちこれ六十餘州、佛法流布の最初、上宮太子の此の塔を建つるや、大悲願力、深く群品の心に熏す。淨藏上人の此の塔を祈るや、靈驗嘉聲、普く諸人の耳に落つ。偉いなる哉斯の塔、廻かに常標に出づ、外には五重の層級を構へ、内には三粒の 馱都を納る、内外相稱ひ、全く法身の靈場を露はし、輪圓徳を具して、宏いに祕藏の玄闕を開く。又見る 兩界の覺皇、四佛の尊像を奉安して、各五智の深理を具し、宛爾として斯に彰る。互に主伴の化儀を爲す、儼然として見るべし。中心の一柱、三千諸佛を圖し、邊隅の四柱、三十七尊を繪く。過現相在り、彼彼含攝すること、猶は 鏡燈の如し。横豎無礙、重重互融して、帝網に異ならず、八祖四壁に列坐し、八天四方に圍繞す。當に知るべし諸聖諸賢同じく會して、常恒祕を談じ玄を談すること。何ぞ疑はん善神善祇降臨して、日夜に人を護し法を護することを。奇瑞殊特、自ら是れ集めて大成す。褒美稱揚、其れ豈言の及ぶ所ならん哉。治承 正應に

- ① 四十餘回。四十年中、幹辨の心力也。
- ② 恚。怒と同じ、まこと。
- ③ 懣。愚也。
- ④ 七百年前。崇峻天皇己酉の歲、太子建塔、曆應二年まで七十載なり。
- ⑤ 上宮太子。聖德皇太子。
- ⑥ 淨藏。淨藏貴所は三善清行の弟(一説に子)といふ、天曆年中に八坂寺に寓す。
- ⑦ 馱都。梵には遠勝馱都と云ふ、舍利の異名なり、如來の身分なり。
- ⑧ 輪圓具足。曼陀羅、古に譯して壇といふ、新譯にはりんごんぐそくといふ。
- ⑨ 闕。音秘、閉づるなり。
- ⑩ 兩界覺皇。覺皇は大日如來、金剛界は智法身、胎藏界は理法身。
- ⑪ 四佛。阿閼、寶生、無量壽、不空成就佛、これに大日を加

此の塔屢 回祿に罹る、太子願力堅固にして燼灰と成らず、累朝尊崇、今に至つて相續す、叡信彌篤うして、嚴飾轉た新なり。建久年中、鎌倉の右幕下、深く信心を生じて、特に供養を伸ぶ。爾し自り以降、武家渴仰も亦相繼ぐ、靈塔紹興未だ嘗て休まず、於戲如來、佛法を以て國王大臣有力の檀那に付囑す、金言虚ならず、得て驗みつべし。昔本朝伽藍の興建、此の地是れを 權輿と爲す、今諸國塔婆供養、此の地亦先鋒と作す。其の感應冥符に由つて、此の縁遇際會を知る、佛法の流布すること、既に此の 精舎從り始まり、佛法の再興すること、亦此の精舎に資る者歟。阿育王曾て八萬四千の塔廟を造る、皆八祥の靈地を擇んで、以て址基とす。博桑國新たに六十六箇の浮圖を立つ、先づ八坂の精籃に於て供養を修す、乃ち知る此の地元 八祥の徳を蘊む、故に自ら八坂の名を得ることを。厥の來歴を想ふに、固に 苟も然るに非ず、教中に云く、「正法住正法滅、須らく塔婆の興廢を以て觀るべし。」と、既に是れ塔婆興隆時を得たり、應に知るべし如來正法世に住することを。彼の 法勝寺の寶塔、去春火災に罹つて壞滅す、貴賤皆同じく悲歎す。此の法觀寺の寶塔、今日供養を遂げて再

へて五智如來といふ。
①宛爾。其ままと譯す。
②三千諸佛。三世無數の佛。
③三十七尊。中央の大日尊に四菩薩、東方の阿閼佛に四尊、南方の寶生佛に四尊、西方の無量壽佛に四尊、北方の不空成就佛に四尊、内の四供、外の四供その他の四尊。
④鏡燈。鏡十面を取り八方に安排し、一炬を燃して之を照す。互影光を交へ、學者因つて利海涉入、無盡の義を涉入す。
⑤帝綱。重々帝綱。
⑥八祖。龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、惠果、弘法以上を眞言七祖と稱し、是に眞言の始祖、金剛薩埵を加へて八祖となす。
⑦八天。八方天なり、伊舍那天、帝釋天、火天、閻摩天、羅刹天、水天、風天、多聞天。
⑧治承。高倉天皇年號。

興す、緇素隨喜せずといふことなし。兩塔壞滅と再興と、示相異なりと雖も、諸人悲歎と隨喜と得益これ同じ、此を以て之を思ふ、謂つべし、塔婆の興廢、俱に是れ佛法流通なることを。所以に道く、「乃至童子戲に沙を聚めて佛塔と爲す、漸漸功德を積み、皆以て佛道を成す」と。童子の戲尙は覺因を爲す、何ぞ泥んや朝廷の叡願、武門の精誠をや。聚沙の功も、亦善種を熏す、何ぞ泥んや田園を殖ち賜ひ、財産を割き施すをや。然らば則ち慶賛を多言に備ふることを用ひず、偏に是れ證知を三寶に仰ぐ而已。謂ふことなれば塔婆唯六十六州に興ると。須らく知るべし法界に周徧して、塵塵廣く建化門を開くことを。誰か言ふ供養聊か一時一會を期すと。亦當に盡未來を窮めて、世世常に大佛事を作すべし。此の鴻因を以て、皇祚を祝延す、金輪統御して、三代の嘉猷を踵ぎ、寶曆綿洪にして、萬年の景運を享けたまはんことを。茲の善利に憑つて、武門を 保裕し、久しく帝道を佐け、榮耀家に傳へ、永く祖風に歸し、智才出格、其の威力に仗つて、法門を護持し、伽藍肅靜にして、魔孽蹤を潛め、僧侶安寧にして、宗猷踵を接ぎ、厥の餘薰を散じて、國土を賑濟し、干戈永く止んで、朝野清平を

①正應。伏見天皇年號。
②回祿。火災をいふ。
③建久。後鳥羽天皇年號。
④右幕下。右大將頼朝公。
⑤權輿。始なり。
⑥精舎。精練行者の居るところ、之を精舎と云ふ。
⑦阿育王。佛滅度の後百年に阿育王、佛の舍利を取りて夜鬼神を役し、七寶末を碎き、八萬四千の塔を造る。
⑧八祥。第一、毘羅城龍彌爾爾、これ佛生のところ。第二、摩訶陀國泥連河菩提樹下、これ佛成道のところ。第三、迦尸國波羅奈城、これ佛正法輪を轉するところ。第四、舍衛國祇陀園、これ佛大神通を現すところ。第五、曲女城、初利天より下降のところ。第六、王舍城摩竭分別、佛化度をなすところ。第七、廣城靈塔、壽量を思念するところ。第八、

樂み、災禍咸く消して、黎庶康阜なることを得ん。斯の功德を併せて羣生に回向す、怨類親類、齊しく塵勞を出でて、有縁無縁、同じく種智を圓かにせんことを。」

復た偈を説いて曰く、「人人箇の無縫塔あり、八面玲瓏、覆藏せず。廓落虚通内外なし、湘南潭北封疆を絶す。卓然獨立す乾坤の外、塵塵刹刹靈光を放つ。眼を著けて看來れば形段没し、形段没き處露堂堂、大にして大に非ず、纖芥に入り、小にして小に非ず、十方を裹む。羣生庇に托して未だ嘗て識らず、今日分明に爲めに擧揚す。一塔出生す無量の塔、諸塵撃け出す古佛場、好し是れ洪麻窮め盡すこと莫れ、佛運皇基共に久長。」主丈を卓して下座。

覺皇寶殿、慶讚陸座。康永四年八月晦日、此太上天皇臨幸。の日、太上天皇臨幸。香を拈じて云く、「此の一瓣の香、根、實際に蟠り、蔭、高穹を覆ふ。無邊の徳用、集めて其の中に在り。爐中に燕向して、恭しく今上皇帝、太上天皇の爲めに、聖壽無疆を祝嚴し、洎び文武百僚、増福増壽。」

抽戸那城沙羅林の内大雙林の間、佛涅槃に入り給ふところ。この八祥は八大靈塔經の説による。

法勝寺。白河院承暦元年十二月十八日、帝幸して慶す、永保三年十月初塔成る、九層なりしと。

乃至。法華方便品、若し廣野の中に於て土を積み佛廟を成じ、乃至云云。

裕。佑に作るべし、音は又、神の助なり。

魔孽。孽は禽獸蝗蟲の怪を云ふ、わざはひなり。

黎庶。人民。

塵勞。圓覺經疏鈔十一に、塵は六塵なり、塵に由つて勞を成す故に塵勞といふ。

種智。一切の種智、佛の智慧。托庇。おかげによりて。麻。樹の蔭。覺皇寶殿。天龍寺の佛殿。

次に香を拈じて云く、「此の香、時に應じて變化す、蹤由没し、手に信せて拈じ來つて掌握に歸す。寶爐に燕向して、現座道場、毘盧遮那如來、千百億化身釋迦牟尼大覺世尊・普賢菩薩・文殊菩薩等の諸大薩埵、迦葉尊者達磨大師等の歴代の祖師、及び微塵刹界の一切の三寶に供養す。鳩むる所の善利、恭しく後醍醐上皇の爲めに、覺果を莊嚴す。次に大梵尊天帝釋尊天四大天王、日月星宿、火德星君、天界列位、諸天仙衆、地界所屬、一切靈祇、水界所屬、諸大龍王、樽桑顯化、伊勢太神宮、八幡大菩薩等の大小の神祇に祝貢を伸ぶ、普く用つて資薫す、同じく保護を垂れたまへ。遂に跏坐索話、祖令當行、千聖舌を結ぶ。唱和門の中、且く擊節を容す、同聲相應する底あること莫しや。問答罷んで乃ち云く、「玄機透脱して、萬象を目前に融す、至靈高明にして、千差を物表に會す。一透一切透、一切明一切明、豎抹横該適くとして可ならざることなし。左顧右盼、克く其の原に逢ふ、纖毫を費さずして、廣く没量の佛事を修し、一念を動せずして、普く法界の衆生を度す。直饒恁地に達得し去るも、若し祖師門下に入らば、也た是れ階下の漢、直に得たり淨裸裸、承當を絶し、赤洒洒、近傍し

の慶讚。年譜に、貞和元年乙酉に師年七十一歳秋八月、先皇の七年忌を以て天龍開堂法會の儀を行ふ、良辰を擇び用つて正日を以てせず、延いて月の末に在り、是の月二十七日、敕使山に入り、特に金襴の紫衣を賜ふ、二十九日太上天皇山に入る、師陸座說法、二星の降ることを感ず、上天に悦んで錦帛三十襲、水晶の數珠、白銀の花莖等を賜ふ。

康永。北朝光明天皇年號。今上天皇。北朝光明天皇。太上天皇。北朝光嚴天皇。保護。保持守護。同聲。易の乾卦文言に、同聲相應同氣相求む。連。こえうるの義なり、をつとると云ふ俗語にあたる。吳音ちやく。漢音たく、とく。とほし、はるひ、こゆの訓あり。

難し。世間の 樞要、總に相干らず、出格の風流、亦交渉なし。更に甚麼の廣く佛事を修し、普く衆生を度すと説かん。好し是れ無爲無事大解脱門、倘し能く此の門に入得すれば、皇家も也た無爲無事、佛家も也た無爲無事、一切の災厄、禳せざるに自ら消し、萬古の 徽猷、求めざるに自ら備はる。三世の如來、共に斯の要を默し、歴代の諸祖、亦只 端拱す。小比丘、某甲、今日 詔を奉じて、此の座に陞る、拱黙を容れ難し、且く一線路を通じて、此の大解脱門を開闢し去らん。拂を以て牀を撃つて云く、^①「鵠弓已に掛けて狼煙息む、萬國の歌謠太平を賀す。」

①御願文並に諷誦文を宣讀す。

復た云く、「妙性圓明にして、諸の名相を離れ、本來世界衆生あることなし。此れは是れ如來不欺の語なり、既に世界なし、安んぞ興亡治亂の變を爲すあらんや。亦衆生なし、寧ろ彼我冤親を其の間に容れん哉。然も是くの如くなりと雖も、一翳眼に在れば、千花亂墜、此の性縁に隨つて諸の名相を現す、名相轉變して、圓明を昧卻す。若しこれ悟達の人、寂滅性中に安住して、恒沙の妙用を起し、世間の幻相に隨順して、顛倒の衆生を利濟す。虛妄轉變を以て、其の懷を擾らす。蓋し其れ國土の安危、自他の逆順、皆吾が家の戲具たるのみ。迷妄の類、肯て信及

- ①樞要。樞とは柄、要はかなめ。
- ②徽猷。よきはかりこと。
- ③端拱。たゞしく手をこまぬく、支那の最敬禮。
- ④鵠弓。畫弓なり、天子は敦弓なり、敦弓は畫弓なり、詩の大雅に出づ。
- ⑤御願文。御創立の趣旨をのべさせられたるなり。
- ⑥諷誦文。諷誦は經文を諷誦して、その功德により災厄を禳ふを目的とするなり、その式法は高聲に唱ふべきこと、全部文宸翰は少し御名だけのが多しといふ。

せず、無相を蔽ふて有相と爲し、妙用を枉げて妄用と爲す。是の故に世間否泰相奪ひ、衆生業債相酬ゆ。曠劫輪廻して、^①因循として今日に至る、未來の沈溺、出脱何れの時をか待たん。然も其の流轉の相、實體あることなし、夢幻の如く空花に似たり、若し其の本を究むれば、則ち禍と福と源を同じうし、冤と親と體を一にす。佛祖世に出興する、別事の爲ならず、唯衆生をして此の同源一體の域に悟入せしめんが爲めのみ。爰に元弘以來天下大いに亂る、翹戰場の兵卒多く軀命を殞すのみにあらず、山野 飛走に至るまで、亦其餘殃に罹り、神廟佛堂、^②朱門 白屋、或は兵火の爲めに焚かれ、或は賊徒の爲めに壞せらる。嗚呼災の物を害すること此に加くこと莫し。其の天災の來歴を釋ぬるに、世運の 否屯より出でたり、所謂否屯は外より來らず、此れ乃ち積劫業債の然らしむるなり。業債の因由、亦佗の作に非ず。只是れ一念無明の感する所なり。夙植深厚の人に非ざるよりは、能く之を知ることを莫し。或は知つて故に犯すことあるものは、佛祖も亦未だ之を如何んともすることあらざるのみ。茲者、征夷大將軍源朝臣、左武衛將軍源朝臣、眞智内に熏じ、靈機外に發す。自ら慙愧を懷ひて、懃尤を謝せんと欲して、具に丹悃を陳べて上 叡聞に達す。伸ぶる所の懇志、深く 叡襟に協ふ。乃ち聖旨を奉じて、樽桑國中に於て、州毎に、一寺一塔を建立して、普く元弘以來の戦死傷亡、一切の魂儀の爲めに

- ①因循。所作なきを云ふ。
- ②飛走。禽獸を云ふ。
- ③朱門。貴臣は朱門。
- ④白屋。かやぶきやれ、賤人の居るところ。
- ⑤否屯。陰陽不交を否となす、交りて未だのびざるを屯といふ。
- ⑥曆應。北朝、光明天皇年號。

覺路を資薦す。又、曆應年中、特に 叡願を立て、此の皇宮を革めて以て梵苑と作し、先皇の爲にし奉り、寂場を嚴飾す。又武家に命じて、其の營造を董す、年を経ること未だ幾ならざるに、不日にして功を成す、寔に是れ君臣道合し、天龍保持するの致す所耳。便ち見る物、否を終へずして、惡事轉じて善事と成り、法定相なし、逆縁卻つて順縁と爲ることを。此れ其の禍福同源、冤親一體なる所以の者なり。兵革の世を亂ること適今のみに非ず、上古も亦夥し。其の端緒を原ぬるに、或は國祚を争ひ、或は叛逆を誅す、其中一負一勝、只是れ業を増し冤を増す而已、未だ惡縁を轉じて善縁と爲すこと、今日の如くなるを聞かず。① 密んで以みれば、佛化の行はるゝこと、未だ苟且の中より出づることあらず、其れ必ず處を得、時を待つて興る。曠昔、嵯峨天皇の御宇、慧尊上人あり、敕を奉じて大唐に渡つて、佛法を本朝に流通す。鹽官の安國師に參じて、教外の立旨あることを信す。仍つて其の會下の② 上首義空和尚を請じて本朝に來る。敕して東寺の西院を以て、安下の處と爲して、時時に鳳闕に召對す。時に 皇后宿植開發して、一面契悟す。乃ち精舍を此の嵯峨に建て、以て檀林と號す。彼の禪師を請じて住持せしむ。檀林寺の内、十二院あり、皇后其の一院に居す、因つて檀林皇后と稱す。其の事具に石碑に載せて東寺に在り。

- ① 密。慮のあやまち字なり、伏の字と通す。
- ② 鹽官安。馬祖に嗣ぐ、義空の師。
- ③ 會下。會裡にある人の意。
- ④ 上首。會下のかしら、上足とす。
- ⑤ 皇后。橘の太后、諱は嘉智千、太政大臣橘の清友の女、嵯峨天皇弘仁七年册立す。
- ⑥ 其碑。蘇州開元寺の契元に求めて作らしむといふ。

其の碑の表題に云く、「日本首傳禪宗の記」と。然れども禪宗の興行、未だ其の時を得ず、皇后登霞の後、檀林精舍、漸漸に荒零して、或は郊蕪と爲り、或は民居と爲る。嵯峨聖代より已後、四百載に迄んで、禪院 肆に興る。謂ふ 洛の建仁・東福、相の壽福・建長是れなり。爾しより以降、大小の禪刹、天下に徧し。七十年前、後嵯峨院皇居を此の地に卜す、乃ち是れ檀林寺一院の故基なり。龜山法皇亦相繼いで以て行宮と爲したまふ。其の内に 壽量院あり、南禪寺の僧二十員を分つて此の院に安ず、今の法堂の所在、便ち是れ壽量院の舊趾なり。是に知んぬ、此の地將に大叢林を興さんとして、豫め斯の兆あることを。遂に又此の行宮を革めて大伽藍と作すを見る。禪宗首めて本朝に傳ふるは、則ち此の地を先鋒と爲す。禪宗、化を世に旺んにする、則ち此地亦殿後たり、此れ乃ち處を得、時を得て、以て佛法を興すの驗なり。理自ら昭著、其れ誰か諸を疑はん。本寺の修營、已に太半に及び、朝廷の叡願、必ず當に圓成すべし。山名寺號、未だ牌扁を掲げず、今上皇帝、先づ宸筆を染む。佛殿、法堂の署額、左梁右樞の誌文、以至 聯芳 洞鑿の表題、並に是れ 上天皇の奎翰なり。聖表の懇誠斯に彰はれ、祖宗の光幸見るべし。熟思ふに此の伽藍の興建、偏に大亂の因縁より起る。其れ豈明王賢臣、外逆内順、表裏を相爲して、宗猷を扶堅するものに非ずや。恭

- ① 肆。惟と同じ。
- ② 洛。建仁・東福は京都、壽福・建長は鎌倉。
- ③ 壽量院。虎關國師の濟北集十に、壽量院のありしこと分る。
- ④ 法堂。法雷堂といふ。
- ⑤ 梁樞。はり、むね、光嚴天皇親しく宸翰を染めて上梁の文を製したまふ。
- ⑥ 聯芳。祖師堂の額。
- ⑦ 洞鑿。土地堂の額。

しく惟みれば、太上天皇、善因冥に熏じ、聖徳顯れ布いて、神符の籙に膺り、天授の圖を受く。理を以て之を考ふれば、則ち先皇の貴裔に非ず、義を以て之を思へば、則ち猶ほ繼體の副君、茲に因つて今月、伏して、先皇七周御忌に値ふ。今日儼然として、當山に臨幸して、特に小比丘某甲に命じて、此の座に陞つて、精藍を慶讃し、尊靈の爲めに覺果を莊嚴し奉る。某、既爾叨に開山に膺る、敢て自ら鄙野を揆らず、正法を擧揚して、上、洪麻に答ふ。復た諸の龍象を請じて、同じく證明を作さしめ、供佛施僧、諸山に及ぶ、看經誦咒全藏を轉す。大いに囚虜を赦して囹圄を出し、苦楚を免れしむ。特に俗倫に命じて、霓羽を刷し、簫韶を奏せしむ、豈止一獄の囚者のみならん乎。法界の含情同じく樊籠を出づ、寧ろ四部の俗倫に限らん乎。山河草木齊しく起つて鼓舞す、眞俗互に融し、事理相攝す。此を以て三寶に供養す、供養中の最上なり。此を以て伽藍を慶賛す、慶賛の中の純眞なり。加之、龍馭山に入つて、法筵彩を添へ、台、旆、砌に列つて、衆會光を觀る。顯れて見る所尙ほ言の陳すべきに非ず、冥の感應、奚んぞ然らざるもの有らん哉。天龍雲のごとくに集り、賢聖光降して、今日の佛事を證明すること、言はずして論しつべし。法會の彝儀、既に是れ善

- ① 繼體君。光嚴天皇は一旦、後醍醐天皇の皇太子とならせられたるなり。
- ② 龍象。太平記の二十四卷によると、この諸龍象といふのは、南禪の智明、建仁寺の友梅、東福寺の一叢、萬壽寺の友松、眞如の良元、安國寺の至孝、臨川寺の思玄(無極)等なり。
- ③ 霓羽。霓裳羽衣、仙樂を云ふ。
- ④ 樊籠。かごなり、紛雜なるをいふ。
- ⑤ 旆。はた也、將軍の臨場を形容す。
- ⑥ 砌。いしだたみ、きざはし、或は臺階に當る。
- ⑦ 彝。のり。

盡し美盡す。哀むる所の鴻業、當に知る無量無邊なることを。曠劫の業根、これ元弘以來の憊尤を乎。無始の積妄、尙ほ消融しつべし、何に況んや一旦介爾の情執を乎。恭しく惟みれば、後醍醐上皇、天選の鳳質、物外の神標、徳二儀を蓋ひ、明兩曜に並ぶ。或は臧或は否、隨縁立化知り難し。是れ聖是れ凡、出格の高行辨すること莫し、祇叡運時を得ざるに因つて、遂に見る仁風扇がんと欲して止むことを。嗚呼、喬嶽の仙長く逝いて、茂陵の駕還らず、尊儀已に大乘の法社に入る、勝趣何ぞ小節の幻縁に拘はらん。假令輪王の位に在つて、七寶豐饒なるも、争でか極聖の身を證して、萬徳圓備なるに似かん。恭しく願はくは、神儀徑に覺殿に登り、業障本空の門を開き、常に慈舟に棹して、冤親平等の海に遊び、鷲嶺の付囑を忘ること無うして、法幢を塵區に建て、龜山の寂場を動せずして、羣類を沙界に濟はん。戰陣傷亡の幽魂、親疎齊しく巨益を蒙り、昏衢迷倒の含識、貴賤同じく圓明に入らん。更に冀はくは、茲を履んで以往、未來に至るまで、兵戈偃息して、寰宇康寧に皇祚延洪にして、天下の大慶を錫ひ、營門繁衍にして、法城を護つて永く隆ならん。上來伸ぶ

- ① 憊尤。とが。
- ② 介爾。介とは細念を云ふ。
- ③ 鳳質。龍鳳の姿、天日の表。
- ④ 臧否。よし、あし。
- ⑤ 立化。神に參じて靈と合契す。
- ⑥ 喬嶽。支那の故事にて、詩周頌にあり。事死に、後醍醐天皇を周王に比するか。
- ⑦ 茂陵。漢武帝を茂陵に葬る。
- ⑧ 萬徳。華嚴鈔序に、よく盡く佛の功徳を説くこと無し、無盡の徳すべてを云ふ。
- ⑨ 業障本空。これは證道歌の中の「了すれば則ち業障本來空」と云ふをとる。
- ⑩ 圓明。寶覺圓明眞妙淨心無二圓滿。
- ⑪ 繁衍。はびこる、繁は又蕃に作る、衍は豊也、盛也。

る所の情旨、並に是れ實に詣して供通す、萬象證明し、太虛保任せん。」
 復た偈を説いて云く、「一莖草上梵刹を現す、一處纒かに現すれば處々現す。一梁一柱河沙に遍し、
 片瓦根椽法界を含む。法界の諸塵亦相攝す。壞なく難なく罣礙なし。帝網交羅して互に莊嚴す。微妙
 の壯麗自ら圓備す。一多大小其の量を混す。廣狹中邊誰か敢て論せん。偉いなるかな此れ箇の勝
 伽藍、永劫儼然として廢すべからず。無邊の諸佛諸聖賢、光嚴住持裏許に在り。人天鬼畜諸羣品、貴
 賤冤親共に一家、寂滅性中對待なし。安んぞ業債の互に相酬ゆるあらん。人々同じく光明藏に入
 つて、刹々恢開す無礙門。」主丈を卓す。

拈香

達磨忌

護に ①六宗を破す、水、水を洗はず、堅白の理論を ②主張として、剛
 ひて道ふ單傳の玄旨と。 ③嵩山冷坐九年の弓、兒孫奕世の累を引き得た
 り。我れ今只其の思なきを謝す、敢て其の髓を得ることを望まず。挿香

①六宗。佛大勝多は小乘禪を佛
 陀跋陀に學ぶ、達磨も同じく
 學びしことあり、六宗を分つ、
 第一有相宗、第二無相宗、第
 三定惠宗、第四戒行宗、第五

して云く、「古 柏一炷價千金、比すること莫れ神光の隻臂を斷するに。」

壁觀九年、拙を露し醜を呈す。隻履西に歸る賊空手なし、頭を改め面
 を換へて伎已に窮す。三十六路走るに如かず、慈嶺塵塵現前、少林處處繁
 茂、惡跡卒かに未だ消せず、累千載の後に及ぶ。挿香して云く、「兜樓一炷
 恩怨を分つ、半は香ばしく分半は是れ臭し。」

鯨波萬里、嶮を冒して西來、意趣解し難し、世を擧つて疑猜す。震旦河
 頭に水を擔つて賣り、樽桑平地に骨堆を起す。千變萬化、滿面の塵埃、
 隻履西竺に歸り、全身九垓に現す。少室峰前分、月明かに雪白し、片岡
 山下分、葉落花開く。慈陰恢恢として今古に亘る。後昆往往自ら ①張
 乖 挿香して云く、「我が此の瓣香是れ官貨、謂ふこと莫れ今晨忌齋を設く
 と。」

圓覺開山忌

龍淵の水を攪動して、樽桑雷霆を震ふ。電收つて四十年、遺風轉た更
 に腥し。這般の惡迹掩ふこと得ず。咸言ふ ②圓照 ③寧馨ありと。挿香し
 て云く、「是れ怨是れ恩、吾識らず、兜樓一瓣 ④玄冥に寄す。」

無得宗、第六寂靜宗、之を達
 磨が一に破せしなり。
 ②堅白。史記の荀卿傳に出づ、
 公孫龍の堅白は即ち守白な
 り、白はなほ是の如し、堅執
 してその説を是として之を守
 る也、同異は衆人の異論を合
 同するなり。
 ③主張。著力の意。
 ④嵩山。少林のあるところ、玄
 那の鄭州にあり。
 ⑤得髓。二祖惠可は髓を得た
 り。
 ⑥柏。堅緻にたとへる。
 ⑦隻履。達磨は滅後三年、手に
 かつしの履を携へて行くを魏
 の宋雲が逢ひしといふ。
 ⑧片岡。日本の大和國片岡山に
 現じたといふ、滅後八十六年、
 聖德太子が衣を脱して付せら
 れし故事。
 ⑨張乖。相戾也。
 ⑩圓覺開山。後宇多天皇弘安五

一山國師忌 大雲庵の請

圖し成す砌下一池の水、釘出す簀頭數朶峰、好箇 天真法供養、今晨何事ぞ大家忽し。恭しく惟みれば、前住當山 勅諭一山國師大和尚、其の智自ら 刃を遊ばしむ。其の辯孰れか鋒に嬰らん。内之外と相應、宗之説と兼通ず、峻機 玉山の頂を踏み、妙用 頑極の風を移す。震旦扶桑兩處に龍と成る、國師の名翼、十方空に翔ける。曇時我れに命じて 巾瓶に侍せしむ、三喚聲裏虚しく睡困す。三十年來、未だ此の恨を消せず。遠忌斯に臨む、誰か恩怨を分たん。高弟相共に他の手を借つて、自らの香を拈す。南禪も也た公税を納れて、以て私獻に當つ。且く道へ斯の如き供養、還つて慈蔭に酬ゆるの分ありや也た無や。挿香して云く、「怪

年、師年五十七、北條時頼の請により住す、無學佛光國師。
①龍淵。支那の徑山の方丈を龍淵室といふ、無學の師の無準にたとへる。
②圓照。無準國師の塔の名。
③響聲兒。晉人の俗語、かやうな、又は如し此の意、かゝる秀でたる兒と云ふこと。
④支冥。有氣の始なり。
⑤一山。一寧禪師は元の台州の人、正安己亥本邦に來る、建長圓覺淨智に住す、後宇多天皇師を容信し、正和二年南禪寺に勅住せしむ、文保元年九月廿四日寂、壽七十六、上皇國師號を賜ふて、塔を龜山廟の側に建て、法雨の額を賜ひ、像の贊を御製す。
⑥大雲庵。南禪寺の寺中、一山の塔處。
⑦釘。貯食也、釘出すはもり出

すなり。
⑧天真法供。法華の藥王品に、是れ眞の精進是れを眞に法を以て如來を供養すと。
⑨游叉。餘地あることにたとへる、故事あり、莊子の養生主に出づ。
⑩宗説。宗は道の本、説は教の跡。
⑪玉山。頑極の師の癡絶冲禪師の塔のある金陵の玉山庵のこと。
⑫頑極。頑極行彌禪師、癡絶冲に嗣ぐ、宋の名僧、一山の師にして無準三世、育玉に住す。
⑬曇時。今より既往を云ふ。
⑭侍巾瓶。夢窓國師は一山に參じて侍者たり、二十三四五の三年に亘る、後又參す。
⑮三喚。侍者のつとむるを三應とも三喚ともいふ。
⑯膚寸。四指のこと、おや指をのけて四本立つること。

むと莫れ香煙一縷の微なることを。大雲元 膚寸より起る。香を提起して云く、「此れ箇の一物、地に先だち天に先だつ、都て今古の相なし、豈に陰陽の爲めに遷されんや。前住當山 勅諭一山國師大和尚、昔大唐に在つて此の物を求む、之を 玉几峯前に得たり。一生受用して 固必毋し、千變萬化只縁に隨つて、七處に住山し去る、此を以て鋤斧と作す。萬里海を渡り來る。此を以て 鐵船と作す。君王に對して玄を談ずるときは、則ち是れを廣長舌と爲す。衲子の與めに手を垂るゝときは、則ち是れを惡辣拳と爲す。歸寂の後十三回、祕して家中に在つて青氈と作す。今日遠忌斯に臨む、門下の高弟、又之を拈出して、用つて一瓣の香と作して、爐中に薫向して、上慈蔭に酬ゆ。還つて先師の爲めに恩を報ずるの分ありや也た無や。」挿香して云く、「用ひす 巴陵三轉の語、婆が裙子を借つて婆年を拜す。」玉雲庵に就く。

佛國禪師忌

荆棘滿地、吾れ也た未だ師の藩籬を窺はず、白浪滔天、吾れ也た未だ師の靈骨を見ず。曾て慈訓の蒙を啓くなく、只怒罵呵咄に遭ふ。打初の一步已に錯る、眼を開いて佗の

①先天地。傳大士の偈に、物あり天地に先つ、形無くして本寂寥」となり。
②玉几峯。支那鄭山阿育王寺の壇致にあり。
③固必。とりつき滞るなり、固執必期の意。
④七所。支那では祖印寺、補陀山、日本では修禪寺、建長寺、圓覺寺、淨智寺、南禪寺。
⑤鐵船。鐵船水上浮の古語あり。
⑥君王。後宇多天皇に對御叡信を忝うす。
⑦巴陵三轉語。一道。明眼人落レ井。二吹毛劍。珊瑚枝枝撐。著月。三提婆宗。銀鏡裏盛雪。拜。俗に年を賀するを拜年といふ。
⑧玉雲庵。建長寺中一山の塔頭。
⑨佛國禪師。高峰顯日、後嵯峨帝の皇子。

窠窟に墮す、今朝既に往くをば咎めず、例に随つて箇の忌齋を設く。挿香して云く、「從前の怨恨百千緒、此の瓣香に和して當下に灰す。」

先師三昧南禪知らず、南禪三昧先師知らず、平白一條の路、東西各背馳、盡く謂ふ子を養つて父に及ばざれば、以て家門一世の衰を致すと。諸人苟も能く恁麼に批判し去らば、挿香して云く、「我が此の一炷の香、功浪りに施さず。債に主あり、宛に頭あり、先師好采我れを接す。端なく怨仇を結び得たり、切齒責を悔いて、覆水收め難し。一做さざれば二休せず、今朝又此の兜樓を蒸く。」

元翁和尚盡七の請

此の香、生育二儀を籍らず、根苗自ら羣卉を壓す、之を失ふときは、則ち五分法身を味卻す。之を得るときは則ち一切稱智を重成す。伏して惟みれば、前席南禪元翁和尚、此の香の風熏を得て、平生の志操萃を抜く。遂に見る德馨日に新にして、乃ち王臣の爲めに貴ばるることを。先師の門庭を扶起して、嘉聲浩浩として墜さず。慧林も亦此の香些子の熏力を得て、元翁の受用底と連枝同氣、ある時は之を丘壑に藏して、共に寂寥を守り、ある時は之を街衢に賣つて、各小利を求む。

此の老奄然として化權を載む。中陰已に盡七の忌を迎ふ。謹んで茲の妙香を蒸いて、現座道場圓通大士及び無邊塵刹、常住の三寶、果海の賢聖に供養す。鳩むる所の殊助尊靈を資薦し、品位を増崇す。且く道へ寂滅性中、什麼の位次を増崇せん。挿香して云く、「樹凋み葉落つ天地の秋、誰か見る春花の確背に開くことを。」

耕雲和尚の爲にす

胸次汪洋、舉措超軼、風度を松源の的流に稟く、塵機を大通の密室に喪す。一時の名望、山嶽空を凌ぐ、兩處の化權、雷霆蟄を驚す。此れは是れ耕雲和尚平生受用三昧なり、只末後一たび人身を失へば萬劫にも復へらずと道ふが如きんば、諸人什麼の處に向つてか、此の老と相見せん。挿香して云く、相見不相見、只一炷の香を消す。」

師叔孤雲西堂和尚の爲にす

大方外なく、大圓内なし、出格の舉措、寧ろ對待あらんや。平生奇智を蘊む、圭角彰れず、滅後全機を喪す、靈光何ぞ味まさん、生處に滅を示す。仰山當年寂寥を致す、滅時に生あり、臨川今日自ら慶快、慶快と寂寥

- ① 債有主。おの／＼あいてがあるの心なり。
- ② 切齒。切齒扼腕。
- ③ 一不做二不休。俗語也、しおふせればおかぬと云ふの意。
- ④ 元翁和尚。元翁本元。
- ⑤ 五分法身。法華支義釋義に出づ、一戒身、二定身、三慧身、四解脫身、五解脫知見身。
- ⑥ 王臣。都督世良親王、師を禮して師となす。
- ⑦ 先師門庭。元翁と夢窓とは同參、佛國々師に嗣ぐ。
- ⑧ 浩浩。大水にたとへる。
- ⑨ 連枝。弟子兄弟。

- ① 奄然。たちまちなり。
- ② 盡七。亡して四十九日目。
- ③ 耕雲。諱は克原、建長の西潤子曇禪師に嗣ぐ、京の萬壽に住す。
- ④ 超軼。軼は逸に同じ。
- ⑤ 松源。崇岳禪師。密庵咸傑禪師の法嗣なり、宋の名僧。
- ⑥ 大通。西潤子曇の勸諭號。宋の人、天童の石帆に嗣ぐ、本朝文永八年此の方に來り、弘安戊寅元日に歸る、又正安元年一山寧公と同船し、重ねて來る、北條貞時弟子の禮を執り、圓覺・建長に住す、運庵三世。
- ⑦ 一炷香。この語は國師、惠林寺にあるときの語と見ゆ。
- ⑧ 孤雲。未詳。
- ⑨ 仰山。唐時代なり、潯山、臨川に問ふの古則あり。
- ⑩ 臨川。國師、嵯峨臨川寺にあるときの語なり。

と、大虚五彩を著け、轉換の句子如何んが話會せん。挿香して云く、「碧天萬里一孤雲、變じて香雲と作つて沙界を覆ふ。」

恭しく、龜山聖廟の爲にす

聖駕去つて後、山幽かに洞深し、^① 舊日祥雲、猶ほ未だ散せず。^② 今朝

甘雨寒林に灑ぐ、恩澤滂流して、^③ 纖芥に及ぶ。柏根一片價千金。

全壁首座の爲にす (難に罹りて卒す)

生涯喪盡して、始めて自便を爲す。轉身の一路、東邊西邊、^④ 眉間に劍を掛くる時節、直に得たり血梵天に濺ぐことを。謂ふこと莫れ是れ宿債を償ふと。須らく知るべし壁を全うして還ることを。挿香して云く、「今日他の與に意氣を添ふ、薰風吹き散す。博山の烟。」

上杉道果禪門盡七の請

此の香、無根の根、深か盤る。金輪際、也た其の限に非ず、無陰の蔭、廣く覆ふ太虚空、也た其の包を推す、一切の功德を以て枝條と爲す、無邊の法門を以て花果と爲す、淨穢刹土、此れ藉つて基本と爲す。凡聖含靈、誰か庇麻に托せざる、價直貴賤の商量を用ひず、馨香豊に沈檀の品藻に干からんや。茲に日本國相州鎌倉縣居住某人、^⑤ 今月今日、伏して先考某人、盡七の

① 龜山聖廟。龜山天皇御分骨所は、南禪寺中の南禪院にあり。
② 舊日。天皇御在世の。
③ 今朝。九月十五日。
④ 纖芥。民衆を云ふ。
⑤ 全壁。未詳。
⑥ 眉間。これ以下は首座の縁語。
⑦ 博山。黃帝内傳に博山爐あり、蓋し王母帝に遺る者と、その名此に起る。
⑧ 金輪際。地量下を云ふ。

忌辰に値ふて、特に此の寶香を蒸いて、以て十方常住、一切三寶に供養す。鳩むる所の功勳、併せ用つて某人報地を莊嚴す。伏して惟みれば、某人、氣韻溫和、^① 風采^② 冲淡、俗に混じて道を抱く、謂つべし雪後の松操と。

欲に在つて禪を行す、固にこれ火中の蓮華、其の徳人に可なり、邇く觀還かに聴き皆善と稱す。其の行格を超え、出生入死優遊するが如し。世に處ること五十三年、雲に釘し風に繋ぐ、^③ 泉に歸して四十九日、幻收夢破る。且く道へ某人、即今何れの處にか在る。香を拈起して云く、「此に於て看取せば、體露金風、其れ或は未だ然らずんば、樹凋み葉落つ。」

冷泉黃門月巖居士の夢に一首の歌を作りて舊友に告げて我が作善と爲さんことを願ふ、因つて數輩を相率ゐて齋會を設けて請す

此の香、無住を根本と爲す、夢幻を枝條と作す、將に謂へり、牢固ならず、劫火も能く焼くこと莫し。茲者某等手を借つて此の寶香を蒸いて、以て供養す云々。伏して惟みれば、某人、曾て夢形を貴冑に寄せ、^④ 歌仙の名望^⑤ 南柯に屬す。滅後^⑥ 青黃已に三周、夢裏恍乎として^⑦ 素面を呈す。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 下

① 風采。風儀光彩なり、彩と同じ。
② 冲淡。冲は虚なり、和也、淡は安也。
③ 在欲而行禪。維摩經の佛道品にあり、五欲を受くることを示すとも、亦復禪を行することとを現すと、肇法師の注に於いてみるべし。
④ 泉。黄泉に入りてより。
⑤ 冷泉黃門。冷泉權中納言爲相なり、爲家の三子、定家の孫也、嘉曆三年七月十七日六十六歳にて鎌倉に卒す、月巖昌久と名づく、曾て國師に法要を問ふ、唱酬の和歌あり、正二位に叙せらる、冷泉家の祖。
⑥ 歌仙。和歌の妙手といふこと。
⑦ 南柯。夢の故事。
⑧ 青黃。月日のたつた木の葉芽のかはるにたとふ。
⑨ 素面。素は本也。

①灼然夢中の夢、又夢中の吟を作す、舊知遺眷、聞いて焉を悵む。今日夢中に嘉會を成す、乃ち夢中の佛事を修して、他の夢中の沈冥を救ふ。特に夢窓野人に命じて、謾りに此の寐語を説かしむ、正當恁麼の時、還つて寤底の消息ありや也た無や。香を拈起して云く、由來斯の義甚だ幽深、彌勒大士も也た不會。」

前讚州太守觀公大禪定門忌の請

此の香根なうして活を得たり、地を離れて倒れず、臭中の香、香中の臭、佛祖も也た品藻し難し。于レ茲、云々、冀ふ所は覺靈法界の含識と、同じく斯の妙熏を受けて、業根を翻して善根と作し、惡果を轉じて覺果を成せんことを。伏して惟みれば、某人、鬩花果を結ぶ。五十餘年、太虚の相貌今古を絶す。水月光を掩ふ一千箇日、本分精明變通なし、生何れの處よりか來る。木人托出す日中の斗、死何れの處に向つてか去る。玉象踏翻す鏡裏の空、福祿災殃皆戲具と爲る。④四生三有是れ樊籠にあらず、盡く謂ふ長逝没蹤跡、誰か知る徧界眞容を露はすことを。此の陰德を將て賢裔に付す、高門豈に肯て于公に倣はんや。

上杉武庫禪門忌の請

此の香、大いにして太虚を包み、細にして織芥に入る。臭きことは則ち菴草よりも臭く、馥しきことは則ち沈檀よりも馥し。諸佛此を以て道樹と爲つて正覺を其の下に成す。列祖此を以て心華と作して、宗芳を無窮に流ふ。偉いなるかな、此の香鑽仰すれども及ばず、若しくは凡若しくは聖、誰か恩を受けざる。今日資する所の覺靈、某人、平生心を祖苑に遊ばしむ。能く者箇に順つて信根を深うす、末後命を戰場に殞す。亦者箇に藉つて以て聲價を増す、死生既に自ら此くの如し、罪福那んぞ差殊あらん。于レ茲、令子中書某人、此の熏力を受けて、孝行を失はず。今日某人一周の辰に丁つて、謹んで薫いて云々。冀ふ所は覺靈、無邊の業種、一時に焦枯し、本地の風光當處に成境し、乃子乃孫、榮昌絶えず。或は親或は怨、利濟休すること無からんことを。

野州禪門 逆修の請

春至つて百花開拆す、春箇素容を改めず。秋來萬卉凋零す、者箇亦變色なし。淨穢器界、此を以て基と爲す。佛祖の化儀、悉く其の力を承く。之を失ふときは則ち二利俱に失し、之を得るときは則

- ①灼。昭也。
- ②沈冥。沈は久しく生死に淪するを云ふ、冥は永く無明に覆るをいふ。
- ③幽深。須菩提に云ふ、此の義幽深なり、吾れ不能説のとこるじや、彌勒大士に問へとの故事あり、聯燈録といふ、僧傳に出づ。
- ④前讚州太守。足利尊氏の父の貞氏なり、法名は淨妙寺殿貞山道觀大禪定門。
- ⑤鬩花。圓覺經の金剛藏章に、幻翳の妄に空華を見る如しと。
- ⑥四生。有情は胎卵、濕化の四種の生あり、俱舍の世間品に出づ。
- ⑦于公。前漢于定國傳に、定國が于公、其の門閭壞たり、父老と共に治す、于公曰く、其の門を廣大にして駟馬高車を容れしむべし云々、于孫必

- ①此の香、大いにして太虚を包み、細にして織芥に入る。臭きことは則ち菴草よりも臭く、馥しきことは則ち沈檀よりも馥し。諸佛此を以て道樹と爲つて正覺を其の下に成す。列祖此を以て心華と作して、宗芳を無窮に流ふ。偉いなるかな、此の香鑽仰すれども及ばず、若しくは凡若しくは聖、誰か恩を受けざる。今日資する所の覺靈、某人、平生心を祖苑に遊ばしむ。能く者箇に順つて信根を深うす、末後命を戰場に殞す。亦者箇に藉つて以て聲價を増す、死生既に自ら此くの如し、罪福那んぞ差殊あらん。于レ茲、令子中書某人、此の熏力を受けて、孝行を失はず。今日某人一周の辰に丁つて、謹んで薫いて云々。冀ふ所は覺靈、無邊の業種、一時に焦枯し、本地の風光當處に成境し、乃子乃孫、榮昌絶えず。或は親或は怨、利濟休すること無からんことを。
- ②菴。くさみくさ、水邊に生ずるなり、善惡のたとへに引く。
- ③沈檀。沈香白檀等の香木。
- ④道樹。金剛座上の菩提樹、佛其の下に坐して等正覺を成じ給ふ。
- ⑤令。善なり。
- ⑥乃。汝の字と同じ意。
- ⑦逆修。生前に葬儀の佛事を修し、忌齋を行ふの式を云ふ。
- ⑧二利。自利利他。

ち一舉兩つながら得。茲者某人、報縁を濁惡の時に獲て、罪業を迷昏の域に積む。自ら當來の苦果を懼れて、預め滅後の善根を修す。特に山野が手を借つて、虔しんで蒸いて云々。冀ふ所は、聖力に仗つて凡力を資け、業根を抜いて善根と爲し、眞熏實際に通じ、彌天の愆尤頓爾として消除す。妙利洪床に答へ、出世の資糧、儼然として備足す。現當相續、餘裕窮りなく、冤親平等にして、濟度普く及ばん。挿香して云く、「即今已に是れ公憑を立つ、永劫何ぞ妨げん巨益を成すことを。」

覺照禪尼の爲の請

者箇の爛木柴、能く萬象の主と爲る、價直定度なし、熏成只縁に隨ふ。僧家に在るときは、則ち解脱の香と爲し、世俗に在るときは、則ち資生の具と爲す。男子に於ては則ち之を乾徳と謂ひ、女人に於ては則ち名づけて坤儀と爲す。茲者某人、戰場汗血の忠を抽んづと雖も、特に本寺に就いて、瀝心の孝を旌はす。遙に山笠が手を借つて、虔しんで蒸いて云々。伏して願はくは、懿靈此を以て器仗と爲して、永く積劫の業根を截し、此を以て資糧と爲して、早く無生の覺路に登り、餘裕綽々として後裔を孕社し、洪熏綿々として含情を賑濟せんことを。

- ① 迷昏。愚迷昏昧。
- ② 聖力。佛力法力。
- ③ 凡力。凡夫の力。
- ④ 業根。罪業の。
- ⑤ 善根。善種の。
- ⑥ 現當。現今、當來。
- ⑦ 乾徳。易說卦傳に、乾は天也、故に父を稱す。
- ⑧ 坤儀。同上に、坤は地也、故に母を稱す。
- ⑨ 懿。美也。
- ⑩ 以此。者箇爛木柴。
- ⑪ 器仗。刀戟の總名。
- ⑫ 餘裕綽々。裕寬の意。
- ⑬ 孕社。孕は信なり、育なり。社は止也、福止んで移らざる所也。

且く道へ只箇の一瓣の香、甚と爲てか大佛事を成し得る。挿香して云く、「六月清風を賣はゞ、人間恐くは價なからん。」

妙印禪人の爲の請

此の香、能く萬物の本根と爲り、四序の青落に干らす、人々曾て欠餘なし、只是れ受用すること得ず。今日拈出して、三世如來十方賢聖に獻じ奉る。没量の供養、能供の相を絶す。眞箇の納受、所受の心なし、好し是れ善根思議に出づ、須らく知るべし熏力亦廣大なることを。此を以て妙印禪人の覺路を資く、資も也た資に非ず。此を以て塵沙法界の迷流を濟す、濟も也た濟に非ず。正當慙慙の時、且く道へ什麼邊の事をか成し得る。挿香して云く、「大功至徳人の識るなし、只見る爐中一穗の煙。」

上杉中書禪門の爲に請す

某處、今晨伏して某人、捐棺以來、百日斯に臨むに値ふて、特に五分法身の香を蒸いて、以て多生染愛の業を灰にす。伏して願はくは此の香、本有の衆徳云に彰れ、無限の眞熏墜ちず。無盡廣大の妙供を出生し、虚空法界、三實の境界に獻じ奉る。最勝甚深の法句を演暢し、微塵刹土一切の含生を啓迪す。茲の善利に憑つて覺靈を資く。曠劫の業債一時に滅す、翅餘熏の家眷を庇ふのみにあらず、

- ① 四序青落。四季の月日のたつのをたとへる。
- ② 捐棺。死を云ふ。
- ③ 啓迪。開導也。

法界の迷流同じく益を得ん。言ふこと莫れ此の事保任し難しと。萬象森羅齊しく證明。

清拙和尚の遺書至る

四七二三此の香を傳ふ、遼天の高價商量を絶す。既にはれ一花開五葉、東西何れの處か芳を聯ねざる。伏して惟れば、前住龍山清拙大和尚、祖業相承し此の香を傳ふ。馥郁たる家風大唐に滿つ、化導の縁分固必すること毋れ。此の香を懐いて兮、扶桑に到る、普天瑞氣を凝し、四衆恩光に沐す。言ふこと莫れ滅後なしと。遺薰餘烈十方に徧し、老拙も亦此の香あり、拈出して以て寂場に獻す。是れ河頭に水を賣ること莫し麼。挿香して云く、「已に展ぶるを縮めず、家醜外に揚ぐ。」

征夷大將軍の爲に奉る預修

此の香、天に先ち地に先つて名相を離る、榮枯の爲に素容を變せず、手に信せて拈じ來つて掌握に歸す、無邊の功德其の中に在り。茲者、征夷大將軍源君某甲、預め當來の苦報を懼れて、滅後の善根を逆修す。始め中陰より終り遠忌に迫るまで、逐一に佛事を作す。至誠自ら回厭、乃ち今日を

② 清拙和尚。諱は正澄、元の人なり。愚極に嗣ぐ、大鑑禪師と勅諡せらる。

① 遼天。遠きなり。

② 馥郁。香醜也。

③ 到扶桑。清拙和尚は、元の泰定三年齡五十三にして本朝の請を受け來る、日本嘉曆三年なり、北條高時の歸信を受け、建長寺に居らしむ、淨智圓覺に住す、元弘三年後醍醐帝敕して建仁に、建武三年南禪に陞せしむ、曆應元年建仁の禪居庵に退く、同二年正月十七日寂す、壽六十三。小笠原流の祖貞宗、師に歸依し、信州開善寺を創め、大鑑清規により諸禮法をはじめと云ふ。

④ 烈。光也。

⑤ 十三回。十二支終りて、始めて先支を迎へて追慕を寓する也。

以て、一十三回の忌辰に當つ。特に山野が手を借つて、謹んで此の寶香を薫いて、周徧法界、摩訶毘盧遮那如來に供養す云々。冀ふ所は七分全得の功、便ち速効を見、萬徳本圓の理亦自ら現前、此の世福壽保安、藩垣を營門に固うし、來生願望圓成、賑濟を法界に播さん。伏して惟れば、殿下、大願力に乗じて、軸を博桑に乗り、宰官身を現じて、轡を祖域に頓す。既に祖域に遊んで奚ぞ迷郷に入らん。幻妄實なし、任佗片雲の太清に點することを。靈光獨り耀く、妨げず一月の衆水に印すること。過現の罪性求むれども不可得、未來の業債何んの酬ゆる所かあらん。赤條々空索々、虚空突出す那吒の面、萬象全提活脱の機、機先の一著標準なし、佛祖當頭眼眉に似たり。正當與麼の時、向來修善の功何れの處にか歸す。香を擧げて云く、「三千界外、毫光を放つ、雙六盤中彩を喝することを休めよ。」

⑥ 七分全得。福利一切の聖事を造り、七分中乃ち一を得て、六分の功德は生者自利す云云、七七日の内變の如く雙の如く、或は諸司に在つて辯論す云云。

⑦ 乘。國政を乘るなり。

⑧ 頓。とどむ、たづなをとどむるなり。

⑨ 片雲。この語は楞嚴の九に出づ、虚空の汝が心内に生ずること、なほ片雲の太清の裏に點するが如しと。

⑩ 毫光。三十二相の中の三十一なり、眉間白毫相を云ふ。

小佛事

慧林寺釋迦佛安座 (拈華微笑の像)

大法元可不可なし、圓明の門戸關鎖を絶す。三賢十聖競ふて喬に遷る、也た是れ空花重ねて果を結ぶ。恭しく惟れば、本師釋迦如來大和尚、其の慈也至れる矣。法界の含識、咸く庇床を受く、其の德也大いなる哉、無邊の虚空、能く包裹すること莫し。寂場を動せず鹿苑に赴く、天魔外道自ら負墮す、東倒西播、五十年到る處尊と稱す。横説豎説三百餘會終に口過なし。未後拈起す一枝の花、百萬の大衆看不破、與麼の體裁、謂つべし事は丁寧より起ると。沒量の大人敢て之が爲に陳賀せず、諸仁者還つて我が世尊別に箇の本分底の三昧あることを知る麼。當軒大坐、峭巍巍、迦葉亦只半座を得たり。

臨川寺普賢安座開光明

一椽才かに動じて大千收る、片瓦包容周からずといふこと靡し。當下圓成。華藏界、金屑を將て雙眸に著くること莫れ。恭しく惟れば、三曼跋

- ① 慧林寺。關東名刹の一にして、所在は甲斐國牧莊東山梨郡乾徳山慧林寺、開基は二階堂出羽入道々蘊なり、國師五十六歳にして元徳二年秋九月開創す、牧の莊には國師の父母の居住せられしこと年譜に見ゆ。
- ② 天寃。菩提樹下で釋尊の修行を邪魔する。
- ③ 播。物を研くなり、するなり。
- ④ 臨川寺。十利の一にして、山城嵯峨天龍寺の門外川端に在り、龜山天皇の仙居にして、又後醍醐天皇第二皇子世良親王の遺跡御墓所あり、元弘三年八月天皇に命じて開山と爲し給ひ、三會院は國師の塔所なり。
- ⑤ 華藏。華嚴は華藏世界品に、

陀菩薩摩訶薩、證入修持を假らす、住處國土に依らず、一毛の區域濶曠、善財未だ封疆を見ず。十種の願海、汪洋、諸聖咸く廣大を讓る。分身月の如く多少影を知らず、玄辯餅を瀉ぐ、豈に止二千酬のみならん哉。誠なる哉普賢の稱、稱する所認に匪ず、偉いなる哉大士の德、衆徳の哀むる彼、茲者微塵を捏聚して、清淨の尊像を露現し、一草を挿卻して、圓融の道場を落成す。假を弄して眞を象り、全く天然の態度を具す、事に即して理を顯はす、寔に世諦の戲論に非ず。須らく知るべし、此の小場を藉つて、以て恒沙の梵苑を莊嚴することを。何んぞ妨げん、此の一像を散じて、萬品の衆生に隨順することを。諸天諸神皆悉く威を承け、内外冥に人法を堂額資く。乃佛乃祖、互に相戮力、東西密に宗猷を祖額付す。慈風蕩蕩扇ぐ時なし、鴻業恢恢累劫に播す。上來特地の慶讚、都てこれ化門の直餘、諸仁者還つて大士頂門、別に正法眼あることを知る麼、即今分明點開し去らん也。筆を以て空に點じて云く、「毫頭點出す大光明、凡聖含靈同一眼。」

天龍寺三聖安座

妙性圓明にして變通を絶す、恢恢として包裹す十方空、無邊の徳用無邊の智、盡く衆生方寸の中

- 此の華藏世界海は是れ毘盧舍那。
- ① 三曼跋陀。梵語なり、此には普賢と譯す。
- ② 一毛。華嚴入法界品。
- ③ 十種願海。華嚴普賢行願品、一、禮敬諸佛、二、稱贊如來、三、廣修供養、四、懺除業障、五、隨喜功德、六、請轉法輪、七、請佛住世、八、常隨佛覺、九、恒順衆生、十、普皆回向。
- ④ 汪洋。深くひろきこと。
- ⑤ 湯瓶。華嚴離世間品、一を問へば十を以てを云ふ。
- ⑥ 圓融。臨川寺の佛殿を扁して、圓融道場といふ。
- ⑦ 直餘。塵垢秕糠といふが如し。

に在り。恭しく惟れば、摩訶毘盧遮那無上世尊、三曼跋陀大士、文殊師利菩薩、無相中従り、不具の相を現す。如然の大智、暗に非ず明に非ず、法爾真慈、適もなく莫もなし。互に主伴と爲つて、以て事理圓融の儀を表し、權に中邊を示す。寧ろ昇降差別の域に墮ちんや。懿い哉、如來の境界、淺識商量を超ゆ。萬象森羅、三聖にあらずといふこと靡く、羣生倫類皆十身を具す。赤條條明歴歴、昔年室を塵竭に掩ひ、今日門を本山に開く。古今兩般なく、隱顯同一座、諸仁者還つて此の一座子を見る麼、薰風自南來、殿閣生微涼。

三會院彌勒安座

大功元安排を藉らず、一戸才かに開かば萬戸開く。刹刹塵塵是れ都率、下生謂ふこと莫れ當來に在りと。恭しく惟れば、彌勒菩薩摩訶薩睡、千尺の尊軀、光豔法爾として圓備す。萬徳の妙相、秀媚集めて大いに成る。慈を垂るゝこと、無縁より出づ。梅哆喇耶の稱、顰蹙も也た耳を悦ばしむ。徳を布いて法界に徧し、阿鞞跋致の用、闍提も尚ほ心を傾く。補處の記を受け、且く一生を約す。不退輪を轉じて、焉んぞ三會に限

らん。傳へ聞く因地、樓閣の境を觀て、大心を發すと、知らず今日宮殿の成るを見て、何の想をか生ず。曲躬深く揖して云く、「良哉大士此の中に處して、指示す人人同一座。」

南禪 大光國師の爲の入祖堂

去來蹤を見ず、出沒何の象を作す、一段の大光明、古今兩様なし。伏して惟れば、前住當山、勅諭普照大光國師、去就 軒昂、操履清爽、光華を以て懷に介ます、唯韜晦を將て望となす。一時應世、利錐囊を出で、兩處住山、鈿斧掌に在り、大應室中、曾て選佛の魁科に登る。皇帝陛下、敕して國師の金勝を諡す。便ち見る少室の燈光、増熾に増聯り、虚堂の門戸、愈高く愈廣きことを。盡く謂ふ、去年化權を攝す、誰か知る今日真相を露はすことを、真相既に露る、還つて此の老安身の處を見る麼。牌を舉起して云く、「公憑皎然疑謗を生ずること勿れ。」

太平和尚 正統庵入祖堂

祖林の翹楚果を結ぶ、霜露を待たず、天産の精金、柔を致すこと、豈に煖烹を假らんや。謂つべし越格の俊流、寔に是れ克家の正統、平生數刹

- ① 適莫。非常にすきさらひ。
- ② 懿哉。よし、美なること、懿乎と同じ。よいかたとほむるなり。
- ③ 十身。華嚴教門指掌に云く、一、菩薩身、二、願身、三、化身、四、力持身、五、相好莊嚴身、六、威勢身、七、意身、八、福德身、九、法身、十、智身。如來の一身自らはくの如き十身あり。
- ④ 三會院。臨川寺の中の三會院は、夢窓國師の塔所なり、曆應二年に師六十五歳に預め遺誠を書す。
- ⑤ 千尺。彌勒下生經に、身の長け千尺云云、端正無比なり。
- ⑥ 無縁慈。菩薩、平等心を以て一切衆生に攀緣すれば、自然に益を獲といふ三緣慈あり。
- ⑦ 梅哆喇耶。梵語、此に慈といふ、彌勒を慈氏といふ。

- ⑧ 雙頭。つんば、ころ。
- ⑨ 阿鞞跋致。梵語なり、此に不退と譯す、不退位の菩薩のこと。
- ⑩ 闍提。闍は信、提は不具と譯す。
- ⑪ 一生補處。等覺の菩薩を以て、一生補處となす。
- ⑫ 三會。上に注するが如し。
- ⑬ 樓閣。これ彌勒下生經に出づる故事。
- ⑭ 大光國師。南禪寺、通翁鏡圓禪師、大光國師は勅諭號なり。南浦明に嗣ぐ、萬壽寺に住す、元亨四年正月二十七日寂す。
- ⑮ 軒昂。軒は自得、昂は擧也、たかしといふ意。
- ⑯ 操履。志を守りて改めぬを操といふ、行ふて怠らざるを履といふ。
- ⑰ 利錐。きりをふくるの中にいれるが、きつさを早くみつ

に歴遷す。緇素競ふて庶麻に托す、末後十虛を踏破す。佛祖蹤跡を見ること
と問し、畢竟那裏か、是れ此の老安身の處。牌を舉起して云く、「太平象
なく不象なし、地獄天堂法幢を建つ。」辭世の頌に云く、末後の一句、向下文
長し、處處蹤跡なし、地獄と天堂と。

南禪 雙峰禪師の爲に入祖堂

慧日輝を分つて瑞龍を照す、雙峯の春色衆峯を壓す、流芳千載今日
に至る、五葉花開く又一重。恭しく惟れば、前住當山 敕謚雙峰禪師大
和尚、智象外に遊び、妙環中に契ふ。圓照の燈燄を續ぎ、聖一の高
蹤を躡む。遐邇徳彩に歸し、魔外機鋒を怖る。先輩の坏模を脱略す、單提
獨弄、今時の窟宅を掀翻す。部を發し蒙を撃つ、此れは是れ雙峰禪師、
平生の操履底。諸仁者即今還つて其の真相を見る麼。牌を捧げて云く、
「機を回し、位を轉ず人の識るなし、寂滅場中祖風を振ふ。」

孤雲和尚 正脈庵入祖堂

是れ凡是れ聖、本來空、出沒何ぞ曾て影蹤あらん。若し也た蓋面の帛を
撥開せば、色聲叢裏眞容を見ん。伏して惟れば、前住 乾明山萬壽禪寺孤
雲和尚大禪師、胸次疎なく、語言鋒を藏す。其の才寔に翹楚たり、其の智

關革に非ず。嘉名四遠に飛び、秀氣蒼穹に薄る。佛光の餘輝、燦燦乎と
して燄を續ぎ、龍淵の正脈、滔滔乎として流通す。先輩と徳を並ぶべ
し、後昆の爲に蒙を啓くに堪へたり。建化門中且く此の説を作す、老師
分上未だ崇と爲るに足らず。諸仁者、還つて他の眞實安身の處を見る麼。
牌を捧げて云く、「只箇の公憑囊蓋没し、妨げず奕世宗風を繼ぐことを。」

多寶院欽んで後醍醐院の聖忌に遇ふて御座を奉安す

萬法從來寂場に在り、冤親榮辱封疆を絶す、良哉斯の理自ら昭
著、佛連皇圖共に久長。恭しく惟れば、後醍醐上皇、世表の風采、天選の
儼姿、明兩曜に並び、徳二儀を動す。否を致し賊を致す、人測ること母し。
是れ凡是れ聖、誰か敢て窺はん。怪むこと莫れ仁風扇がんと欲して止むこ
とを。須らく知るべし帝運の時を得ざることを。仙夢已に破る、何ぞ小節
の安縁に拘はらん、御忌斯に臨む、忽ち大祥の歴數に屆る。遺臣各懇誠を
據ぶ、勝善覺路を資け奉る。假令輪王の位に在つて七寶豐饒なるも、争で
か覺皇の身を證して、萬徳圓具するに似かん。従前の毒藥變じて醍醐と作
る、曠劫の無明翻つて正悟を成じたまはんことを。諸仁者、即今還つて

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄 下

ける。
① 大應。南浦の國師號。
② 魁科。宗論ありしとき、延曆。
③ 闕城。東寺。南都の講師と落涼
殿に於て對辯す、首として、
ちしを云ふ。

④ 金勝。試験に及第するを金勝
に名を掛くと云ふ。

⑤ 虛堂。智愚禪師、宋の名僧な
り、南浦の師。

⑥ 太平和尚。妙準、高峰顯日に嗣
ぐ、夢窓と同參、淨智に住す。

⑦ 正統庵。建長寺中佛國國師高
峰顯日の塔所。

⑧ 致柔。老子に、氣を專にし柔
を致す、能く嬰兒の如き乎と
あり。

⑨ 克家正統。易に、子家を克く
すとあり。

⑩ 太平。東坡廿四に、無象の太
平還つて象あり、炊煙起る處
人家と。

⑪ 雙峯禪師。宗源國師、聖一國
師に嗣ぐ。

⑫ 慧日山。東福寺の山號。

⑬ 環中。莊子の則陽に、環中は
虛靜無物の處。

⑭ 聖一。東福寺開山圓爾辨圓禪
師、宋に入り法を無準に嗣ぐ、
敕して聖一國師と諡す。

⑮ 菴。ひおひ、ひよけ、周匝の
義。

⑯ 回機。同安察の十支談に、機
あれば宗を失し、尙ほ知見を
存す、これを大病といふ。

⑰ 轉位。異類中行なり。

⑱ 孤雲。未詳。

⑲ 正脈庵。今の眞如寺なり、高
師直の開基、如大尼の開山な
り、佛光國師の骨髮を安す、
山城葛野郡衣笠村に所在す、
相國寺派に屬す。

⑳ 乾明山。相州乾明山萬壽寺は
佛光國師の開山なり、關東十
刹の一。

㉑ 關革。環成なり、やくたいも